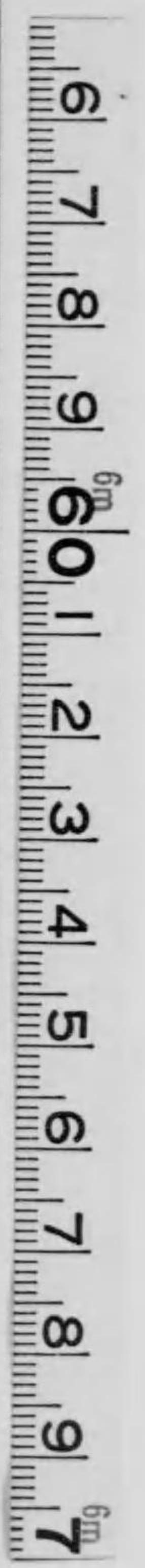


5504
W17



始

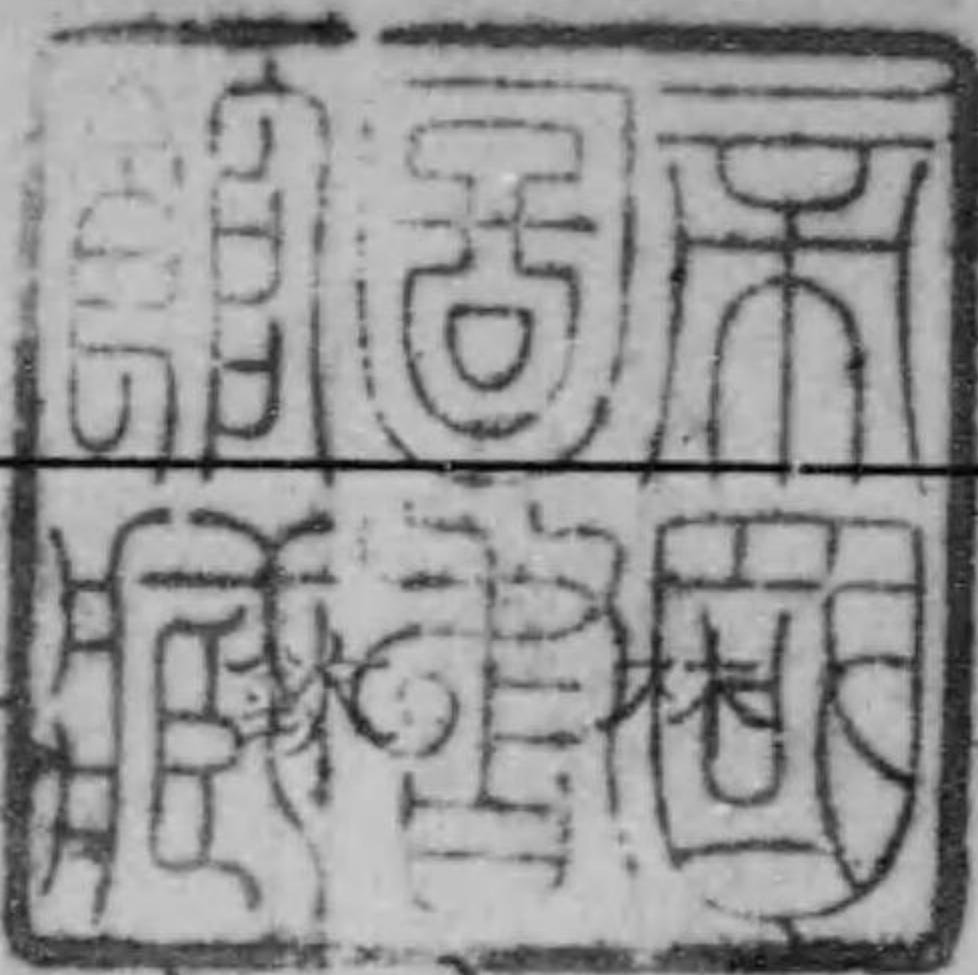


海氣人語



356-86

5504
W17



若 水 書 院 著

液 氣 と 人 語

會 社 武 林 館 發 行

大 正
4. 6. 3
丙 交

汪暕



寂然 汪然

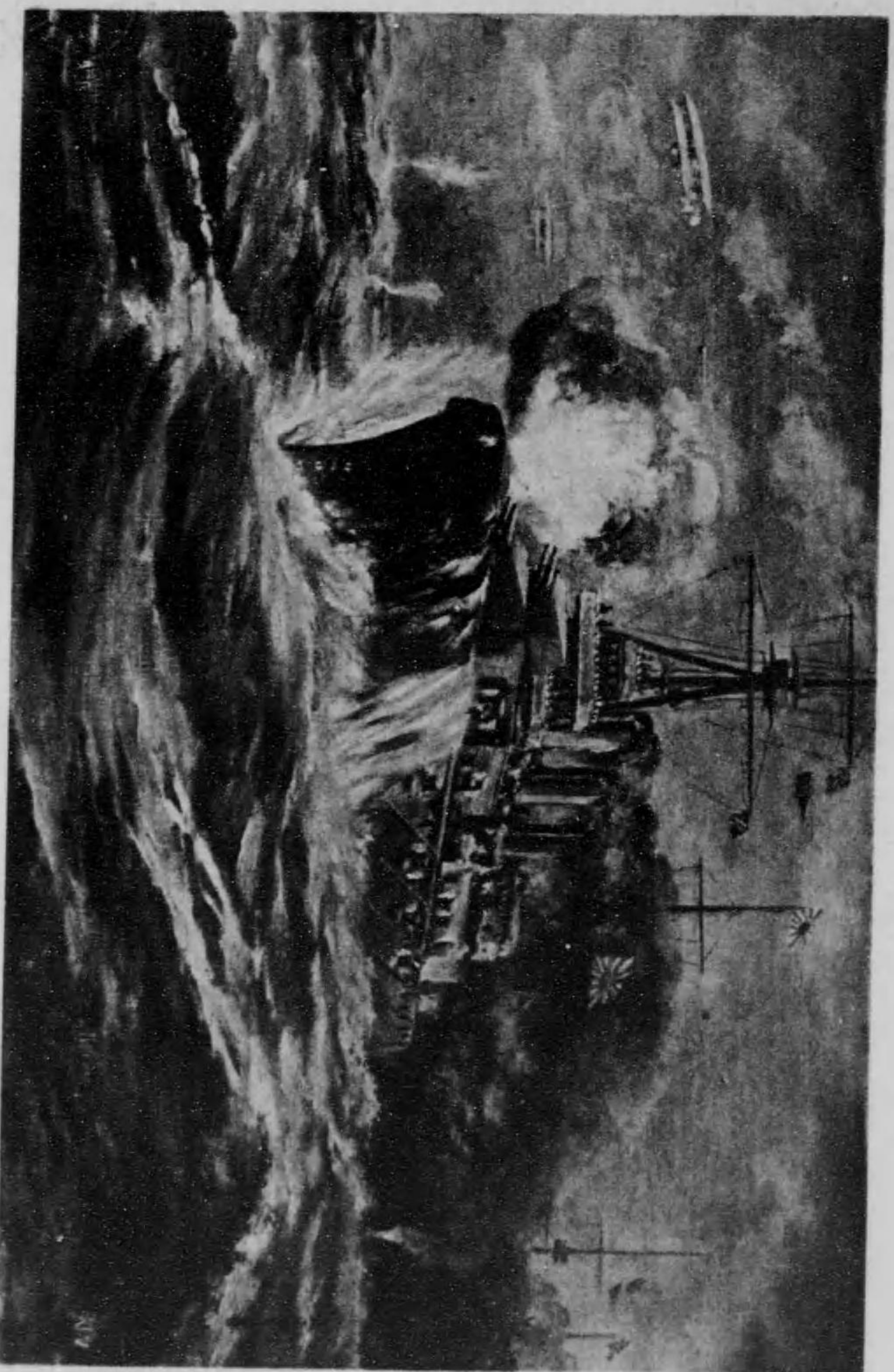
代六郎書



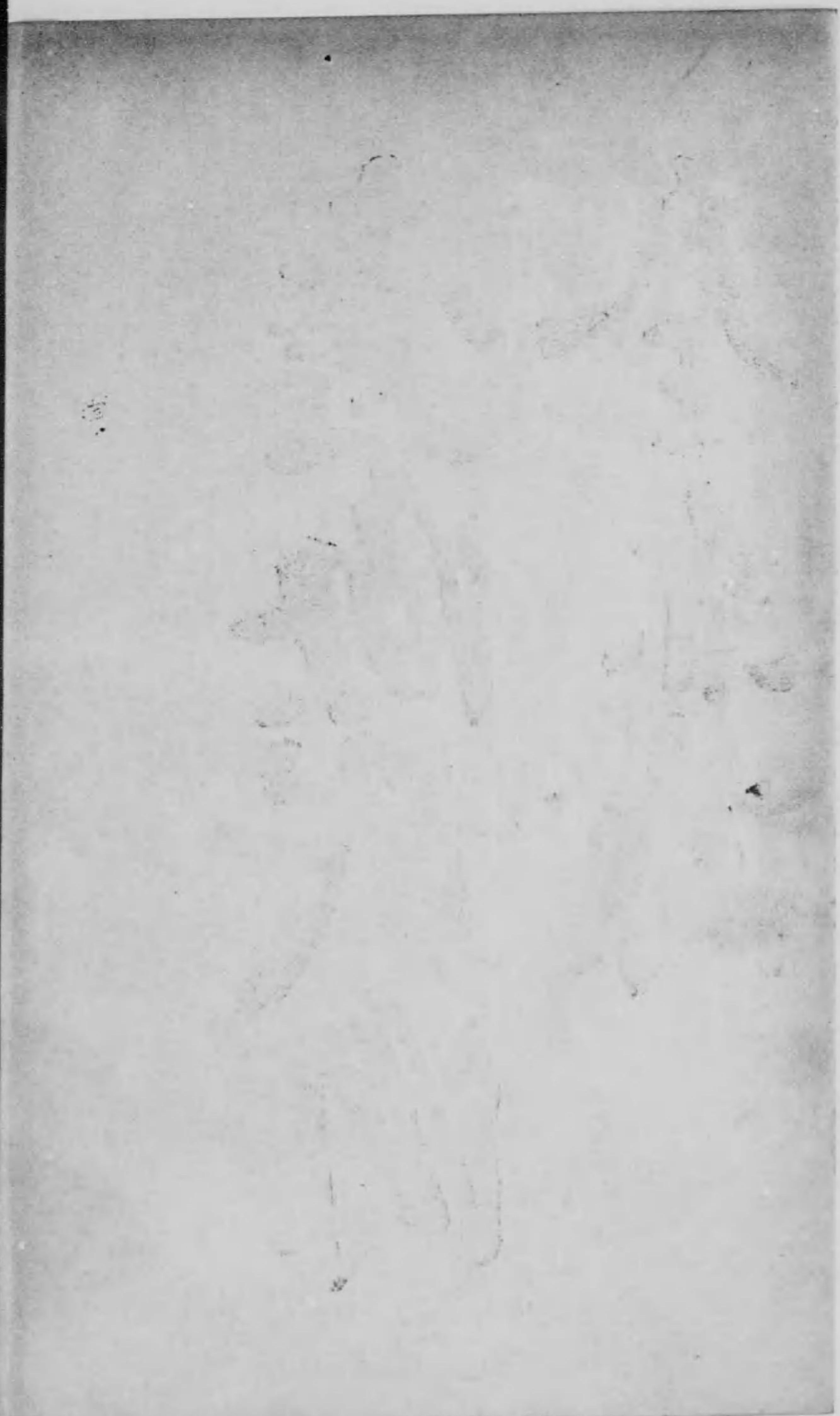
壹海貳海
叁海

高村題





智カの争



自序

海洋の面積は廣濶である。海上の交通は自由である。海外貿易の利益は實に偉大である。又海中の富力は無盡藏である。然るに我が同胞は海洋の趣味を解せざるもの多く、吾人は今日猶其の思想の幼稚なるを遺憾に思ふて居る。

今や世界列強は海富を吸収し、海利を網羅することを競ひ、銳意奮勵して止まない。其の熱心は全く我が國民の因循姑息にして、海氣の沈滞せるとは類を異にする。蓋し國家の富源は、海洋に在りと言ふではないか。

惟ふに我が邦の地勢は太平洋の咽喉を扼し、東西航路の要衝に當つて居る。此の如き有利至便の位置に在る我が國民は、世界の
大勢に鑑み、海上に發展することに努力せねばならぬ。軍事、航海、

2
 海運、通商を始め、漁業、水産、造船、造兵其の他科學上、竝に文學上に、
 多々益々、海洋を研究して、其の趣味を咀嚼すべきことが必要で
 ある。故に一般國民の智識は、此の方面に於て普及するを望み、大
 正青年の海氣を振作せねばならない。由て之が參考にもと思ひ、
 海洋に關する雜話一篇を草し、命じて『海氣と人語』と云ふ。甚だ杜
 撰の著作ではあるが、聊か海國民の訓誡を暗示せんと欲して、微
 意の存ずる處を述べたのである。繙者諸君、此の斷片的饗膳に對
 し、其の調味の足らざるを咎め玉ふな。

大正四年二月

著 者 識

海氣と人語

目 次

一	海洋の研究	一
	海洋學の權威	一
	海洋の深底	三
	海水の水質及び濃度	六
	海水の色	八
	海上の燐光	一〇
	海水の運動	一三
	潮汐、波浪及び海嘯	一五
二	コロンブスの第一次航海	二二
	北米發見の動機	二三

目 次

大西洋の横断 二七

陸地の發見 三三

コロンブス乗船の難破 四三

コロンブスの歸航 四五

コロンブスの凱旋 五一

三 捕鯨船上の一日 五四

大獲物の探求 五四

獵艇の出發 五五

巨鯨の捕獲並に勇壯なる血戦 五八

鯨肉の截斷 六二

捕鯨業の漁利 六五

四 潜水業の冒険 六七

潜水業の沿革 六七

水中の格闘 七二

潜水の危害 七三

五 海上の濃霧 八〇

濃霧に對する船舶の處置 八〇

霧中に於ける信號器 八二

霧中の警戒航行 八五

濃霧中の奇禍 八六

六 海底電線沈設の秘訣 八九

海底電線の送信力 八九

海底電線の資質 九〇

海底電線の沈設作業及び修理 九一

送信力の試験 九六

海底電線の効力 九七

七 出帆旗の上下 一〇〇

萬國船舶信號P旗の用法 一〇〇

目次

八 海上氣象の觀測……………一〇一

商船の荷役並に航海準備……………一〇一

出港前に於ける船員の繁務……………一〇五

海上の苦役……………一一一

簡便なる氣象觀測法……………一二二

天空の模様……………一二三

雲煙の形態及び色彩……………一二三

風向氣溫氣壓等の觀測……………一二八

潮汐と風波との關係……………一二一

九 マゼランの大航海……………一二三

古今獨歩の快舉……………一二三

マゼランの壯年時代……………一二四

西班牙王の命を奉じ征途に上る……………一二六

部下將校の叛逆……………一三〇

十 極地に於ける氷海の探險……………一四四

マゼラン海峡の發見……………一三六

太平洋の横斷……………一三七

艦隊の歸航……………一三九

マツタン島の征伐並にマゼランの戦死……………一三九

エスキモー人の生活……………一四四

氷海の跋涉……………一四六

大風波の急襲……………一五一

糧食缺乏……………一五五

十一 ケプテーン、クークの遠航……………一六五

幼時の航海及び英海軍に於ける閱歷……………一六五

布哇の發見……………一六八

クークの人格……………一六九

蕃民の襲撃並にクークの横死……………一七二

目次……………一七二

十二 ロード、ネルソンの偉勳……………一七五

英海軍に於ける閱歴及び英佛戦争に於ける武功……………一七五

トラフハルガ―の海戦……………一七九

ネルソンの負傷……………一八七

ネルソンの臨終……………一九〇

十三 弩級戦艦の價值竝に列強海軍力の比較……………一九五

弩級戦艦の武力……………一九五

艦型の對比……………二〇一

世界列強海軍の大勢……………二〇二

十四 海軍軍器の進歩……………二一一

戦艦と装甲……………二一一

大砲……………二二一

水雷……………二三一

驅逐艦及び水雷艇……………二四三

潜水艇……………二四六

機關……………二五二

無線電信……………二五五

十五 航海術の起源……………二六二

太古時代の航法……………二六二

アーゴナウトの航海……………二六六

希臘羅馬人及び北歐人の航海……………二八二

十六 我が上代の航海……………二八六

皇祖皇宗の偉業……………二八六

我が國民性の剛勇……………二八九

十七 徳川光圀と快風丸……………二九八

水戸義公の遠略……………二九八

公の造船事業……………二九九

快風丸の北航……………三〇三

目次……………三〇三

8

十八 伊達政宗と支倉常長 三一〇
 海上經營の雄圖 三一〇
 支倉常長の歐洲航海 三一〇
 十九 船舶の歴史 三一七
 船舶構造上の種別 三一七
 西洋形船舶發達史 三一八
 二十 貿易と國力 三四二
 貿易業の盛衰 三四二
 世界の海運業 三四九
 世界の造船業 三五二

海氣と人語目次終

海氣と人語

若林 欽著 竝畫

海洋の研究
 海洋學の權威



最近に於ける科學の進歩は、吾人をして幾多有益の智能を收受するを得せしめ、從て社會の文化を齎せること甚大であるが、就中新奇にして應用の範圍廣く、最も趣味深きものを求むれば、吾人は海洋學の研究を以て第一に推すのである。

夫れ海洋は地球全面積の殆んど四分三を占有し、其の廣大なる水域中に棲息成形せる森羅萬象は、其の數幾千萬なるを知らず。之を網羅して海洋上に於ける凡百の現象と推移の迹とを研究するものは、即ち海洋學の權威にして、日新學理の闡明する效果に外ならない。猶之を明確に述べれば、海洋研究の學者は自己の領分として、地球全面積一億九千七百萬方哩の中、一億四千二百萬方哩を



の窺察する眼光に對して、深奥廣漠全く穿鑿せられざるの觀がある。其の暗綠蒼翠の深淵は寂々

有する譯である。

陸上に在ては探検者の爲め、未着手の儘遺棄さるゝものとは、殆んど之れあらざる有様である。絶島離嶼又は大陸の不毛地などにて、百千年來夫々其の秘密を開發され、探檢され、地圖に載せ測量を行ひ、産出物の數量或は山川溪谷の狀態等に至るまで、幾多の書冊に記述せられ、哀然たる卷秩に編纂されて居る。然るに海洋は之と趣を異にし、往古より早く開らけたる舊大洋にてすら今猶吾人

寥々として、日光を遮蔽し、海水の流動遲緩にして内外に循環を生じ、凍結せる淡水よりは稍高
温を保てるが、其の幽玄隱微の中に、如何なる神秘が包蔵せらるゝのであらうか。吾人は僅に其の
一斑を知るに留まる。然れども海洋中最大なる深底は、近頃まで一般人士の想像せし如く眞個に孤
獨瀕死の境遇ではない。其の常闇にして廣漠なる處に、博物學者の下せる浚渫機が爬入したれども、
生物類の發見されたるは比較的極少であつた。

海洋の深底

吾人は今日海底の狀況を察知すると雖も、昔日ソロモン王時代の海員が會得せしより甚だ優りて各
處の海底を詳悉せる義にもあらず、唯其の差違の大なるは器具の進歩と、實驗の年功を閱して居る
に過ぎぬ。嘗て「ソロモン」王は潜水夫の眼光を借りて地中海を測量し、其の温暖なる表面の海水を
調査せるに止まるも、吾人は潜水鐘及び潜水服を用ゐて約二百尺の深淵に降下し、長時間任意に留
まり得るのである。而して大洋の水深は普通海面以下凡そ二海里半を平均の深度とする。吾人が眞
正なる海面上より水深を測知し得るには、測鉛線投下に依るの外、他に良法を知らぬのである。
今を距る三百年前までは、二百尋即ち千二百呎以上の水深は、全く測量することが出来なかつた。

蓋し海底の状況を詳細に研究すべく、始めて組織されたる測量班は、千八百七十二年に起つた。是れ即ち英國軍艦「チャーレンジャー」號である。同艦は根據地を數百ヶ處に設置し、五年間の星霜を費して、世界に於ける各海洋の水深を精測し、深淵に棲息繁生せる動植物の標本を爬羅捜査し、海底土質の如何をも檢定し、各處の水深に對する海水溫度を檢知し、諸生物の愛好する深度に至るまで、種々の方法を以て調査したるは、洵に空前の一大事業であつた。此の測量事業は其後引續きて實施せられたるも、大洋全體の上より見れば眞に一小部分に過ぎるのである。けれども海底の底面が陸地の如く、廣潤平坦ならざることが立證するに至つた。「チャーレンジャー」號に乘込みて自ら遠征に従事したる人の中に、二名の有名なる海洋學の大家があつた。即ち「サー、ジョン、ミュルレー」氏と「ドクトル、フューアール、ミル」氏である。此の兩大家が萬國地理學協會に寄せたる論文は實に高尚にして多趣味を感ずるものであつて、之に依れば海底の状態は明細に説述せられ、頗る新奇の發見と認められた。「チャーレンジャー」號に次で獨艦ガゼツレ號及び米船タスカローラ號とは共に遠征に従事し、殊に米船は米國附近の深海を測量したる方法が頗る精密、用器も極めて完全に、今日と雖も猶一層改良の餘地がないのである。其の論文に依れば、大洋の海底は其の大體の形狀が廣漠渺茫として、恰かも壓縮されたる如き郊原であつて、各處の底面は隆起せる丘陵と、凹窪せ

る溪谷とより成り。其の最大なる水深は大洋の中部よりも、寧ろ海岸近傍の場處に多いのである。目下大洋海底面の形狀如何を知悉することが、海底電線を沈設するに當りて重要不可缺の事項である。從來實測されたる大洋の最大水深は太平洋の南西部なるカーモドック島東側に於て、五千百五十五尋に及ぶ。即ち六哩に足らざること二百五十「ヤード」である。又同處に於て他の鍾測を試みたるに、五千百四十七尋を得た。是等の鍾測は五千尋以上の水深に對する記録なるが、太平洋以外の最大水深は通常四千尋乃至五千尋なるのが多い。太平洋に於て從來知られたる最大水深は西印度島の北方に當りて、四千六百六十尋を得た。然るに印度洋にては四千尋に達する水深は從來見られぬのである。同大洋の最大水深は三千二百尋を超ゆること少許に過ぎぬ。サー、ジェームス、クラーク、ロツス氏は南大洋中南部ジョールジャ洲以南の海面に於て、四千尋の鍾測線を全く繰り出して、猶海底に達せずと報告せりと云ふ。之に依りて考ふれば其の主要を知るに足るのである。北大西洋に於ては多數の海底電線が沈設（現今使用中のもの十五線）されたる爲め、其の水深が最も精密に知悉された。他の海洋に在ても吾人の一般智識が漸次展開されつゝ進んで居る。英國軍艦は常に科學的に調整されたる、測鉛線を用ゐて精測を行ひ、正確なる水深を測定しつゝ、ある。又幾多の商船にもロード、ケルツイン氏測深器を備へ、機會ある毎に未知の水深を測知するに供

せらる。茲に所謂ロード、ケルヴィン氏の測深器は大洋の神秘を啓示するに足るべき構造巧妙なる創作である。

海水の水質及び温度

大洋の水は其の特殊の成分を知ること古來精密ならずして今日に及んだ。茲に詳細なる知識を得んと欲する人々の爲めに之を示さば、海水一千「グレイン」中に

純粹の淡水

九六二「グレイン」

鹽化ソジアム

二七、一ク

鹽化マグネシウム

五、四ク

鹽化ポタシウム

〇、四ク

臭化マグネシヤ

〇、一ク

硫酸マグネシヤ

一、二ク

硫酸石灰

〇、八ク

炭酸石灰

〇、一ク

を混し、其の殘量二、九グレインは硫化水素、鹽化アンモニヤ、沃度、鐵、銅及び金銀の極少量である。海水中に銀を存する證據は、嘗て智利國ヴァルパレイソに於て、多年の間海水に浸潤せる船底より銅板を得て、之を檢せしに、海水の分解作用に依りて銀の痕跡あるを知つたと云ふ。

海水の成分は世界到處の海洋皆同一である。けれども溶解せる鹽分の多少は著大の相違がある。例令へば大西洋の海水は黒海の海水よりも多量の鹽分を有し、地中海の海水は猶一層鹽分に富んで居る。然るに紅海は更に鹹水の度を増し、死海、ユータ大鹹湖(北米)若しくは「アルミヤ」湖(波斯)の如きは、普通の海水に比して六倍以上の鹽分を有して居る。前記紅海以下各鹹湖はいづれも多少の陸地に圍繞され、太陽の溫熱を受けて水面の蒸發甚だ旺盛なるに、同地方の氣候乾燥にして降雨の缺乏せるより、水分に著しき鹹味を含み、從て濃密の度を増す。或る精妙なる算定に依れば、大洋及び海灣の水中に含有せる鹽分を全く分離して、陸地上に瀾漫せしむるときは、深さ三十呎に及ぶならんと云ふ。海水は之を河水に比すれば著るしく透明にして、日光は約六十呎の深さまで侵入する。此の清澄透徹なる海水の混濁は鹽分と同じく、海岸より遠ざかるに従ひて其の度を増し、低緯度の海面よりも、高緯度の洋上に於て概して著るしきを例とする。裏海に於ては、天氣靜穩なる日に三十呎の深底に棲息する植蟲若しくは海藻類を、水面より容易に認知し得べく、或る北部の海洋

海水の色

に在ては四千呎乃至五千呎の深底を、水上より伺ふことが出来ることへ確報されて居る。

海水の色は絶へず變化して居る。其の變色の原因は主として日光が水中に透入して、浮遊せる無数の極微分子を通じ、濾過作用を生ずるからである。試に一玻璃管に海水を充たすときは、全く透明無色にして何等の異状を見ざるも、若し之を多量に貯ふるときは、種々美麗なる色彩を現出し、其内最も普通なる色合は、誰人も能く知る如く鮮明なる淺藍色若しくは紺碧色である。快晴靜穩の日に天空が能く此の色調を保ちて、距離の遠隔せるに應じて、徐々に其の濃艶を和らげ、遂に青空中に融解し去るを認むるのである。

吾人が既に多量の鹽分を含有すと説述したる、彼の地中海の水色は最も藍青色を呈し、極地の水は赫灼たる紺碧色を現はし、中部大西洋は清新快活なる藍青色を示し、太平洋は殆んど黒青色に近きを例とする。海岸附近の水色は綠色若しくは暗綠色を有するも、時としては之が黒色或は褐色に變ずることがある。勿論天色と海面とに於ける種々なる變動に依りて、水色にも多種多様の變化を見るのであるが、甚だしきは灰白色或は鉛色に見へ、又牙へたる鮮綠色となることなどある。

靜穩の日に於て日没時の海面は紅珠黄金の氣色輝き、綠翠銀紫の波瀾を生じ、光彩陸離として美觀比するに物がなない。

各地方の特殊なる關係に依りて、海水淺きときは海面に濃厚なる反影を生じ、種々の變化を起すことがある。海底に白砂あるときには灰青色或は林檎色の淡緑を帯び、白堊質の海底なれば鮮紅色を現出する。若し海底に黄砂あれば、水面の綠色は自ら陰氣に見へ、岩礁あれば附近一帶の水色は深藍色或は濃綠色となる。「ローアング」灣(亞弗利加西岸)は赤色の海底に依りて其の水色濃紅色である。紅海には無数の小海藻が海底に叢生し、水面を紅色となせるより、所謂紅海の名を得た又之と同様の状態が新西蘭の沖合に於ても見らるゝ、同地の海上には夥多無数の極微生物が浮遊して、漁夫は之を鯨卵と呼んで居る。如何なる理由に基きて斯く名付けられしか全く詳らかならざるも、彼等は此の如く稱するを以て満足して居る。蓋し鯨は哺乳動物なれば、普通の魚類の如く産卵することなく、唯其乳兒を胎生するのである。

佛國南部の沼澤地を浸せる海水は、其色亦紅である。其の原因は顯微鏡の力を借らざれば、到底見る能はざる程の極微なる紅殼蟲の蕃殖に依るのである。西藏の分水界に位する赤水の鹹湖も、之と同一なる原因に由りて其の特色を發すると云ふ。是等の極微生物は鹹水が一定の量に凝聚するに非

ざれば、肉眼にて見ることが難いのである。而して其の水が濃密の度を過ぐすときは忽ち枯死すると云ふ。

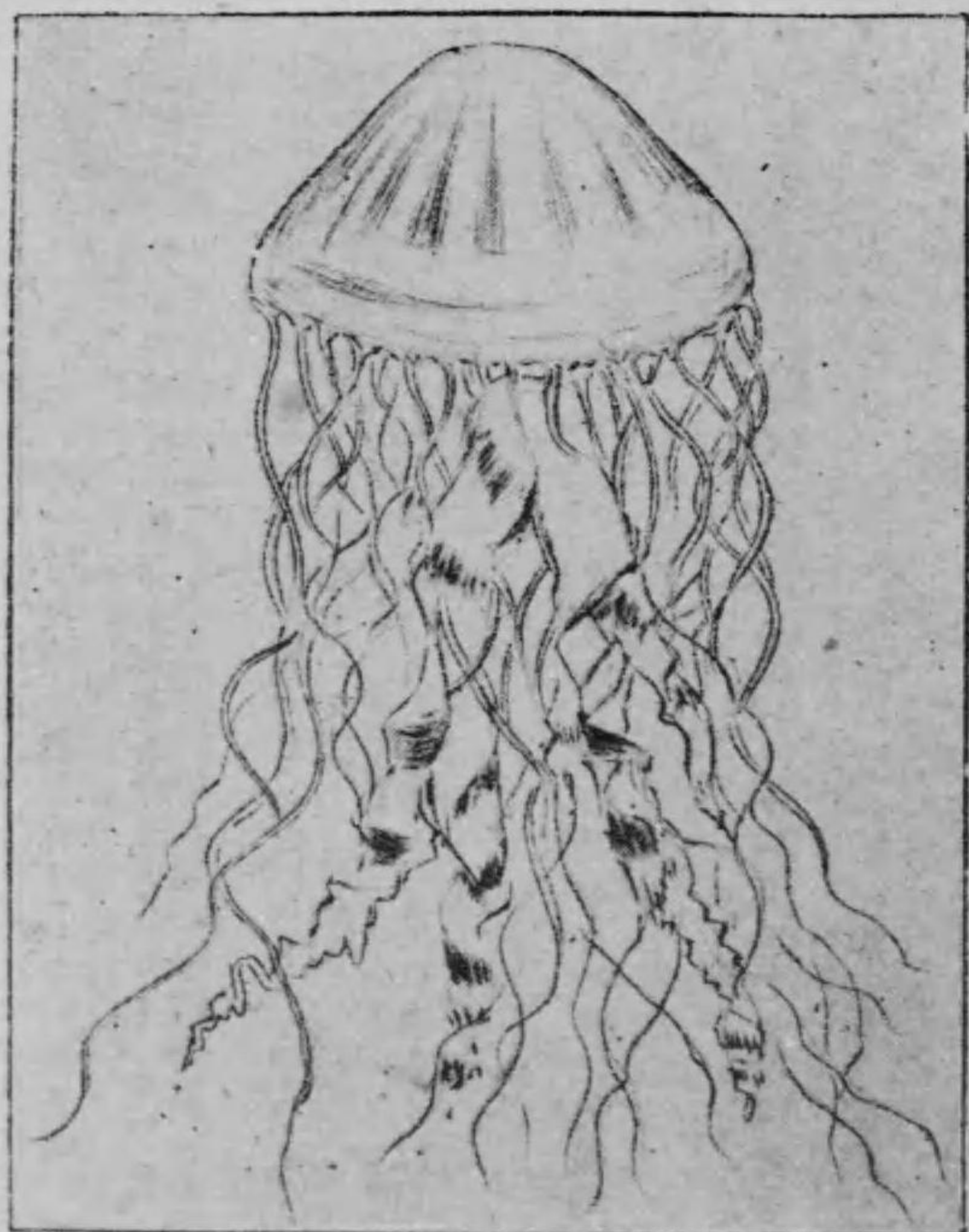
日本の近海は稍黄味を帯び、「カナリー」島西方の海水は綠色強く、印度洋の中部「マルデイヅ」群島の周圍に於ては黑色を現はす。秘魯の首都利馬の貿易港「カラオ」の海上は橄欖色、西班牙國の南角たるバーマス岬附近及び亞弗利加西岸ギニヤ灣の沿海は乳白色に見ゆる。地中海も時としては希臘群島附近に於て紅色を帯べることがある。此の如く白色或は黒色の海面が如何にして生ずるやと云ふに、靛々たる氷海若くは暗黒なる風雨の爲め海水を攪亂するより、各其の名稱を受けたのであらう。

海上の燐光

海上の燐光は倏忽發生して、人目を眩惑せしめ頗る壯觀を呈する。澎湃たる波瀾を犯して突進する船舶は、往々其の船尾及び舷側に於て飛沫の發光に依り、恰かも赫灼たる火炎の中に在りて行くが如き感がある。此の如き海上には無数の燐光蟲ありて、波浪の間に浮沈するが故に、自ら一團の閃光を發し、廣大なる火の海を作成するのである。大荒の天候には光輝燦然たる波浪が湧起して、銀

色の泡沫を飛散することがある。是れ乃ち燐光蟲の光氣が捕捉せられ、彼の閃々たる發光微分子が互に追隨し將た結合し、或は其の支持力を失ひ或は協同して新銳の光力を發する爲めであらう。

太古時代より海上の燐光は、幾多の航海家に依りて注視されたのである。其の光輝は燦爛として波浪の凸起部に起り、其の波の破碎するや燐光忽ち四散して跳亂し、或は舵機に粘著し或は船上に躍り込むことがある。又岩礁の周圍に波浪打ち碎くときは、燐火は俄に燦爛として發生する。かくて熱



水母 燐光蟲の種族

帯地の海面に於て、天候靜穩の夜間には、其の現象は眞に不可思議である。此の燐火は大概水面の上

下に浮遊する、無数の極微蟲類の存在する爲めに起る。其の小蟲の形状及び組織は多種多様に亘りて複雑を極めて居る。水母、有殻仔蟲等の如き極微生物は皆其の燐光を發生するものである。最も著名なる軟體動物中には奇異なる種類が澤山あつて、長さ約一吋の粘液囊を有するものがある。此の奇魚船の上甲板に飛び込めば、白熱の状態に熱せる鐵杆の如き光輝を發生する。サー、ジョン、ハ

ーシエル氏は之を説明して、

静水の面には燐火の甚だ奇怪なる形態を認め、直線狀の多角形を以て若干平方呎の水面を蔽ひ、發光するときは急速に光力を發散し、附近數歩の間は光明赫灼として輝く、是れ恐らくは巨大なる水母であらう

と云つた。蓋し燐火は夏夜靜穩の日には到る處の海上に殆んど皆見らるゝのである。殊に熱帶地方の海上、若くは大西洋の中部には最も多い。

海上の燐光は亦他の原因より起ることもある。若し動物類の體質が水中に分解するときは燐光を生じ、腐爛せる魚肉などは強烈なる光輝を發するのである。池沼の水面に泛べる死魚の如き爛熟せる動物體に在りては、脂肪質の大補布を生じ、從て脂肪は水面に累積し、忽ち全池水の上に擴散するのである。若し水面を攪亂するときは、一層其の放射の勢が盛となりて燐光を惹起する。古來歴史

上に有名なる彼の肥後國有明灣の不知火の如きも、亦燐火の顯著なるものにて、盛夏の夜干潮のとき、最も明瞭に發生するは全く之が爲めである。謹んで古史を按ずるに、景行天皇筑紫を巡狩し玉ふや、海路葦北小島(御所浦)より八代灣に航せられ玉ひしに、日暮れ夜暗くして海岸に著くこと難く、遙かに耿々たる火光を望み玉ひ、詔して御船を火の在る處に進めしめ漸く海岸に著御さるゝを得た。天皇火光ありし處を尋ね玉ひしに、國人八代縣豐村(今の下益城郡豐川)と奉答し、其の火はと尋ねられしも、人の焚きしものならざりしことを知り玉ひ、遂に其の國名を火の國と命じ玉ふたのである。

海水の流動

吾人は便宜上世界の大洋を五分して、太平洋、大西洋、印度洋及び南北兩水洋となせるが、實際大洋は一體の海洋にして、決して區分する能はざるのである。此點は吾人の記憶に留むべきを必要と思ふ。

大洋の水は全世界を一周して流動する。例へば人體中に血液の循環する如く、海水の周流は一時も止むことがない。大洋に海流あることは「ドクトル、カーペンター」氏に依りて始めて發見されて

大略左の如く説明されてある。

誰人も知れる如く、固形體にまれ液体にまれ、又は氣體にまれ、凡ての物質は熱せらるれば膨脹し、冷却されるれば、收縮するを常とする。今地球の南北兩極は甚だしく寒冷なるため、其の海水は自ら皺寄りて收縮し、水平面が低下する。然るに大洋の水面は各地同一なる爲め、各大洋に區々の異なりたる水平のあるべき筈がない。故に極地に於て低下せる水平は温熱帯の海水を以て補充されて、再び其の高さを増加するに至るのである。かくして遞次に或は收縮して密度を増し或は膨脹して蒸發し、低下せる海面は温熱帯の海水より稍々其の重量を加へ、自ら兩極より流動を始むるのである。

是に於て地球上の海面には絶へず二様の傾向を生じて居る。(第一)極地の水平面は常に低下して温熱帯の海水を誘致しつゝあるに對し、(第二)温熱帯の海水は極地に流注して冷却され、極地海上の全部は重量大に増加して、低下せる部分は再び赤道の方に壓流さるのである。而して吾人は左記二種の恒久海流を有する。

- 一、赤道帶より極地の方に流動する皮流。
- 二、極地より赤道の方に流出する底流。

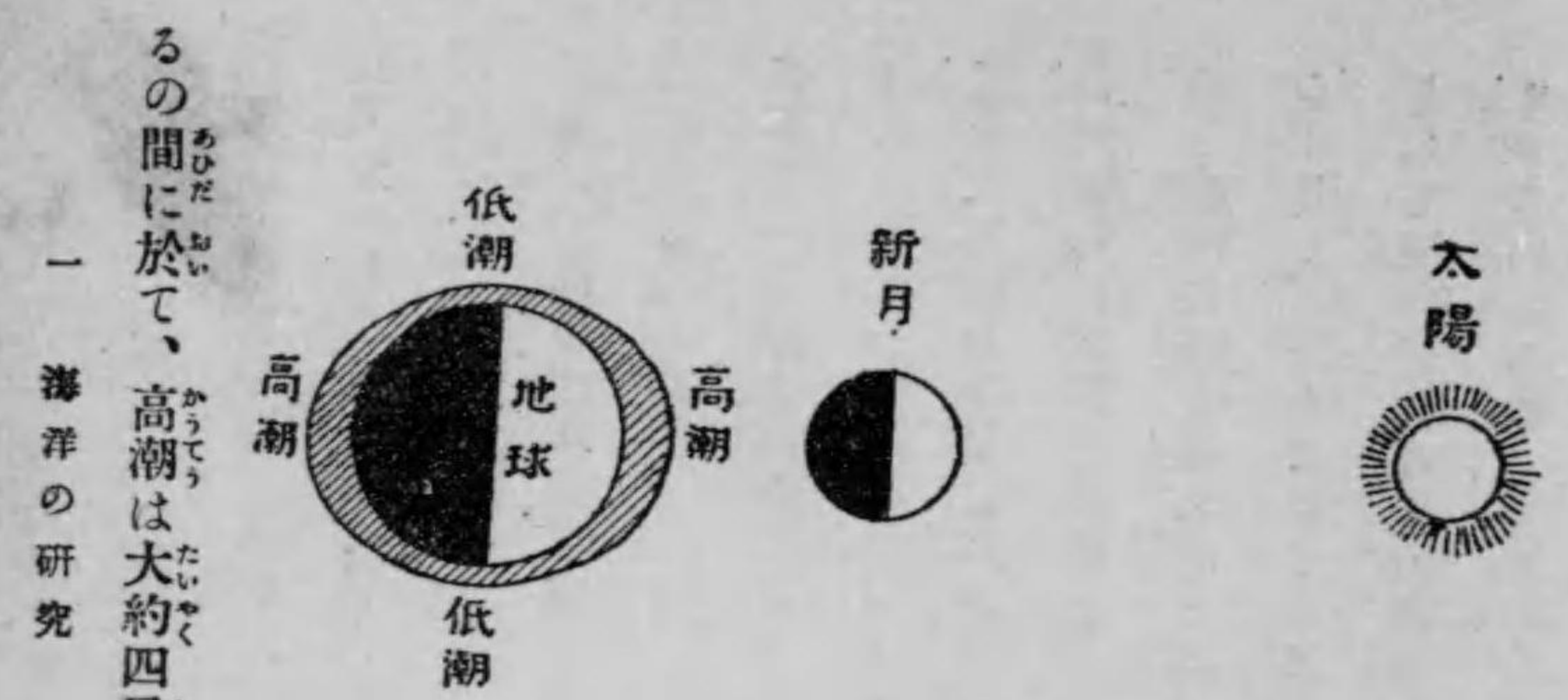
猶之を詳説するに、世人の熟知する如く、地球は常に其の軸を中心として、東方に回轉して居るので、球面の海水をも東方へ移動せんとする趨勢を興へる。然るに赤道地方の球面は廣濶なるを以て其の運動は固より他の場處に於けるよりも疾速なるの結果、偉大なる皮流が、赤道帶より兩極の方に向つて起り、而かも其の方向は必ずしも眞正なる南方、若くは北方に流れず、唯赤道帶に於ける地球回轉速度の急なるに起因して、北東方若くは南東方に向つて、流動するのである。之に反して兩極より赤道の方に流失するものは、地球回轉力の稍々緩慢なる爲め、漸く赤道帶の急轉せる處に達するに従ひ、次第に後方に驅逐さるのである。以上は大洋海流に關する有名なる學説であつて、近世科學上大發見の一である。

此の他に、又海洋流の大運動を生ずる原因がある。是は陸岸に接近する海上に於て、水面の一高一低に依りて、吾人の日常目撃する潮流に外ならぬのである。之に對し大小二種の波浪が各處に隆起し、日々地球の海面を一周する。其の大なる波浪は月の引力に依りて生じ、小なる波浪は太陽の引力に依りて起るのである。

潮汐、波浪及び海嘯

月の潮汐を發生する大波浪は、月の一日毎に起り、即ち二十四時五十四分を以て地球を一周する。又太陽の引力に依りて起る小波浪は、二十四時間を以て地球を一周する。而して太陽及び月の爲めに發生せる兩波浪の隆起と陥没とが、時として相一致することがある。若し此の現象が起るときは吾人は之を大潮と名づくる。即ち兩波浪の併合によりて、潮汐の満つるとき海水は最高度に達し、其の退くときは最低度に減るのである。大潮の生ずるは數日間小潮の連續せる後である。小潮とは即ち海水の漲落共に低小なるものである。太陽の潮汐は地球を一周するに、月の潮汐よりも稍々速かにして、日々若干時間づゝ進み、大潮より約六七日の後、太陽の波浪の隆起部と月の波浪の陥没部とが相合し、半ば之を埋没するに至るが爲め、此の如き結果を生ずる。何故に月の潮汐は太陽の潮汐に比して著大なるやと云ふに、是れ甚だ簡單なる理由である。月は地球を距ること近くして、太陽と地球との距離の四百分一に足らず。假令月の引力の全部は太陽の引力よりも弱小なりと雖も、月は地球に近きが爲め、却て其の牽引力の旺盛を來し、事實上月は太陽の潮汐の高さに約二倍半の潮汐を發生する。

大潮は新月又は満月のときに起る。このとき海水は其の他のときよりも甚だ高く昇り、又甚だ低く降る。月の上弦若くは下弦のときは所謂小潮を生じ海水の高低は著しく起らない。實際大潮のときは



因原る起の潮大

には最大潮が新月若くは満月の當日に起らずして、一回或は二回の潮汐を隔てゝ生ずることが通例である。英谷海峡中ド一ヴァー海峡の最大潮は新月若くは満月の後、四回目の潮汐に起り、テムス河にては五回目になる。

其の理由は「アイルランド」の西岸に於て高潮を發生する同一の潮波が、一は十二時間を以て英谷海峡に達し、他は二十四時間を以て「テムス」河に達するからである。

一年間を通じて最大高潮は春分並に秋分の時である。即ち三月の下旬と九月の下旬には、各地に最大高潮を實見するのである。

高潮と低潮との間に於ける水平面の差を干潮差と稱する。是は各地海岸の形状に依りて著しく異なる。

我が帝國の沿岸に就て見るに、北は北海道より南は九州に至るの間に於て、高潮は大約四尺乃至十尺であるが、瀬戸内海の吳港や宮島にては十二尺、肥後の三

一 海洋の研究

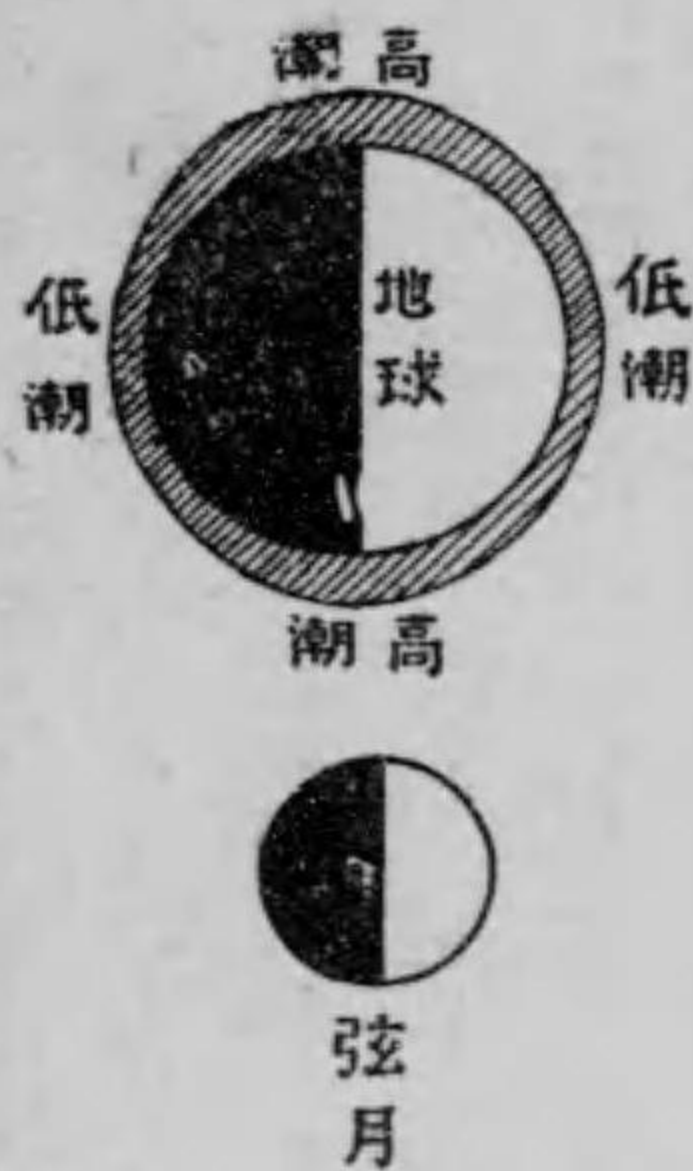
角にては十四尺半、筑後の三池にては約十八尺、朝鮮仁川にては實に三十三尺に昇るのである。之に反して出雲以東、本洲の日本海沿岸と佐渡隠岐等にては、潮汐の高さが甚だ小にして、多くは二尺乃至一尺であつて、佐渡の二見港にては約八寸に過ぎない。大洋の中央に在ては潮汐の高低は甚だ少ない。例へばセントヘレナ島にては干満差僅かに三尺あるのみ。南米西岸にては、稀に九尺に及び、印度西岸にては十八尺乃至二十二尺、又ギアンベール灣(印度)にては三十六尺乃至四十三尺に超ゆるのである。

世界第一の最大高潮はファンデー灣(加奈陀東岸附近大西洋に面す)にて起る。同灣はノヴァスコシヤとニューブランズウィックとを連結する地峽の南方に展開する爲め然るのである。同處の高潮は五十尺乃至七十尺に及ぶ。然るに同地峽の北方に位する一海峽にては七八尺以上に昇らない。我が鳴門海峽は四國と淡路との間に來まれ、漁船及び小漁船を通すべき水路なるが、最狭所約十町にて、其の前後に在る播磨灘と紀伊水道とは常に潮時を異にし、而かも一方が満潮の時に他方は干潮である。因て同海峽に於ては其の水平面に三尺以上三尺六七寸の差を生じ、海水は激湍の形をなし轟々として流れ、其の速力の最大なるときは一時間十海里を超へ、諸處に直徑二丈許の漏斗狀の渦を生ずるのである。

太陽



潮汐の最も珍奇なる現象を呈するものは海嘯と稱するものにて、其の起因は左記の如くである。最大高潮を蒙る一河流が巨大なる河口を有して、海洋中に擴延するときは、龐大なる潮波が河中に侵入して、忽ち狹隘なる兩岸に氾濫する爲め、海水は河口を壅閉して流勢を阻め、水量一處に停滯して遂に大波浪を湧起し、猛烈なる勢にて陸地を壓迫し、雷鳴の如き音響を伴ふに至る。



小潮の起る原因

一 海洋の研究

古來海嘯の最も激烈なりしものは、支那の錢塘江印度の「ブラマプトラ」「ガンジエス」「ブーグリー」及び印度河等に起つた。今錢塘江の海嘯に就て一言して見やう。

同所は杭州府の對岸にありて、商業繁盛を極め支那國內重要な位置を占めて居る。其の慘害のとき、錢塘江の一泊船より俄に叫聲が發して大

海嘯の襲來を報じたれば、人々狼狽して戶外に出づれば、思ひきや、光輝燦たる白色電纜の如きものが、全灣に横溢して、擠がり來て衆人の眸子に入り、遙かに遠き河口より捲き起りし激浪は跳亂掀舞して轟然たる響は雷の如く、忽ち叫喚悲鳴する舟人の大半を覆溺し、異常の速力を以て突進すること、恰も大瀑布の迸る如き壯觀を呈し、高さ約三丈幅五海里の水壁が河上に湧りてあらゆる物を破壊呑噬した。此の雄偉猛烈の光景は唯一瞬時の外に出でず、波浪は即刻錢塘江を過ぎ去りしが壓力、水量及び速度は杭州府に近づくに及んで漸く減じ、同府の上流一海里許にて遂に全く消滅したのである。落潮より漲潮までの變化が殆んど瞬間にて、波濤の至るや漲潮を起し、數刻の後俄に落潮に變じたるのである。此の如く落潮より漲潮に變する倏忽の波動は、即海嘯の特性である。昔者安政元年、伊豆の南海岸に大海嘯起り、下田の市街を一掃し、龐大なる波濤は遠く北米桑港附近に達し、又今より三十年前即ち千八百八十三年瓜哇の「クラカトア」火山破裂して、世界を一周したる大波浪を起し、其の速力は一時間實に殆んど四百哩に達し、「クラカトア」島附近に於て波浪の高さ五十尺乃至八十尺に及び、數多の村落を流失し數千の民家を倒潰し、大船を一哩以上の内陸に押流したと云ひ、又近くは去る明治二十九年三陸大海嘯のときは、最初海岸は四五丁の間潮水引退き、後更に大激浪は非常の勢を以て襲來し、波浪の高さ六十尺に超へ、内陸里餘の地に氾濫し、人畜

家財を剽滅し、二百餘里の沿岸、草木まで凡て赤色に變じた。嗚呼其の慘狀實に想像に餘るのである。高潮時は各地相同じからざること、干潮差の各地相異なる如くである。例へば津輕海峡の高潮時は午前零時なれば、北海道東岸及び本土東岸の高潮時は午前零時半乃至一時である。又本土南岸は午前一時半乃至三時半、四國の南岸と九州の東岸は午前一時半、九州南部から沖繩に至ては午前零時半乃至四時、九州の西岸は午前三時半乃至六時。九州北岸は午前五時半乃至六時半、山陰道は午前六時半乃至八時半である。又瀬戸内海の潮汐は紀伊水道より入り込むものと、豊後水道より入り込むものとの二種があつて、其の互に相會する處は讃岐の粟島である。其の潮時率は午前八時半である。又大阪灣にては午前二時半乃至四時半、周防灘にては午前五時半乃至六時半である。若し同一地に就て云へば、高潮時は満月と新月のとき、いづれも殆んど同時に干満漲落をなすのである。新月及び満月のときに於ける高潮時は之を潮時率と名付ける。是等の潮時率は各地異なるを以て、海圖上に一々記入されてある。之が爲め吾人は航海暦を用ゐて月齡を知れば、直に其地に於ける高潮時を算出することが出来る。高潮は毎日約四十分づゝ遅るゝことを記憶して、例へば品川灣に於て満月及び新月のとき、高潮時の平均は二時に十五分前であるとすれば、即ち満月若くは新月の翌日午後二時半であらう。其の次の日は三時十五分である。かくて毎日遲差四十五分を加へよ。

二、コロンブスの第一次航海 北米発見の動機

カステル國(西班牙)より西航し、別世界に達せられんとの創見を標榜して、歐洲全土を震撼したる彼の「コロンブス」の偉業を見るに、其の成功の動機は實に一婦人より出たのである。

「クリストフハー、コロンブス」は伊太利國ゼノアの産にして一機織工の子である。彼は弱冠にして海上に活躍して雄志磊落、屢々遠航萬里の途に上り、或は「アイスランド」の北方百餘里に到り、或は亞非利加西岸に沿ふて南航し、海賊王コロンブスと云へる綽號を有し、究竟なる船長として長年月を経過した。彼れ嘗て海上に剽盜を働きたるとき、戰敗れて其の乗船は沈没し、彼は僅に身を以て免かれ、「リスボン」に逃竄したるが、其時彼の年齢二十四歳であつた。

當時葡萄牙國王の皇弟にして、大航海家たるヘンリー親王の部下に、屈指の良船長バースロミューペレストロと云ふものがあつた。「コロンブス」は此の船長の家に時々出入して、其の愛嬢フィリッ

バとも相識の沖となつた。「コロンブス」は「フィリッパ」の美貌を見て心動き、少時の間之と懇談を通したる後、遂に結婚したのであつた。「フィリッパ」は海員の血脈を受けたる丈ありて、生來海上の趣味を有し、其の父より譲與せられたる數多の所持品中航泊日誌、航海記及び海圖等の如き、何れも慈親の自製したるものを、唯一の重寶として保存して居つたので、之を風采優雅にして、美髮鬘たる愛郎に懇ろに示して、

「スボンロコ」バースロミューの自製海圖を覽す

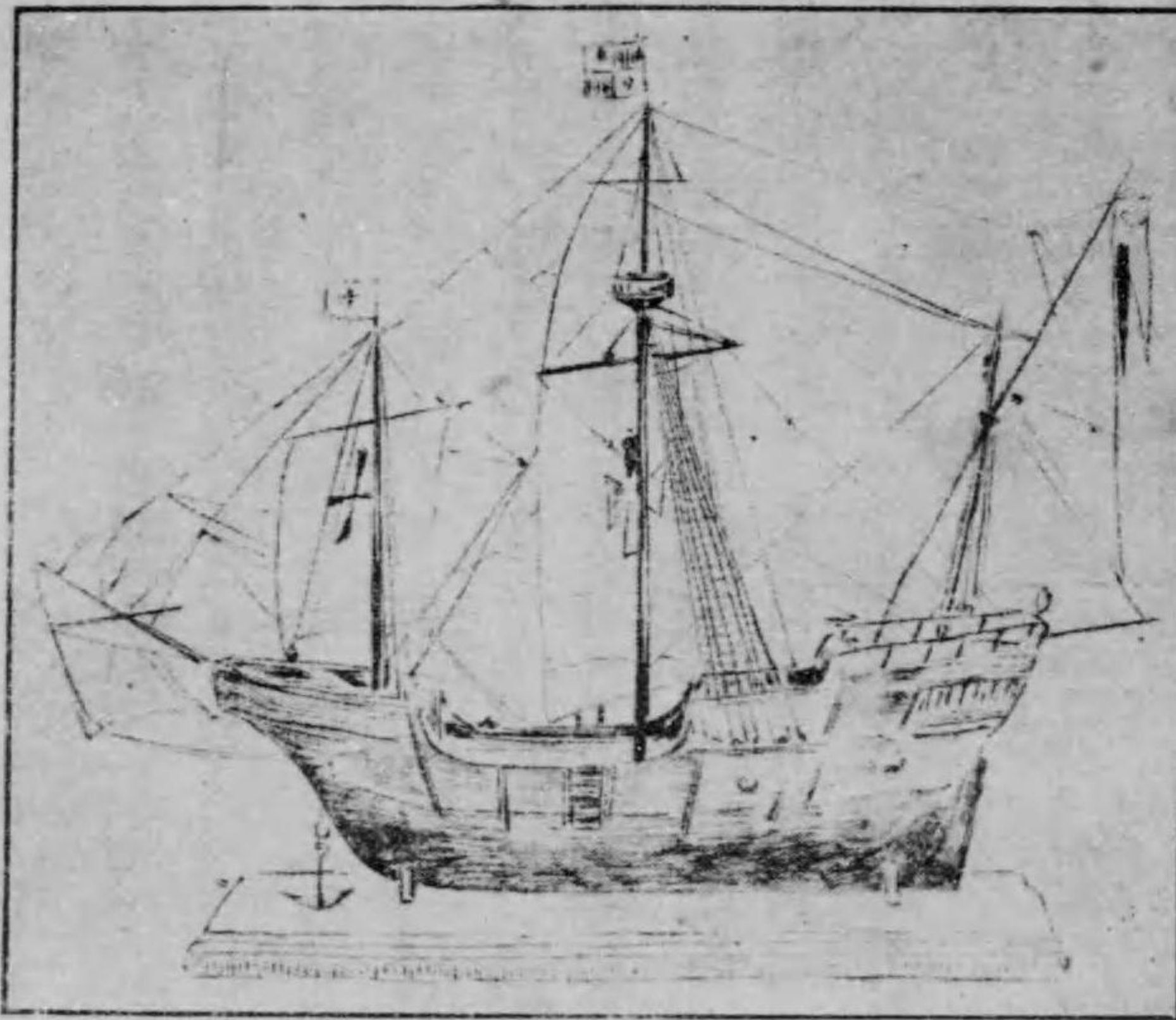


「若し我が父の推察にして誤りなければ、當地より印度に到るの航程は、一般人士に知られたるよりも捷路であらう」と言つた。

此の頃歐洲各國より海路を取りて、般富人を駭かせる印度の地に赴くには、如何にして達すべきかを知るものが少ない。印度より歐洲に輸送する、物貨は一旦紅海に運ばれ、蘇西の狹隘なる一地峽を横断して、地中海 船舶に轉載するを例とした。葡國の「ヘンリー」親王の如きも、亞非利加西岸を迂回して南阿に達し、再び北東の針路を取りてヒンド（印度）黄金國の海岸に出でんと欲して、生涯の大部分を費したのである。然るに同親王は不幸にして成功の半途に逝去したので、バーソロミューが、其の後を襲ひ、千四百八十六年に喜望峰を一周した。

其の期間に於て「コロンブス」は印度に到らんが爲め、西方の航路を取らんと欲し、暫らく機會を伺ひ、幾多の證據を蒐集せる後、斷乎たる決心を以て蹶起し、葡國王に謁して我が理想の誤りなきを陳述したるが、國王は容易に之を聽許せず、彼の企圖を以て、徒らに葡國に對して、不軌を謀るに外ならずと邪推するに至つた。

時に「コロンブス」は最愛の妻女を失ひ、悲嘆の極殆んど爲す所を知らざるの際であつたので、此の不快なる待遇を憤り奮然袂を拂て西班牙に到り、同國王に謁見して其の同情を得、年來懷抱せる意見を宸聽に達するを得た。然るに此の如き冒險の大事業は、其の實行に先だち、充分慎重なる調査をなすを必要とするを以て、從て躊躇遷延して、容易に活動の機運に至らず。「コロンブス」は脾肉



ヤリマタンサ船英アンロコ

の嘆に堪へざりしが、漸く千四百九十二年四月十二日に及んで女王イサベラは其の夫婦フェルディ

ナンド親王と相謀り、遂に「コロンブス」の意見を嘉納し、遠征の壯舉に預らしむることを認容した。

此のときバロス港の人民は納税の義務を怠り同港全部は國王に取上げられ、多數の人民は有罪と決定せられ、今や將に處刑の執行を見んとする折しも、新に大航海の企圖に際したので、王命に由りて、數隻の船舶及び若干名の乗員を「バロス」より出さしめ、以て其の罪を贖はしむることとなした。法令峻厳背き難く犯すべからずと雖も、斯かる邪惡にして亂暴なる冒險に對して一人の勸誘に應ずるものがなく、港民は大に激昂して其の不法を吐や

いた。「コロンプスは「キャンバル」の大都府(印度に在り)に航して其の金礦を探り、極樂淨土に其の源を發する、河流の繋廻する陸地に到達せんが爲めに、此の大航海を成就し得べしと想像せしが、こは彼等の到底首肯する能はざる所であつた。「コロンプス」は數回の抗議に逢ひしも屈せず、遂に「マルチン、ビンゾン」及び「ヴィンセント、ビンゾン」二兄弟の助力に依り、三隻の小船舶を得て之が艤裝に著手した。其の中に就てサンタ、マリヤ號は一層甲板のカラベル船にして、五十名の乗員を配し、「コロンプス」自ら之が指揮を司とり、其の二はビンタ號と名づけ、三隻の中最も快速なる駛力を有し、乗員の數は三十名あり。「マルチン、ビンゾン」之に搭乘する。其の三は「ニーナ」號と稱し乗員二十四名を有する一小船にて、「マルチン」の弟「ヴィンセント」之が指揮に當る。「ニーナ」號は固より小船なりしも、船内の構造は比較的廣潤なるが故に、居住上至便なるを以て、其の後提督の愛用する處となつた。此の航海に對する艤裝費は合計約四千磅に上り、十二ヶ月分の糧食を積載したのである。

是等三隻の船舶が遠航の準備全く整ひ、船艦相俦んでバロス港を抜錨したるは千四百九十二年八月三日金曜日であつた。當日大勢の人民群集して、其の行途を送る爲め海岸に堵列して居る。「コロンプス」は乗船する前、其の部下の海友と共にラビダ寺院に詣り、崇嚴華美なる參拜式を營み、神明

の保護を祈願し、聖僧「ジュアンペレス」の手より聖禮の宣誓を受け、「コロンプス」は心中竊に新領土の發見、竝に基督教を異域に擴張せんと期待したのであつた。

大西洋の横斷

かくて船隊は徐に出港し、「カナリー」島に向け航行したるが、翌日ビンタ號の舵機破損して弛みを生じたれば一たび假泊して修理を施し、更に航海を續けたるに、再び舵の金具に破損を來した。同船の乗員中或は不心得のものありて、此の航海を厭ひ、同船を本國に歸航せしめんと欲して、故意に此の如き損害を加へたるに非ずやと、一般に邪推されたるのである。船隊の「カナリー」島に到着せしは八月十二日であつた。ビンタ號の舵機は同處に於て新造せられ、ニーナ號の大帆は少しく縮小されたる後、九月六日同地を發し再び西航の途に就き、同月九日に最も遠隔せる基督教國なる、「フアロー」島(カナリー群島中の島)の山影を水天髣髴の裡に見失つた。

「コロンプス」の子「フェルナンド」此のときに於ける形況を記して、曰く、
 今や陸影を見失ひ、全く未知の洋中に航行するに至つたので、船員一同意氣頗る沮喪して、最早再び陸地を望見する能はざるの境遇に陥りしに非ずやと、且つ悲み且つ恐れて、茫然自失するも

のさへ少なからず、「コロンブス」は之を慰諭するに全力を用ゐ、我が搜索せる陸地は、懸て發見され得べき確信ありと、彼等に説き聞かせ、且つ其の發見に依りて、我等一同は巨萬の財貨と、無上の名譽とを獲得すること、決して遠きにあらざるを述べた。「コロンブス」は態と毎日の航程を減じて彼等に知らしめ、由て以て西班牙國より、甚だしく遠隔せざる如く思料せしめて、一時を瀕して居た。けれども彼は自己の參考用として、慎重鄭重なる考慮を以て、眞實の測定に係る、算用を記注したのである。云々

之より數日間、船隊は反對の海流に抗して進んだ。然るに同月十三日に至り、奇異なる徴候が始めに認められた。丁度其の時にアゾレス島の西方一海里許の處に達したるとき、羅針儀が俄に甚だしき誤差を生じて、「コロンブス」始め乗員一同を當惑せしむるに至つた。

之に關し「チャールズ、アイ、エルトン」は其の自著「コロンブスの行動」に於て記して、曰く、船隊は廣濶なる「フェーンズ」淺堆の流速を蒙りつゝ、航進したる爲め、西班牙の近海に於て、海草叢生せる處に逆戻りせる如く各船員は思ふた。實に海上一面黄色の馬尾藻を以て充滿し、其の狀態恰かも松柏の枝條繁踞せる如く、乳香樹の果實に酷似せる漿果を密生せるを望み見た。「コロンブス」は此の奇怪なる光景に對し、痛く自ら驚倒し後之を記して、

其の海藻の發生區域は、幅員頗る廣くして、予は始め之を暗礁と誤認し、船隊は之を迂回せざるべからずと思つた。而して航進少時の後に於て、猶其の海藻は錯雜叢生し、枝幹長大にして益々奇觀を極む。

と述べた。又此の海藻は鮮綠色の潤葉を水面下數尺の處に浮べて、近隣に横はれる島脈より、生長せる岩藻に似て居る。けれども「コロンブス」は此の時自から實測を行ひ、大陸は猶非常に離隔せりと云つた。彼は更に

予は亦海上を注視したるに、附近の海面一帯洵に平穩にして、風力は頗る強かりしも、船體には些の動搖を感せず。

と附記した。蓋し船隊員は大洋海流に沿ふて順走したので、連日「セザイル」の河流の如く、靜穩なるを喜んだ。けれども水夫等は朝夕水天一碧の外、何物の眸子に映するものがないので痛く驚き、せめて、陸地の近づける徴候なりとも眺めんと欲し、茫然舷側に凭り、天涯遙かに家郷の人を憶ふたのである。十五日の夕刻に一流星が虹の如き光芒を曳いて飛び、夫より數時の後、芬香馥郁として青空に薰る海面に達した。恰かも「アンダルシヤ」(西班牙南部地方)に在りて陽春四月の候に遭ひたる如く、但し黄鳥の嬌音を耳にせずとも、實に暢樂駘蕩の思が起つた。云々

「コロンブス」は自ら其の日記に誌して、

西方に陸地あるの徴候が漸く現れ出た。蓋し予の思ひし如く神明は吾人を速かに陸地に導き給ふのであらう。今や勝利の榮冠は神明の掌中に握らるゝのである。

と記述した。實にや一匹の大蟹は、海藻の技朶の間に游泳して居る。由て直に之を捕へた。「ニーナ」號の水夫は同船の周圍に來集せる、舖の大群中より一尾を刺した。又或る者は河口の淺灘上に棲息せる、一種の鳴を捕獲する。白色の熱帯鳥は高く天空に翱翔せるを見る。其の後一兩日を経て、ベリカン鳥に似たる信天翁が海上に突進し來り、魚を獲て飛び去るを認めた。此の信天翁の二三羽居るときは必ず陸地に近接せる確兆にして、此の鳥類は偶然海上に見らるべきものにあらず、其の特性は古來已に知れ渡りし處である。水夫の中に嘗て亞非利加に航したるものありしが、其言に依るに、是等の大鳥は決して水上に睡眠することなく、又陸上一百里以外に出づることがないと謂つた。同月二十日に一羽の鳴を捕へた。又同日拂曉二三羽の小禽が船上に來り囀り、日出時の頃に飛び去る。上記幾多の徴候に考ふるに、我航路の南北に當りて島嶼が散在する如く思はれ、船員一同目を丸くして海上を瞰視しつゝ、あつたが、「コロンブス」は猶も印度の方に向ひて突進せんと、其の決心鞏固に見へて居た。連日の天候快晴にて、海面青墨を敷ける如くである。嗚呼我等の歸航の日ま

で、此の良好なる航海を續行せんことを、上帝に祈らん、と彼は口吟した。

二十一日に再び海藻浮漂せる淺堆に入りたるが、巨大なる海鷗が水平線指して遙か彼方に逸走せるを見た。次日には一群の海燕が旗艦の船尾に従ひて翱翔し、海員の言ふ如く天候不良の兆を示したと見へしが忽ち變風となり、航路に逆つて強吹し始めた。「コロンブス」之を記して、

此の變風は吾人に取り最も重要である。何となれば此のとき迄、海上に微風だも吹かないから、水夫等不憫にも西班牙に歸航すること能はずと思惟して、甚だしく悲觀せるものが多かつた。

と云つた。然れども水夫等は猶之をしも輕風と思ひ不平を鳴らして、こればかりの風力では風とは言へぬ。單に猫爪風である。細微なる飄搖に過ぎない。かく波浪の起らざる軟風にては、到底我等を本國にまで搬送し得べき強風と化することが出来ないなど、唱ふるものがあつた。

海上には碧水濼々として飄蕩せる海藻を載せ、緩かに流動して居る。海藻の幹莖の側らには蛸蛤(ザリガニ)が横に爬ひ、信天翁と白鷗とは水面に魚を搜る。或は葦切、班鳩をも見たものもある。既にして海上大に荒れ出し、最早風の息突く暇さへなく、波濤澎湃として山の如く起る。水夫等前の大言に似ず、甚だ驚愕恐惶して、只管其の猛烈の勢を逞ふせざらんことを神に祈つた。此のとき提督は叫びて、

「此の大海洋は吾人活躍の爲め全く緊要である。昔者ヘブリュー人の束縛を解きて、之を救援したる彼の「モゼス」の後に、埃及王「ファラオ」が前進せし時の外、此の如き壯快なる雄風は決して發生するものでない。」と揚言した。

翌日「コロンブス」は「ビンゾン」に信號して、ビンタ號を「サンタ、マリヤ」號の舷側に横附けとなさしめ、數日前に貸與せる地圖の還附を求めた。「ビンゾン」は本國に該地圖を入れ、サンタ、マリヤ號の船内に投げ込んだ。「コロンブス」は之を受取り、水路嚮導ジュアン、デユ、ラ、コサ、並に其の傍に在りし數名の水夫等と共に、其の地圖を見んと欲して、腰を屈がめて數歩進み折しも、「ビンゾン」は暫らくビンタ號の後甲板に在りて、日没の光景を眺望しつゝあつたが、彼は突然跳り上り、大聲疾呼して、

「吉報よ萬歳々々、我が提督よ、陸地が見えた！吉報を達す、萬歳々々」

と云ひつゝ、天際に髣髴たる一青蝶を指點した。其の方向は船首に當りて、微かに陸地の如く淡靄を罩めて、確乎と見へざるも然るべきものと想はれた。「コロンブス」は直に甲板に拜跪して神明に祈る。「ビンゾン」は國歌を高唱し、兩艦の水夫等之を唱和する。「ニーナ」號の水夫等は橋上に登攀

し、梯索に集合した。然るに其の翌朝に至り、陸影は雲烟の中に没し去つて跡を留めない。

此の時に及んで、水夫等は竊かに反逆を企て、時機を見て事を擧げんと、密議已に熟して居た。彼等は艦隊指揮官に對して、徒らに不満を啣ち不平を懷き、疑心暗鬼を生じて之を害せんと謀り、一同附和雷同して、提督を惡口し陰かに之を中傷して、

「コロンブス」氏は唯一外人なるのである。此の艱苦多き航海に於て、同氏は我等に多大の迷惑を懸けたから、我が上官たる資格を缺く、彼は嚮きに朝廷に於て嫌忌され、世間の識者よりは嘲罵を與へられたる人である。」

と讒誣する。或は彼を海中に投棄するを以て上策と稱し、其の天象高度を測量する時を覗つて、其の脚を拂ふに若かずと提言するものなどある。

史實を傳ふるもの此の間の消息を詳かにして、左の如く述べた。

上帝は新奇の徴候を示して、此の危難を救ひ給ふ、之が爲め「コロンブス」は暫時此の内訌を鎮靜するの幸運を得た。云々。

陸地の發見

十月七日日曜日の出時に、陸影が依微として西天杳々たる間に現出せしが、之を確認せしものは一人もない。故に其の状況を記するものがなかつた。此の航海の始め西班牙國王は、陸地發見に對する恩賞の規定を定め、最も早く陸地を發見せしものには、終身年金として約十萬圓餘（三十クラウン）を賜はるべき筈であつたので、誰人も此の恩賞に預らんと欲して、銳意見張に従事し、海上の囑目に醒醒した。依て正當の理由なくして、猥りに「陸よ山よ」と連呼する弊害を豫防せんために、一條の制令を左の如く定めた。

一たび陸が見へたと呼號したるものは、三日間以内に必ず之を確認するの責任を有し、若し其の期間に陸地を全く發見せざるときは、前記の恩典に預かることを得ず、又前發見者を庇護し、或は之に聲援したるものも相同じ。云々。

然るに「ニーナ」號の水夫等は此の規定を忘却し、其の陸影に接したと思ふや、喜悅の餘り空砲を發し、且つ其の國旗を掲揚し、忽ち失望し甚だしく落膽したのである。

彼等水夫は今や將に叛亂を起さんと欲して煩悶懊惱の巷に彷徨しつゝあつたが、實に幸運にも十月十一日に至て、陸地存在の徴候が明確に現はれ、サンタ、マリヤ號の舷側には、蘭草の綠色を帯べるものが流れ来る。又「ニーナ」號の水夫は野薔薇の結實せるものを海面に見たので、今度こそ一刻

も早く陸地を發見して、巨額の賞金を得ると一同競争の姿となつた。同日夕刻サンタ、マリヤ號にては、祈禱の讚美歌を唱へたる後、「コロンブス」は水夫等に一場の講話をなして、

諸子は上帝の恩惠實に偉大なるを忘れてはならぬ。諸子が斯く遠大なる航海を成就するに際し、此の如き順良の天候を保有し、其の企圖に對し上帝は種々なる現象を與へ、以て諸子の心思を怡樂せしめ、満足なる結果を收め得たのは、全く上帝の恩惠に屬するのである。

と告げ、而して第一番に陸地を發見せるものには、

「我が特別賞として天鵝絨の上衣を與へやう！」

と彼等に約した。

同日夜十時頃、「コロンブス」は船尾の自室に在りて船外を望み、遠く一燈火の上下に飄搖し明滅するを認め、皆を決して之を凝視するうち、恰かも漁夫の用ふる松明の炬火の如きものが見ゆると思つたので、二名の水夫を招きて之を目撃せしめんと欲したが、一人は直に來つて之を見たりしも、他の一人は頗る遅れて來たりしたため、其の燈火は已に消滅した。翌晩午前二時頃ビンタ號より空砲が轟き渡つた。同船は駆力快速なるので、常に他船よりも遙かに前進するを例とし、此時も列の前方に占位して居て、「ロデリコ、デユ、トリアナ」と云へる一水夫は、陸地が約四海里の近距離に展開す

るを發見した。今其の距離甚だ接近せるので、各船は假泊をなしたるが、乗員皆歡喜の情に堪へず徹霄全く眠る能はず、踊躍して夜の明くるを待詫びた。噫船隊が西班牙バロス港を出發してより七十日間の航海を経て、新世界が始めて發見された。此夜深更に「コロンブス」が始めて燈火を認めたる爲め、貴重なる恩賞は其の後彼に賜つたのである。

翌日黎明、平潤なる一大島が蜿蜒として各自の眼前に現出し、綠樹蒼鬱として連り、河水洋洋として漲る。諸般の状況を概見するに、人口頗る稠密なる如く思はる。長らく海上に起居して具に艱苦を嘗めたる「コロンブス」船隊員は、今や正に「バ、マ」群島に到着したのである。「ビンタ」號の乗員一同は高聲にて「テヂューム」の讚美歌を誦し始めた。時に旭日杲々東天に輝きて昇つたので。總端艇を留意し出發の準備全く整ひ、提督先づ本船を發し陸上に向ふ、艇上には西班牙國王旗が翻翻として日光に輝いて居る。ビンタ號及びニナ號の二船長は、王冠上にフェルディナンド王並にイザベラ女皇の頭字を戴ける、綠色の十字旗を樹て、之に従ふ。各旗章は勇ましく風に飄り、各艇は啾啾たる奏樂隊を載せ、勵聲橈漕して波白き砂濱に向ひつゝ進む。陸上には無數の土人群集し、驚異の眼を睜つて我が到るを待つ。西國人は皆武器を携へ萬一に備へたけれども、土人は固より少しの抵抗をも試みなかつた。

提督は第一著に上陸し、實に新世界の領土に、足跡を印したる最初の歐洲人であつた。提督當日の服裝如何と見れば、美麗なる制服に抜劍を帶し、從容として端艇より上陸し、數歩を行き忽ち砂上に拜跪して之に接吻し、徐ろに流涕して感謝の意を表した。此のとき國王旗と十字架とを、海岸に立て且つ西班牙の國旗をも掲げて、島名を「サン、サルヴェードル」と命じ、(西印度人の島名グワナハニと云ふ)コロンブス自ら大守並に總督の官名を適用した。

彼等は快哉を叫んで島内を巡覽するに、(再びエルトン氏の著書に據る)心思頗る錯亂して夢路を辿る如くである。海灣の碧水を繞りて綠翠滴る如き森林がある。或は金銀色を交へ或は青黛と雌黃とを閃かせる、「アカントス」の柔軟鮮麗なる樹色は、「キングスレー」の用語を以て之を記すれば、變化常に止むことなく、恰かも孔雀の頭首の如く晃々たる暈色を呈して居る。一行の最も奇異の感に打たれたるは、裸體の土人が平伏或は匍匐して、武裝せる西國人を謁視し、其の鬚髯を指示し、更に天空と太陽とを差した。須臾にして一群の土人、彼等の近傍に來集し、通辯人の媒介に依り、談話を試みることを求めしかば、彼我の間に二三の言語を交へしに、該土人等はグワナハニ島の戦士であつて、彼等は共に唯一人の婦人を戴きて頭目となすものである。其の容貌を見るに、或は血の如き赤色の顔料を用ひて、面部を塗飾するもの、或は胡粉の白色を用ひて面上に數條の線を書き、基

盤目の模様(はんめい)に厚化粧(あつげしやう)を施(ほどこ)すものがある。又其(また)の鼻(はな)のみを染(せん)むるもの、若(わか)くは兩眼(りやうがん)の周圍(しゅうい)に、鮮明(せんめい)なる環形(わんけい)を畫(か)くものなどもある。各自(各自)の美容法(びようぽう)はすべて狂人(きやうじん)にあらざれば、道化役者(だうけやくしや)を見ると異(こと)な



ので甚(はな)だ穢惡(だうあく)なる人相(にんさう)を具(そな)ふる。其(その)の眼目(がんめく)は灰色(こくわいしよく)のものが多く瞳孔(とうこう)の周(しゅう)りに青色(せいしよく)或(ある)は褐色(こくわいしよく)の斑點(はんてん)がある。其(その)の兩手(りやうて)は小(せう)にして指頭(しゆとう)には研磨(けんま)せる爪(つめ)を持つ。其(その)の口(くち)は象牙(ぞうげ)の如(ごと)き純白(じゆんぱく)の齒列(しよくれつ)を有(あ)し、

コロンブスに上(かみ)砂(すな)スブンコゴ
ゴメラ士人(ごメラしじん)「カナリ」群島(ぐんとう)中(ちゆう)の(一島)の顔色(げんしよく)に同じ(おな)じく、或(ある)は日光(にっこう)に照(て)り附(つ)けられたる西班牙(べすぱいん)勞働者(らうどうしや)の顔色(げんしよく)の如(ごと)きである。彼(かれ)等は長身(ちやうしん)にして體格(たいかく)至(いた)て美しく、風采(ふうさい)頗(なほ)る堂々(たうたう)たるのであるが、唯前額(ただぜんがく)の上部(じやうぶ)が夾壓(けいあつ)さるゝ

笑(わら)ふとき又(また)は談話(だんわ)をなすときは殊(こと)に愛嬌(あいせう)がある。其(その)の頭部(とうぶ)は濃密(のうみつ)にして漆黒(しよくく)色の頭髮(とうまつ)を短(みぢ)かく刈(か)りて、之(これ)を一束(いちたば)の總(よさ)の如(ごと)くして眉毛(まゆげ)の上(うへ)に戴(か)き、或(ある)は之(これ)を兩肩(りやうかた)の邊(へん)まで垂(すい)下(か)し、細絲(さいし)を以(もつ)て後頭部(こうとうぶ)に縛(くわ)著(ちやく)すること婦人(ふじん)の髻髮(むすかみ)を束(たば)ぬる如(ごと)きものも少數(せうすう)ある。彼等(かれら)は屋外(おくわい)に在(あ)れば常(つね)に若干本(じやくかんほん)の投鉛(とうえん)を携(たづ)ふ、是(これ)は蘆葦(あし)或(ある)は籐竹(とうちく)を用(もち)て造(つく)り、堅緻(けんち)なる木釘(きど)釘(てい)の齒牙(しぎ)或(ある)は鮪魚(しんぎよ)の針毛(しんまう)を其(その)の尖端(せんたん)に附(つ)著(ちやく)してある。

コロンブス等(とう)一行(いっかう)は端艇(ぽんてい)に歸投(きとう)せる前(まへ)、提督(ていとく)は赤帽子(あかぼうし)及び飾珠(しやくじゆ)を土人(どじん)等に分與(ぶんい)したれば、彼等(かれら)は大群(たいぐん)をなして海岸(かいがん)に蝟集(むしじふ)し、コロンブス等(とう)を以(もつ)て太陽(たいやう)以外(いがい)の遠國(えんこく)より來航(らいかう)せるものと思(おも)ひて、之(これ)と物品(ぶつぽん)を交換(かうかん)して自(みづか)き紀念(きねん)となさんと欲(ほつ)するの意甚(いは)だ切(せつ)にして、種々(しゆしゆ)の奇物珍品(きぶつちんぴん)を擁(よう)して番舟(ばんしゆ)に乘込(のりこ)むもの引(ひ)きも切(き)らず、其中(そのちゆう)には鸚鵡(あうけ) 蘆葦製(あしせい)の投鉛(とうえん) 棉花(りんくわ)の大球(たいきゆう)などがあつて、殊(こと)に西國(さいこく)人の此(こ)のときまで、全(まった)く其(その)の用方(ようほう)を知ら(し)らざる、烟草(たばこ)の乾燥葉(かんせうえ)の如(ごと)き至寶(しほう)もあつた。彼等(かれら)は之(これ)に就(つ)て左(ひだり)の如(ごと)く云(い)つた。

「印度人(いんどじん)は是(これ)等(とう)乾燥葉(かんせうえ)を以(もつ)て、芳香料(かうかうりやう)及び藥劑用(やくざいよう)として大(おほ)に珍重(ちんじゆう)し、各自(各自)之(これ)を吸飲(すいいん)し一種(しゆ)の薰香(くんかう)として用(もち)ふ。」

「コロンブス」は全島(ぜんとう)を一覽(らん)せる後(のち)再び出帆(しゅつぱん)し、二三(にさん)の土人(どじん)を乗船(じやうせん)せしめて嚮導(きやうどう)となし、道(みち)すがら多

數の小島を發見した。提督は到る處に必ず金礦の有無を尋ね、且つ一行の南方より來航せる由を告げた。而して之より南方に當て、「キューバ」と名くる金塊產出の一大島横はると聞き、遽然として以爲らく、昔時「マルマ、ボロ」の東征をなすや、「チバンゴ」の金礦を以て有名なるを記せるが、此の「キューバ」こそ或は然るならんと、獨り自ら笑壺に入つたのである。畢竟此の時代の人は地理學の思想幼稚にして斯かる誤解を抱きたること、實に當然の結果である。東道の印度人は「コロンブス」に語つて、

「其のキューバの地には亦澤山の眞珠を産出する。」

と云つた。彼は自己の想像の空しからざるを確信し、遂に快風に駕して、「キューバ」島の近傍に來航し、其の淡紅色の斷崖と、蒼翠たる山色とを望み見て、「シ、リー」島の如き秀靈なる土地と思つた。夫より同島に接近して、綠葉の蒼鬱として地衣を蔽へるは、恰かもグラナダ(西班牙南部の洲)の樂園に似たるを見て、欣然として

「此の島は人間の眼目に觸れたる、最好最美の地である。」

と叫んで、一大河の河口に投錨し、彼は更に

「我等は未だ此の如き壯麗快活なる風景に接したることがない。」

と再説した、陸上には蕪々として立てる椰子樹が多く、西班牙或は亞非利加に於て見たるものとは全く趣を異にして居る。名も知らざる巨木の上には、珍奇無類なる果實を載せ、或は鮮美爛熳なる花卉を裝ふ。小禽は、林間に嘯り、奇鳥は空中に歌ひ、其の音律の快活にして巧妙を極め、人をしつて再三之を聽かんと欲して、耳を澄さしむるに至るのである。「コロンブス」は茲に探尋精査の勞を取りたれども、果して黄金を得る能はず、更に寶石類の所在を求めて亦之を得ず、苦心頗る慘憺たるものありしも、バナ、及び葉卷烟草の如き重要品を發見したれば、此の探檢は決して無益の業でなかつた。時に本島の土人は各火を吸ひ烟を喫する習慣があつた。是は烟草の乾燥葉を卷き丸めて製し、兒童用の玩具笛の如き小筒形をなせるものである、彼等は其の小管の一端を指にて撮み之を口に當て、他端に點火して其の燄烟を吸ひ更に鼻孔よりも、啜り込む。斯して彼等は自ら凡ての疲勞を忘ると稱するのである。「コロンブス」は土人に黄金、眞珠、及び香料の有無を問ひたるに、「ハイオ」と「バベーク」と稱する東方の諸島國は此等の產物に富み、該土人の身振手眞似に依り、其の他の住民は時々炬火を携へ、陸續群をなして海岸附近に金礦を收拾し、或は黄金の大塊を大火燄中に投じ、之を鍛鍊して純金の柱體及び金線等を製造するを見たものもあると答へた。

である。同島に航行の途次、「バベーク」即ち「ジャマイカ」島を發見した。時に「マルチン、ビンズン」は提督の許可を受けずして。ビンタ號を率ひて逃亡し、自ら探險に従事したれば、「コロンプス」今や其の麾下には唯二隻の船舶を有するのみである。船隊の「ポーハイオ」に近づくや、東道の印度人は「コロンプス」に乞ひて、上陸せざらんことを勧めた。是れ其の島人は著名なる食人種族にして、兇暴殘虐の犯行を敢てするからである。然るに「コロンプス」は毫も之に耳を貸さず、漸次陸地に近接し、遂に深く内陸に鑿入せる一大港内に碇泊したのである。陸上には鶯の如き小鳥が愉快に歌ひ轉り、其の他の奇鳥も多く嬌音を弄して、船員をして西班牙故國の春光を追懷して、家郷を思ふの情に堪へざらしめた。紅花咲ひ綠草芊々たる原野を見れば、坐ろに「ゴルドヴァ」(西班牙國アンダルシヤ州に在り)の沃野を聯想し、無量の感慨に打たれた。彼等は此地の氣候風土の甚だ自國に相似たるより、「ヒスバニオラ」即ち小西班牙の名稱を賦與するに至つた。

ポーハイオ人は著名の食人種族と思はれしに、案に相違して「コロンプス」が從來視察せる西印度蠻人中、最も俊秀なる種族と認め、其の性質亦最も高尚なりと稱し、其の快活にして從順に、且つ寡慾らしき土人の氣風は痛く「コロンプス」の氣に投じ、彼は

「予は西國王に誓ふ、世界何れの地か之に優れる良民があらう？。之に超ゆる富國があらう？。

予は此の地の外絶て之なきを斷言する。彼等土人は其の性温順である。彼等は隣人を愛すること同胞の如く、其の對話は壯快にして常に微笑を伴へるより、世界第一の妙趣がある。洵に彼等は隻衣を纏はざる裸體なりと雖も、夥多良好なる風俗習慣を有すると予は確信する。」と陳述した。

コロンプス乗船の難破

茲に「コロンプス」は豫期せざる一大不幸に遭遇した。乃ち十二月二十四日の早朝、彼は沿岸を巡航せんと欲して、船隊を率ひて「ハイチ」を解纜し、其の夜十一時に彼は其の寢室に入った。時に海上平滑にして、「コロンプス」自ら

「海水静止して、皿に盛りたる水に異ならず。」

と云つた程の風である。「コロンプス」の船橋を去りて間もなく、按針手は舵柄を一人の阿呆漢に渡して交代したるに、激潮流は船首を俄かに轉じて砂岸の上に本船を膠座し、船體に多大の損害を與へた。「コロンプス」及び水夫等は始め船體震動の響を聞き。倉皇上甲板に出で、浮揚の事業に取懸り、「ニーナ」號の助力を得て曳出を試みたれども少しも效なく、「サンタ、マリヤ」號は忽ち破壊の

運命に陥つた。附近村落の一酋長は之を見て、其の急を救はんが爲め、多数の土人を着舟にて送り來り。「コロンブス」大に其の好意を喜び、後之を記して左の如く云ふ。

「酋長は時々其の親近のものを我が許に遣はし、落涙して子を慰め且つ戒しむるに、其の多人數の土人を送るを吝まざるが故に、決して意氣を沮喪せざらんことを以てす。嗚呼予は西國王に對して證言す、西班牙の故國たる「カスチール」の何れの地に於ても、吾人が責任を重んじてなせるが如く、之に優りて確實なる指揮を執りしものなからんことを。何となれば吾人は一本の目釘たるの價値を失せざればなり。

是等土人の懇切にして同情多き行爲は、「コロンブス」をして其の船を亡失するも、始んど悲哀を忘れしむる程、其の誠意を喜んだのである。「フェルナンド」巧に之を註解して、

「此の如き誠意は該酋長の「コロンブス」に贈與したる、萬金に値する好紀念物なり。」

と説きたるは實に至言である。時に堡砦即ち防舍が直に築設され、難破せる「サンタ、マリヤ」號を監視し、旁ら金礦の所在を尋ぬる爲めに、四十二名の戍兵を其の地に留むることとして。「コロンブス」は千四百九十三年一月四日を以て、一旦歸國の航途に上つた。

コロンブスの歸航

翌日「ニーナ」號は「モントクリスチ」山の傾斜面の海岸に沿ふて航したるに、豊圖らんや、是迄踪跡を失したる「ビンゾン」は遂に來會し、力なき態度を以て從來の汚行を謝し宥恕を乞ふた。「コロンブス」は大に怒て、將に兩人の間に争鬭の起らんとするまでに、危く見へしが、「コロンブス」は「ビンタ」號にて金礦を發見し、「ジャマイカ」島中第一の殷富なる地方あるを聞き、漸く顔色を和らげた。然るに詳細に之を質問するに及んで、彼が今般堡砦を設置せる「ラナビダッド」附近の地が、最も有望なる金礦脈を存じ、此の如き寶庫は他に之れあらざるを知つた。嚮きに「コロンブス」は同處に於て、河中より多量の砂金を發見したのである。又「ビンタ」號は曾て一橋材の必要に逼り、同島に碇泊中巨木を伐り、假製帆檣を製造して出帆せしが、該橋材は虫害の爲め、内部に空孔あるを發見し航海上甚だ危険なるを以て、「ビンゾン」は之を交換せん爲め茲に歸航し來りし際であつた。十六日に「コロンブス」は印度人より、「カリブ」島の金礦に富むを聞き、探檢の念熾んにして、急遽錨を抜き、「ニーナ」號の船首を其の方向に轉じて航進せしが、俄に快風を得て西班牙に歸航するに最も適順なる如く思ふた。加ふるに衆人の顔容愀然として、歸國を欲するの心情亦制し難く、全艦の士

氣殆んど狂亂せる如きを見て、彼は之を峻拒してまで、敢て我が意思を貫かんはしなかつた。由て船首を再び轉じて針路を東方に變じ、約五十海里許駛走したれば、日已に西天に没した。

「セント、エルモ」の岬角は船隊員の實見したる最後の陸地である。爾後數日間天空は雲烟漠々なりしも、海上平穩、油を流せる如く滑らかにて、恰かも河流を航する様であつた。二月九日にニーナ號の船位はアゾール島の南方に在りと水路嚮導は信じた。然るに提督は

「否本船は未だ「アゾール」島に達せず、猶五百五十海里の不足である。」

と述べた。蓋し此の測定は水路嚮導の施行せるものよりは却て正確である。是の時風力漸く強く海上波高く、十四日木曜日には非常の烈風となり、船は箭の如く疾走したれば、此の如き大風波は實に空前の事なりと船員は思考した。此の風波劇甚の際に、ビンタ號は俄に其の姿を没したれば、ニーナ號の水夫等一同大に驚き、一たびは絶望と諦めたるも、先づ籤を引きて占考を行ふた。彼等は「グワデロープ」の女神に、一本の蠟燭を捧ぐるため、廻國巡禮をなすべき人を船内に物色し、其の籤は「コロンブス」に當つた。彼等一同陸地に到着せは褌衣一枚を著用し、相共に打揃ふて女神廟に參詣せんと誓約した。時に「ニーナ」號は貯藏の糧食殆んど盡き、あらゆる糧食樽は空虚となり底荷の缺乏によりて、船體顛覆せんとするの危険に瀕した。提督は此の空樽に海水を充たして、船

體の安定を保つた。提督の最も苦痛を感じたるは、「ニーナ」號萬一の沈没である。彼等は此の如く千辛萬苦を嘗めて、漸く遠征の目的を達し、重大無比の發見をなしたるも、若し本船にして不幸の末路に會せば、何物も此の世に存せざるべしと、彼は常に此の點に懸念して居たのである。由て彼は當時の感想を左の如く記述した。

「予は之を思ひ之を憂ひて心中煩悶に堪へず、然れども予は自ら西班牙國王の爲めに幸福を祈れり、假令我等乗員は死歿し、我が船體は破壊するとも、我が大王の聰明は、此の如く殆んど成功に垂んとする、遠征の事業を救援するに於て、恰適の手段を發見し、或は我が遠航の結果に依り大王の知識を開發するに足るの方策を講究し給はんことを乞へり。由て予は時間の許す範圍に於て、極めて簡單に、我が約せし如く是等諸國の地を發見せる事項を記述し、且つ如何なる方法に依り、幾何の日子を以て其の發見を了したるか、又其の地區の佳良、土民の優秀並に是等發見領土を監視する爲め、我が大王の臣民若干を殘留したる等をも逐一記載し、本書を封筒に容れ、之を嚴緘して、其の表面の側に「誰人にも、此の封書を西班牙國王に傳達せられんには、其の勞に酬んため一千デユカット（四萬五千圓餘）の賞金を贈呈すべし。」と附記して、我が大王に上るものなり。

「コロンブス」は自記備忘録より、右の如く抄寫して一書翰となし、之を油布にて包み、蜜蠟を塗り空樽の中に入れて海上に投げ、別之と同様のものを一通作り、後甲板の上に備へ、萬一本船沈没の場合に於ても、自ら浮揚する様に設けたるのである。かくて危険極まる航途に在りて、澎湃たる風濤を冒し、戦々兢として、航行したるに、十五日金曜日の拂曉に、檣樓當番に立ちたる一水夫、

「ライ、カアシア」は

「陸地見ゆ」

と報じた。「コロンブス」は之を以て「アゾレス」群島中の一島ならんと速断した。是より先き風向漸く變じ、本船は逆風の爲めに壓迫されて遂に進むこと能はず、由て止むなく「サンタ、マリヤ」島の沖合に假泊した。

船上より望めば市街は數海里の遠きに在れども、錨地に近き海岸に一小庵が半ば破れて残つて居る舷側に食物を乞ふて來れる、舟人の言ふ所に依れば、此の小庵は聖母「マリヤ」の女神廟なりと云ふ。「コロンブス」は直ちに水夫等に命じて、襦衣を着用し、素足のまゝ、女神廟に參詣し、前日の祈誓に従ひ、神曲を聴聞せよと云つて、自ら半舷の水夫を引率して上陸した。然るに本島の葡國島司は、其の衛戍騎兵を馳せて急進し來り、矢庭に水夫等を捕縛して牢獄に投じた。「コロンブス」は始め懇

ろに事情を開陳して異議を申立てしが、其戍兵の傲慢なるを見て遂に之を脅かして激語して曰く、

「然らば予は全島を劫掠し、主要の住民を奪ひ去て、人質となさんのみ」

と葡國人大に驚きて、水夫等の縛を解き、「コロンブス」に渡した。

「コロンブス」一行がサンタ、マリヤ島を抜錨したる後、三月三日に彼等は非常の暴風に遭ひて總帆を失ひ、多大の困難に陥りたるより、祈願が一層盛んに行はれ、「コロンブス」は再び其の籤に當つた。「フェルナンド」亦此時の事を記して、

「コロンブス」の提言は船内一般に信用ありて、他人よりも一層尊重せられしこと明瞭なり」と述べてある。彼等は遂に「メーンズル」の交換を行ひ、猶又舊針路に復して航行したるに、拂曉に

「タグス」河口にある。シントラ府の沖合に達し、更に航して、「リスボン」港に碇泊するの止むなきに至つた。「コロンブス」慨然として、

「此の航路の偏倚は世界に於ける、最大不可思議なるものとして、予は終生忘るゝ能はず。」と嘆息した。

此の時に當て西班牙が領土を新に獲得して巨萬の財貨を贏ち得たことは、隣邦葡萄牙に取りて堪へがたき非常の打撃である。葡國王「ジョン」は「コロンブス」を宮中に招き、其の遠航の奇談を聴聞し、

顔面には喜色を装へども、内心は抑鬱不満の忍び難きを啣つた。「コロンブス」の去るや、同王は直ちに参議院を召集して、西班牙人の活動を妨害する爲め、「コロンブス」を暗殺さんとの謀議を凝らし、國利國權を振張せんには道義の觀念よりも、智慮ある行動を尊ぶとの説に一決した。然れどもジョン王竊かに思へらく、一日珍客を待つに好意を以てし、何等特殊の罪咎なきに、翌日に至り之を屠戮するが如き兇行には、全然予の與せざる所なりとし、同王は特命を下し、俄に遠征隊を組織し、「コロンブス」等の發見せる領土を兵力にて奪取せんと謀つた。然るに羅馬法王は之に妨害を加へたるに依り其の遠征隊は遂に出發を見ず了つた。

三月十三日水曜日に「コロンブス」は大高潮に乗じて「タグス」河を下り、順風に帆を展じて西班牙の南方に航行する途次、十五日金曜日の正午頃に淺洲を過ぎり、遂に「バロス」港に入りて投錨した。即ち昨年出港以來、七ヶ月十一日の日子を費やしたのである。「コロンブス」の歸航を聞きて、國人は歡喜雀躍し、港内の混雑は名狀する能はざる程であつた。老幼男女海岸に群集し、一行の歸着を頌揚した。「コロンブス」は自ら遠征の凱旋を祝賀して、主要の寺院に賽し、崇嚴なる謝恩祭を施行し、舉式の後、直に遠近の梵鐘殷々として鳴り響いた。

茲に吾人の最も奇異の感に堪へざるは、出港前嘗て、「ニーナ」號の港内に泊するや、ビンタ號は淺

洲に近く、恰かも港口に匍匐する如く衆人の眼に觸れた。然るに「アズレス」島附近の海上、暴風狂浪の爲め、ビンタ號の船影杳として没し、乗員一同は其の音容に接せず亦、「ビンゾン」は「コロンブス」に面せず、「ビンゾン」の事蹟は實に惘然たる悲劇である。「ビンゾン」嘗て以爲へらく、「コロンブス」何ぞ能く陸地に到達することを得やう。

「我自ら榮譽ある饗宴を樂しみ、獨り偉功を檀まゝにせんのみ」と常に其の心中に期待して居た。「ドン、フェルナンド」は之を述べて、曰く、

「ビンゾン」は獨り自ら「バーセロナ」に歸航し、西國王「フェルデイナント」及び女王「イサベラ」に大發見の吉報を齎らさんと試みた。然れども國王等彼は「コロンブス」の麾下たる以上は、必ず提督と共に歸航せよとの嚴命を下した。彼は其の使命を得て、其の儘故郷に還り、自家に室居し、數日を経て憂鬱の餘遂に悶死したりと云。

コロンブスの凱旋

「コロンブス」は歸航中の途暴風雨の際祈願を籠めしを以て、歸國後直ちに「バーセロナ」に赴いた。彼れは嚮きにアズレス海に於て、始めて靈地詣を行ふや、葡萄牙人の爲めに妨げられしかば、ラ、ラ

ビダの寺院に於て、特に先づ之を舉行するのである。「コロンブス」は出發前にも、此の寺院に於て聖餐供養を受けた。之に次で彼はチロス附近のグワデロープ女神廟及び「モガール」の「サンタ、クラ、」寺院に賽した。「パーセロナ」の旅行は、終始一貫の凱旋式であつた。其の行列には許多の諸島土人を交へ、何れも單純粗野なる服装を著用し、簡素なる首環、腕輪及び純金の裝飾品を飾り附けて扈從した。「コロンブス」は沿道主要の都市に到る毎に、多量の砂金、各種の四足獸、美麗の禽鳥等當時歐洲人の知らざる珍奇のもの、及び植物礦物の如き天産品に關する、幾多の標本をも陳列した。

かくて「コロンブス」は四月中旬を以て「パーセロナ」の宮闕に到着せしに、同地の貴紳、農民及び官憲等邑里の門外に「コロンブス」を迎ひ、君王に對するの禮を以て接伴した。

其の一行の前驅は水路嚮導たる、「ジュアン」が「カスチール」(西班牙の故國)の國王旗を樹て、意氣揚々として進んだ。之に次で顔面を塗飾したる西印度人が、鳥毛の陣羽織及び鳥毛の前立を飾り、水夫等が椰子と果實類とを擔ひて去り、或は鮮麗なる鳥類或は珍奇なる魚族、貝殻、鼈甲、大蜥蜴等を竿頭に懸けて隨ひ、最後に提督は骨格還ましき駿馬に跨り、勇姿颯爽として續いた。爾後フェルデインナド王及びイサベラ女皇は、共に黄金の織物より成れる天蓋を戴きて王位に在つ

た。「コロンブス」は宮室に參殿して、女皇及び皇婿の手に接吻したるに、彼等は起立して、王候に對する如く、其の手を彼に與ふことを避けた。而して「コロンブス」に命じて其の座側に座せしめた。此の時「コロンブス」は面白き素振を以て、種々の奇談珍話を試み、最後に

「神明は西班牙國王の爲めに、雷に新世界のあらゆる珍寶のみならず、猶無比の價格たる許多の土人をして基督教徒の胸裡に牽引すべく、一層偉大なる珍寶を保留するものなり」と述べ終るや、折節會合せる大小臣僚は悉く拜跪し、其の間宮中禮拜堂の樂隊は、謝恩の樂譜を演奏しつゝあつた。

三 捕鯨船上の一日

大獲物の探求

捕鯨船は漁場附近の海面を六七日間巡航しても、往々不漁の徒勞に終ることがある。然るとき船長の顔色は澁面を生じ、愁然として其の薄俸を嘆じ、無益の骨折を悔ひて止まぬ。又水夫等は憂鬱快怏として厭世的悲觀に陥るのも、決して無理ではない。勿論其の不仕合の結果は、各自の給料に影響することが夥だしい。彼等はすべて利益の分配を受くる慣例なれば、鯨脂が船内に一杯になれば従て其の財囊も金圓に満たされて、嚴冬を暖かく凌ぐことが出来るのである。

今日は雪空の寒き日と、殆んど微風も吹かぬ朝鮮海の風である。帆はダラリと下垂して檣を包む如く懸つて居る。船は呑氣にブラリ／＼と徐ろに汽走して居る。唯推進器の緩かに廻轉する響が陰氣に聞へて、海上の靜寂を破りつゝある許りである。船員各自の眼光は閃いて四周の水平線一帯を瞰むるが、其の搜索する視界内には全く何物も見へぬと思はる。折柄突如として、急劇なる高聲が檣上の望樓より起つて、

「彼處に潮を吐く！」

と叫んだ。

時に後甲板に在りたる船長は洪鐘の如き太き聲にて、

「何處か！」

と問ふ。

「右舷船首四點の邊です」

と答へた。

獵艇の出發

今や下令を待たずして、水夫等は急速に蜜蜂の如く端艇に乗る。各艇は遞次に水面に卸ろされ、橈手は敏捷に其の位置に就き、眼光燦々として輝く、各艇の艇尾には士官が端座して居る。艇首には鋸が備へられてある。橈手は畢生の力を込めて艇を動かす。五人の橈手は殆んど同一の舉動を以て艇を使用する。艇の速力は恰かも箭の如く、水蒸氣の爲め、龐大山の如く見ゆる。巨鯨に向つて突進する。彼等の腕力の強健なること實に凄まじい。其の橈を回すときは自動人形の如く、整一の姿勢

をなして、各自其の上半身を起す。槳の把手を前方に出すときは、兩手を充分前方に伸張し、其の

筋肉は堅く鐵の如く緊縮して、快速なる端艇は、掌中の物を抛擲する如き勢を以て、前方に移動するのである。此の壯快にして冒險なる漁獵は、靜かなる海上に敢然として水夫等を銳意奮激ならしめ、凜々たる北風は利刃の如く、顔面を刺すとも毫も屈する色がない。

士官は艇尾に在りて端艇を操縦し、常に本船の信號を注視して進む。望樓よりは絶へず小竿を以て、鯨の所在位置を示して居る。投鉛手は艇首に立ちて、尖銳なる利器を持ち、忙はしく氣を配る。舵手たる士官は熱心に艇を左轉右廻して前進する。其の眼は前方の水平面を注視するを忘れない。若し獲物の浮沈する方向が變じ、本船より更に信號を以て指示する毎に、彼は其の針路を變すべく、即刻下令するを怠らない。其の操縦の爲めには舵器を用ひずして、長く丈夫なる一本の槳を用ふる。



艇 獵

其の槳は艇尾の槳架に嵌りて轉回せられ、之を水中に使用して偉大の効果を生ずる、槳漕のため水面を打つ噪音は、鯨を驚かし易き不利あるから、端艇が鯨の近傍に達せば、槳手は一層槳に力を入れ、舵手は操舵用の槳を巧に使用し、全く音響を立てざる様、櫓權の如く旋轉して水を爬き、死せるが如き靜肅を保ちて沈著に艇を進める。

水夫等は殆んど鐵腕の摧けん許り、奮勵して槳漕を續け、第一著に鯨に接近して最も早く襲撃を加ふることを名譽とする。今吾人の乗込める艇が先づ第一著を占めしと假定せよ。該艇は即ち本船一等士官の指揮せるものにて、屈竟の水夫を第一に選擇せしものである。此の端艇の設備を簡單に述べること、頗る有益の事と思ふ。此の艇は通例捕鯨の作業に使用さる、端艇五隻中の一であつて、長さ約三十尺、艇の首尾共に尖銳なれば、何れが艇首か艇尾なるかを識別するに苦しむ。其の底は弧状をなして、「コルク」の如く、著しき浮泛力を有する。其の船體は中央稍低く、兩端に至るに随つて漸く高く、甚だしい反形をなして居る。其の中央の最も低き舷は、龍骨より僅に二尺一寸許の高さである。是れ即ち波浪洶湧たる大海に適する構造である。艇首には索繩を入れたる桶が備へられ、其の中に柔軟なる細索、即ち捕鯨網が縮ねられ、鯨を捕へたるとき其一端を汽般若くは獵艇にて曳くのである。此の索具の太さは、周圍約二寸の最良質の麻網にて、絹絲の如く柔らかなるを以

て、必要に應じて水の如く滑らかに繰出す。苦し此の索が堅剛なるときは、鯨を仕留めて其の逃走する際、曳索が急劇に進出する爲め、往々縫れが生じて端艇を沈め、人命を失ふの不幸を惹起するのである。然るに此の良質の網は、長さ三百八十尋あるも、少しも縫ることがないから、實に安心である。萬一網の長さが不足にて、獲物を逸失する虞あるときは、別に他の繩桶を出し、之を結びて充分の餘裕を取る。

此の網の外端は銛の尖鋭部に近く結著されてある。而して此の銛は捕鯨砲の砲口に嵌入されてある昔時は人力を以て銛を投じたが、現今は火薬を用ゐて之を打出す、船内には許多の銛と、澤山の手槍とが貯藏せらる。手槍は鯨の死命を制する爲めに使用する、曳網が萬一危害を生ずる虞あれば、之を切斷する爲め、銳利なる手斧が艇内に備へられてある。水桶、羅針盤、航路浮標、蠟燭及び網帶具囊までがすべて整ふて居る。

巨鯨の捕獲竝に勇壯なる血戦

鯨を發見して追尾する獵艇の士官は、時々立ち上り、只管前方を熟視して、若し艇員が狙ひを誤りしとき鯨の逃路を絶つ爲め、他艇が適當の位置に配せらるゝや否やを一瞥して其の坐に復し、用意

宜しきを見て大聲急呼して、

「打て！打て！」

と命す。鯨は正に睡眠を貪りつゝありしが、今や其の夢を破られ、忽ち躍進して水中に洩らんと騒ぐ、艇員は前記の如く益々接近し、全力を竭して、惡鬼羅刹の如く撓を用ゐ、艇は將に飛走する様である。

士官の面色は蒼然として、稍々前方に身を屈め、恰かも絶望の目的を達せんとする人の如くである。其の口唇僅に開きて、其の神経は鋭く興奮して居る。

「モット漕げ！シツカリ漕げ！」

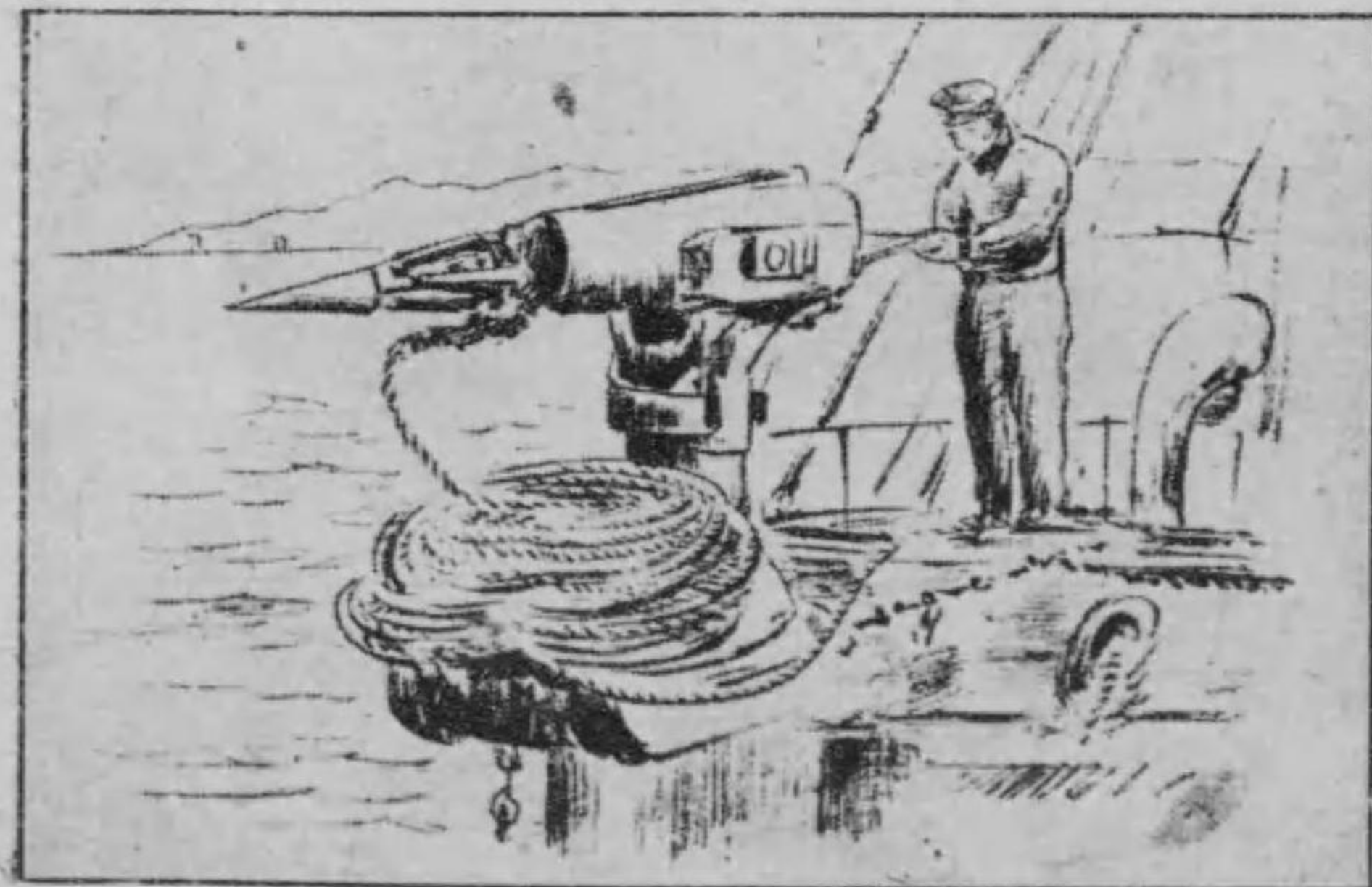
彼はかく絶叫して、艇はチタン神の舟人によりて航進する如く飛ぶ。投銛手は砲底近く身を靠して砲を發すれば、爆聲轟き渡り、鋭き鋼錐刀は巨鯨の頭部目蒐けて穿入する。其の屍然たる體軀の潜水せざる間に、手槍か亦投げ込まれる。鯨は俄に水を蹴て、海中に突進した。其の活躍の勢は實に凄慘を極め見るものをして、殆んど失神せしむるのである。其の最期の奮闘振の何ぞ此の如く甚だ勇壯にして華々しきや。彼は竊に憤慨して、

「咄何事ぞ！小癩なる人間めが我が虚を狙ふとは、烏譚がましきの至りである。笑止々々！」

と言つた様な態度を以て奮迅咆哮する。艇員は先きに手を下せんに拘はらず、今其の兇猛なる勢に辟易して、暫時之を傍觀するのみで應戦を試むるの機會を得ない。其の全身六十尺に亘る長鯨はジェリーの如く顫動し、龐大なる尾鰭は高く氣味悪く、海面に突出する。艇員は喫驚仰天して思はず、機を撃落されたか、艇尾の機を二三回動かして危うく災害を免かれた。間もなく其の扁平なる大尾が轟然として水を煽つて、艇底の下に來たが、艇員は幸ひに何等の危難を蒙らない。然るに又巨獸は一氣に電光の閃らめける如き速度を以て跳躍し、無抵抗の艇を曳き行くこと數分時に及んだ。其の峻悪なる顎の兩側よりは、雪白なる水壁が烈しく湧起して、泡沫は數尺の高さに堆積しつゝ、流出し恰かも乳汁を散布する様に見へ、一たび攪亂されたる海水は附近の水色と異なりて、艇の兩舷を壓して擴延し、鯨は角點に在りて進み、極めて精確に、其の時吹き起れる微風に逆つて溯航する。艇員は之を屠る爲め、曳綱を手繰りて近接することは、到底困難の業である。其の龐大なる尾鰭の一撃に遇へば、如何なる端艇も忽ち粉塵さるのである。然しながら鯨は水面に浮游して沈まぬ。彼は既に充分疲勞せる様である。彼は銳利なる錐刀と鐵槍とを、其の體の要部に負へるので、最早や長時間の急駛は出来ない。必らず數分時の後には、斃れるであらうと思はれたが、驚くべし、彼は突然水中に沈入した。曳綱は電光の如く、投銃手の喫煙せる艇首を掠めて滑走するを見た。投銃手は

少しも慌てず、斧は直に其の手に握られた。其の顔面は稍々瘡猛の殺氣を帯び莞爾として居る。其の滑走する網は危機一髪と云ふ最後の時でなければ容易に切斷せんとしない。されど愈々切迫の場合となれば、閃電一撃鯨は掣肘を解かれ、艇員は全く其の獲物を失はねばならない。今手斧の光輝晃然として鉅網が弛めらるるとき、鯨は漸次に水面に浮揚したるも、巨大の體軀は猶斃死せずして、周章して一處に回轉して、巨口を開き、投銃手を噬み碎かんす勢にて向ひ來る、乗すべき好機會は眞に瞬間である。彼は赤裸々の急處を敵に示した。投銃手は此の機を逸せず、狙を定めて手鎗を打込み、距離が近いので鎗先は數尺の深さに穿入する。其の上投銃手は全力を用ひて之を押し込み、口中に致命傷を與へ更に其の鎗を引き動かし、或は廻はして、恰かも兵士が銃器を掃除する如く、徐々に怪物の命脈を絶つ。

捕鯨船の一日



巨獣の鼻口よりは、血液が泡となりて噴出し、最早其の死期が近づく、其の吐出する潮水が漸く減少し、血液が更に増加する。少時を経て吾人は遂に其の死滅を認むる。捕鯨の秘訣は餘り甚だしく接近せぬことである。是れ其の死際の苦惱に依り、思はざる災禍を蒙る恐ある故である。然れども大軀は忽ち最後の呼吸と共に眞直となりて、死屍は全く海上に浮び、血液は海面に充溢し、苦戦艱闘の慘状は殆んど形容することが出来ない。此の時吾人は我が捕獲を全ふしたのである。

鯨肉の截斷

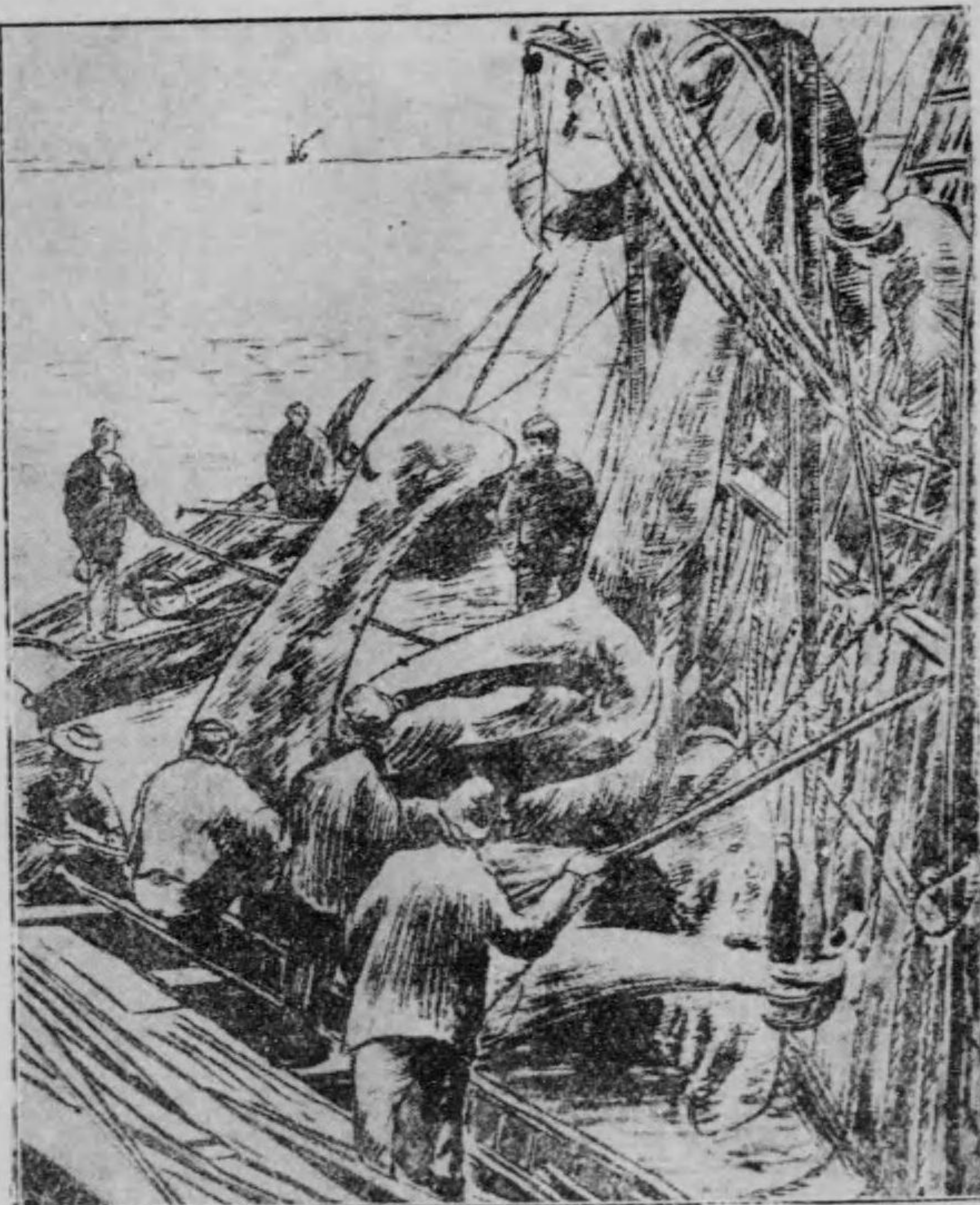
是より巨體の尾鰭と接合する處に、丈夫なる鐵鎖を鯨の周圍に捲き附け、端艇にて徐々に之を曳き、本船の側に我が獵物を運搬する。本船も亦艇の方に航進し相近きて、本船の舷側に鯨を横附となし一先づ短時間の休憩を行ひたる後、脂肪を船内に取込むのである。

尋で脂肪肉の切截が可成速かに施行さるゝ。大なる絞轆が大橋頂より釣り下げられ、其の下方の滑車は著大なる鈎爪を有して居る。外舷には足場が懸けられる。但し此の作業に對して船の右舷側を用ゆるを例とする。數名の士官は銳利なる截肉刀を用意し、其の柄の長さ約十四尺のものを携へ

て、上甲板より降りて足場の上に乗る。此の作業は、すべて士官の擔當すべきもので、巧妙なるものは、此の大刀を自由自在に使用して、綺麗に鯨肉を切截すること、宛然理髮人が剃刀を用ふる様である。

鯨肉の厚皮を切り割く爲め、先づ其の頭部の邊に圖形の孔を穿ち、夫より斜めに切り截き、廣大なる贅瘤を脂肪の本體より分離する。其のとき截肉刀を以て之を切る。而して艇員は皆鯨體に上り、前記の鈎爪を頭部の孔に嵌入し、絞轆の一端を前部にある。強力の捲揚機に導き、靜に之を引揚ぐ。幸に海面は鏡の如く靜穩にして、此の大重量を扛起する滑車は、何等の故障を見ざりしは好都合である。多少の風波あるときは、非常に危険を感じるを以て、引揚作業は一層困難なるのみならず海中には鯨の血漿脂肪が浮流せる爲め、好餌を爭ふ大鱈は群集して、長き醜狀の鼻を突出して、水上に在る労働人の脚下に徘徊して居る。殊に足場は脂肪の爲め、汚穢塗抹されてある。若し船員が誤て足を滑らし、海中に落つるときは、忽ち彼等の魚腹に葬らるゝのみである。

「ウインチ」が捲かるゝに隨つて、肥大多量の鯨肉は、徐々に水上より高く引き揚げらる銳利なる截肉刀は忙はしく動きて、脂肪と肉とを分つ、此のとき海上が平穩なれば、漸次船體を一方に傾けて作業の進行を補助する。鯨の巨體が舷上數尺の高さに扛起されしとき、第二の孔を下端に穿ち、



鯨骨及尾鯨を引揚ぐ

鼻を衝く。又此の大切片を細に薄く切りて、小さき方形となし、多数の樽の中に投入し、一杯となりたる樽を船内に收め、更に空樽を出して之に詰込むのである。

其の中に鐵鎖の條索をら導き前記の如く他の絞轆を用ひ、其の滑車を通じて之を引き揚ぐる。艇員が彎刀を以て脂肪肉を切り取る是は「ブランケット、ピース」と名づくる。脂肪肉が大橋下の昇降口の上方に釣り卸るるれば、切解の工人は之を受け取りて、直に肥大なる鯨肉を截斷して大形の切片となし、之を甲板上に積み上げ、臭氣紛々として

鯨の頭部は切解さるれば、其のまゝ船内に引揚げられ、鯨骨は甲板上に於て肉より切り取り、大切に貯蔵するのである。時々多量の鯨骨を積載して、數萬圓の價格に及ぶ汽船が各開港場に入港する。之を見ても鯨骨ですら、決して輕んずることが出来ない。

抹香鯨は其の頭部より貴重なる鯨腦油が得らるゝ。是れは鯨族中一種特別のものである。鯨の種類は澤山で、實に貿易上有利のものも亦少なくない。

鯨の屍體は前記の如く切り離され、大部は皆船内に貯蔵され、殘滓は海中に委棄せらる。然るときは多數の鯨に取り圍まれて、其の咬み付く顎の恐ろしき響は明らかに耳に聞ゆる。けれども船内は多忙至極のときなれば、誰人も之に頓著しないのである。又他の鯨が捕獲された。作業は前述せる如く同様に繰返さるゝので、忽ち船内は鯨肉にて一杯となり、歩行にも頗る困難を感じる程である。

捕鯨業の漁利

捕鯨業は誠に有利のものであるが、此の目的の爲め、獵手は極風淋雨の苦難を経て、長時間の勤勞を忍ぶべきこと、實に陸上の人々の想像以上である。今多量の獲物を積載して母國の港灣に歸る。其の愉快は亦計るべからざる程である。船員には夫々の手當を給與して、充分の休養と慰安とを交

附し、由て以て次期の出征を待つべきのである。我か近海には鯨漁業の最も有望なる漁場が多い。就中朝鮮海千島海等は世界に於ても有名であるから、多数の外國漁船が同方面に徘徊して漁利を壟斷するものが、毎年少くない。然るに我が當業者は今猶常に彼等に一步を譲るが如きは頗る遺憾である。勿論海洋は各漁業者の共有區域に屬するもので、決して一國民一地方民の私すべきものでない。優勝劣敗は世上の通則なれば、我が近海の漁權を領有するには我が當業者自ら奮勵努力せねばならぬ。複雑繁瑣なる法規等を設くるも、實際的確の効力は見られ難い。誰人にまれ其の意の欲するまゝ、太平洋若くは日本海に航過し得べき純然たる權利がある。或は狩獵漁業を營まんと思はば、自由に各海灣に來到し得べき共通の能力がある。太平洋は米國民の専有なりとか、或は日本海は日本人の獨占なりとか思惟する如きは、皆各自の誤解より起る机上の空論である。海洋は廣漠無窮の競争場なるを忘れてはならない。

四 潜水業の冒險

潜水業の沿革

大海の海底は美觀を呈すると同時に、亦甚だ恐怖の状を見ることがある。丹碧鮮麗にして人目を娛ましむる海産生類の側らには、奇形巨體の動物が徘徊して居る。加之大洋の深淵中には、得難き財貨珍寶少なからず殘存せるも、之を探尋し獲取せんと欲して、突入を試みたる潜水夫の敢行に對し、神は死滅を與へて之を拒んだ。是は人間を呑む鱷の襲撃の爲め然るに非らず。又兇大なる鳥賊或は章魚の妨害にも非らず。海底寶庫の侵略者に取りて、最も慘害を逞ふする唯一の強敵は、實に猛烈なる水壓力である。

鉅萬の黄金は漫々たる海洋の底に沈み、古來搜索の使命を待つこと久しきも、其の寶庫の覆蓋は、每平方吋百斤餘の大重量を以て、壓迫せらるゝ爲め、貴重財寶は、到底吾人の近接を許さざることを遺憾なれ。

善良なる潜水夫は、何等の器具を用ひずして、水中に約二分間留まることが出来る。千八百八十六

年にジエーフィンコーなるもの、四分三十秒の間潜水したることがあり。又近來素裸體を以て六分間の潜水を行ひしものありと聞くが、果して事實とすれば、特に良好なる潜水状態に在りて、一種の除外例に過ぎぬであらう。

壯健なる人は近世式の潜水服を着用すれば、適度の深さある海底に於て、數時間の作業に従事することが出来る。但し二十尋の深さにては、身體各部に感觸する壓迫作用は甚だしく重且つ大となり猶三十四尋に至れば、其の水壓力每平方吋八十八斤餘に増加し、最も強壯なる體格に非ざれば、之を支持することが困難である。

英國にて冒險なる潜水業組合を設立したるは、彼の西班牙國アルマダ艦隊の一沈船より、黄金を拾集する爲め始めて起つた。千五百八十八年アーギル侯爵は機械操縦の實技に堪能にして、且つ博學沈勇なる一英人を聘し、昔時ミユール島の近海に沈没せる、上記西班牙戰船の視察を命じ、該英人自ら海底に下りて、其の殘骸を調査した。此の希代の智者は其の名を「ジエームス、コルキューホーン」と云ひ、グラスゴウ府の人にて、數回海底旅行を實施し、常に皮革製の空氣管を用ゐて、呼吸を全ふしたと云ふ。爾後七十六年を経て、甚だ奇智に富める「メルジム」公、亦其の難破船を視察し、潜水鐘を用ゐて數門の大砲を得た。畢竟此の二偉人こそ、剛勇なる潜水業の元祖と言ふべきで

ある。千六百八十七年ウィリヤム、フイリツプと云ふもの、「ヒスバニオラ」の海中に沈没せる西班牙戰船中より、金貨三百萬圓を拾得したことがある。此の幸福にして勇猛なるフイリツプは、尋で英國に歸朝するや、其の殊功に依り華族に列せられた。

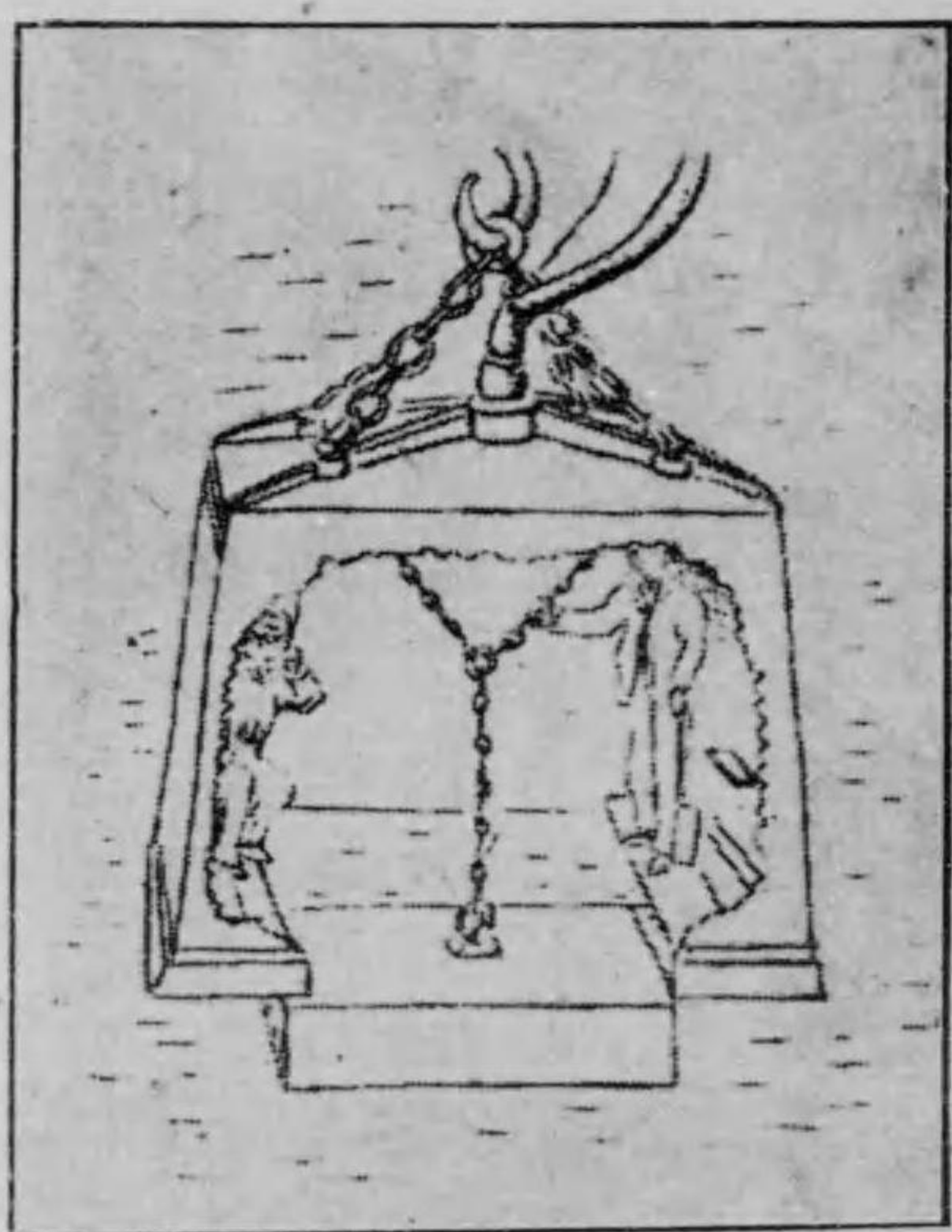
嘗て英國ヤーマウス造船所の一職工、デーと云へるもの、大洋の深淵に闖入し得る、一潜水船を製造せんと苦慮し、數時間潜水の後、運用者の意のまゝ、再び水面に浮揚せしむべき装置を發明した。由て同人は自ら其の成功を豫期し、チャールス、ブレイキなるものをして、五十噸の單桅帆船を調達する爲め、資本金若干圓を募集せしめしに、其の企業の補助者は、世人より多大の信用を博し巨額の金圓立ちに集り、立派に成功を見んとした。

是に於てデーは千七百七十四年に、其の實驗をブリマウス海峡内のファイブストーン灣口に於て施行することとなりしが、彼は全く學理上の研究に迂遠なりしも、勇猛大膽の心志實に旺盛を極め、獨り自ら改造したる船内に潜入し、其の戸扉を閉鎖し、言動に應じて、該船は百三十二尺の海底に投下せられた。水上の人は豫定の時間を経て、之を檢視したるも、再び該船を見ず、其の後、デーは遂に潜水船中に壓死したることが分明となつた。

蓋しデーは百三十二尺乃ち二十二尋の深さに在りては、強大なる水壓力の爲めに、自身の斃るゝ

を知らず。其の沈下するに當りて、底荷として、重量二十噸の砂利を舷外に擔いて海底に達し、更に之を離脱して、再び浮揚せんとするの装置を設けた。けれども彼は甲板上に別に三十噸の砂利を積載せしを以て、之が爲め船は海底に膠着して動かざるに至り、深海の水壓力に對抗すべき空氣室の構造ありしも、全く無益に了つたのである。

嗚呼深藍色の海中に踏込み、自説の正鵠を證せんと欲し、其の生命を賭して顧みず。遂に海中に生きながら葬られし、潜水業の先鋒たる是等勇士の功や實に偉大である。其の沈勇と創意の奇抜とは吾人の嘆賞を禁ずること能はず。而して往古の世に於て水罐を用ゐて、其の實驗に供したるが如きは、誠に後世の才智を進化するに於て、格段の効果を生じ、斯道の發展上利する所多大にして、近年潜水鐘の應用を見るに至つたのである。嚮きに水罐を使用せし時代に在りては、潜水者は鐘と共に海底に降下したる後は、罐内に貯藏せる空氣を呼吸し、空氣全く盡くれば相圖をなして水面に浮揚したのであつた。然るにドクトルハルレー氏は之を遺憾に思ひ、重量を附したる空氣管を考案して、潜水鐘の下縁の位置より稍下方に沈置し、之を以て作業員の呼吸を助けしと云ふ。即ち同器の頂部に一嘴管がある。之を振廻はして、汚敗せる空氣を逃逸する。此の方法に由り、潜水者は自ら望む如く、長く海中に在ることが出来る。是れ同氏が潜水者をして恰好の深さの海底にて、満足な



潜水鐘を以て石材を下す

る作業をなさしむべく考案せるのである。

千七百八十八年スミートン氏がラムスゲート港改築の際、使用したる潜水鐘は、空氣管と空氣唧筒とを備へ、其の構造現今一般に使用せるものと

大差なかつたのである。

テームス河底の隧道建造工事のとき、河水俄に氾濫して構造物の全部を濡らし、當時有名の建築技師ブルーネル氏、其の破壊の状況を實視せんと欲し、自ら潜水鐘の中に入りて河底に下り、同器の徐々繰り下げらるゝや、同氏は大膽にも一本の索條に縋りて、更に十尺餘深く潜水して、排水工事を一覽せんと跳入した。固より同氏は自己の肺中に鐘内の壓搾空氣を満たしたれば、確に二分間水底に止まりたる後、鐘内に復歸し得べしと思ひ、斷然たる決心を以て、目的を達したのである。

水中の格闘

難破沈船たる英艦ローヤルジョージは、最初に潜水鐘の作用に依りて検分された。けれども其の救難作業は多く近世式の潜水方法を適用して實施せられ、現に拾得されたる遺物は之に依りて奏功したのである。此の作業はスピットヘッドに於て行はれしが、工事中從來聞知されざる珍奇なる水中格闘の一件が起つた。其の闘争の原因を糾せば、潜水夫の伍長甲と一潜水夫乙との二名は、當時の潜水業仲間に於て共に屈指の妙手にして、豫て反目の結果相嫉視するに至つた。一日兩人は波浪の下に在りて、平素怨恨の情火心頭に發し、共に一片の彫刻材を捉へて、互に把持の力を弛めず、暫らく引張り合ひて争ひしが、忽ち打叩き擲り合ひを始めた、甲は元來體軀矮小なるを以て、對手に最終の打撃を與へ、救命索を握りて水面に逃避せんとしたれば、乙は然かはさせじと其の足を捉へんとせしとき、甲は重量二十斤の鐵靴を振動かし、乙の面部を一蹴したれば、何かは溜らん、其の兜の玻璃鏡全く破壊し、乙は踉蹌として倒れ、海水其の損處より浸入して、危くも生命を失はんとせしに、幸に其の時水面に引き上げられた。翌日に至り兩人は沒理悖德の闘争を大に恥ぢて、互に握手を交へ、爾後無二の親友と變じた。

潜水の危害

惟ふに潜水業は神經衰弱の人の從事すべき作業にあらず。節欲自制の感念に富める、體質完全の人に於て始めて之に適するのである。此の如き人なれば潜水兜或は潜水鐘の何れを問はず、好果を見るは明瞭なるも、前者を用ゆるよりも寧ろ後者を用ゆる方、神經過敏の人に取りに行ひ易き様である。潜水者、若し其の救命索或は空氣管に縋れを生ずるを發見すれば、斷然たる決心を以て其の兜の弁を閉ぢ、深呼吸を腹部に入れ、空氣管及び救命索を絶ち、重量を抛棄して、水面

水中の格闘



體質完全の人

四 潜水業の冒險

に脱出するに若かず。然れども潜水鐘内に在りて、此の如き不良の状態に陥るときは、鐘内の人は、到底自ら窒息を免かるゝことは出来ないものである。

今を距る五十年前、英のドーヴァー港に埠頭を新設するに當り、激潮流の爲め、潜水鐘顛覆して壓流せられ、折節築設工事に従事せる人々は、其の流失を防止せんと欲し、協同努力すること約二時間餘に及びて漸く之を得たるも、鐘内に在りたる潜水者は不幸にして失神し、海水其の喉元を浸せるを見、一同喫驚せしに、彼は間もなく蘇生し、衆人意を安んじたか、彼は汚濁せる空氣の爲め、十五分間餘窒息したのである。

舊式過重の潜水鐘を、三十三尺の深さの海中に降下するに、海水鐘内に浸入して、内側の高さの半ばに達する。猶此の深さ以上の處に沈めば、一層高く浸水して、鐘内の空氣は益々凝縮するであらう。

嘗て一人の潜水夫が約四十尺の海底に降りて作業中、使用の潜水鐘舊式品なりしかば、同人は同器の中央に懸吊されたる坐席に在りて、其の兩脚を水中に垂下しつゝ、ありしに、漸次繰下げらるゝに隨ひ、浸水漸く高く昇りたれども、彼は少しも驚かずして潜入を續け、脚下に氣味惡き物體が現出せるを見て、俄かに愕然として色を失つた。けれども自から勇氣を呵して之を熟視するに、同

器が靜かに海底に降下せる結果、鐘底に游泳せる一尾の大鱈を包容し、尋で人と共に鱈は鐘中に捕虜となつたのである。

然るに鱈は恰かも金魚の如く器底に密藏されたれば、甚だしく周章狼狽して、四周の鐵板に其の尖鼻を衝撃して荒れ狂ひ、驚愕の狀亦潜水者と同一程度に在りしも、一は微々たる人間、他は海中の巨魁にして、潜水鐘内の境域に於ては、同一陷穽の中猛虎に對する綿羊に異ならず。鱈は突として其の尾を打ち振り、彼を其の坐上より叩き落せば、彼は慌て、直ちに跳り上りて、其の舊位に復し僅に大息を洩らす。

彼の運命は實に風前の燈火の如く、擗猛なる怪物の爲めに、或は呑噬せらるゝと覺悟したのであらう。彼は先んじて之を制するの得策なるを思ひ、自ら進んで之を斃さんと決心した。鱈が鐘内を繞りて游泳し、其の近づき來るを待ち、背鰭を握り鋭利なる刃物を以て、滑らかなる其の腹部を深く刺したれば、鱈は一層狂亂苦悶し、狹隘なる鐘底に於て、烈しく右往左往して、彼の視力を殆んど眩惑せしめしが、彼は屈せず、自ら生命を愛著して、盲目打ちに再三再四之を突いた。

其の苦戰亂闘は恰も夢魔に襲はれし如く、暫時の間、彼は無意識に經過した。鱈の歯牙は幸に彼の身體に觸るゝ能はず、其の迫撃を避ふる尾は、鐘内の鐵板に激觸して、其の醜怪なる尖嘴を衝突し、

鮮血は雨の如く散亂するに至つた。然れども此の激烈なる争闘は遂に長時間を支ふる能はず、鱈の奮迅する勢威次第に緩やかになりたれば、彼は潜水鐘を引揚げしむべく、相圖を海面の人に與へ、鱈を鐘底の片側に突き止むる好機を占めた。鱈は苦痛にや堪へざりけん、再び猛烈に奮躍游動し、潜水夫は驚きて再び之を刺すの勇氣を失ふ。而して鱈は此の時より衰弱の度を加へ、戦は耐忍辛苦の勝利を以て終つた。

海面の人々は、潜水鐘引揚の合圖を時ならぬときに受け、稍々喫驚して、引揚用の絞轆を鈎して之を揚げ、鐵色晃々たる鐘器が徐々として水上に現はれ、防衝材の外に揺動し來るや、鮮血淋漓たる大魚が衆人の脚下に落ち、皆顔色を變じて恐怖した。其の魚は死に臨んで苦悶に堪へず、全身を跳動し、其の尾を暴く振蕩したれば、一人も之に近くもなく、魚體の顛轉未だ止まざる間に、潜水夫其の側に横はりて更に動かす。彼は鱈の血を浴び今や人事不省に陥り、殆んど死人の如く、到底其の生命を保つ能はずと見へた。

少焉彼は意識の明瞭となるや、其の足を腕きつ、叫んで、

「予は最早快愈したが、本日は再び潜水することは思ひ止まる。」

と云つた。彼は鱈と奮闘して、片手に微傷を蒙つた。是れ其の背鰭を固く握りし爲め、裂傷を受け

もある。

或は小魚群游して潜水者を取圍み、其の作業を妨害するを以て、遂に其の作業を中止して、之を驅除するの煩累を生ずることもある。鰻は往々氣管の周圍に強着して絡み付き、彼をして苦悶せしむ



沈船と貴重品を揚ぐ

たのである。闘争の紀念として衆人の眼に入るものは、唯是のみで、他に何等の損害を見ざりしは僥倖であつた。潜水者は時として海蛇の如き、不快なる動物に接することあるも、茲に再び此の如き冒險談を繰回すの愚なるを知るのである。けれども海底には海藻翁鬚たる美觀を毀損すべき、幾多

の醜怪動物あるを讀者は忘れてはならぬ。海綿は深海中に於ける無害動物の一種である。是等無害動物中奇形異状を有し、或は好事の潜水者をして一時其の足を駐めしむることも少なからず。而して其の空氣管は海底に叢生せる壯大なる海綿の間に紛糾して、其の背後の鍾量を委棄し、或は氣管を破り、自己の生命を救はんが爲め止むを得ず、海面に突進するに至ること

る如き悪戯をなす。又カス鯨其の他二三の怪魚は、突として襲來し人を害することがある。章魚は海
 事小説家の想像する如き動物にあらざるも、潜水者に取りては甚だ危険なる敵である。筋肉最も發達
 せる潜水者も、長さ六尺以上の大章魚に脅かされる時は、僅に十分間位にして絶命することがある。
 然れども海底に棲息せる魚類中、鱈の如く最も甚だしく潜水者を懊惱せしむるものはない。注意周
 到なる潜水夫ですら海底に在りては、附近に徘徊出沒する鱈を目して、恐るべき敵とする。狡猾なる
 鱈は始め自己の同伴の如く思惟せらるゝも、潜水者の降下し若しくは上昇する其の處に乘して、之
 を害することがある。故如何にと云ふに、鱈は對手の防戦を畏るゝより、自ら進んで敵を攻撃する
 ことをなさず。是れ其の孳惡なる性質を現示し、唯食餌を得んと欲して戦ふのである。且又朝且は
 其の食欲甚だしきときなるを以て、早朝の水泳は特に注意を要する。凡ての船員朝來の水浴を以て
 鱈の爲めに朝食を供するが如しと稱す。其の食欲の増進は常に此の如きときに起るのである。
 南洋の海上に、嘗て數十頭の牛羊を積載せるまゝ、沈没したる一船があつた。一人の潜水夫之を引
 揚げんとして、海底に降下したるに、豈圖らんや、凄惨身の毛を豎てる程の危険に遭遇した。多數
 の鱈は溺死せる獸類の近傍に群集して居つたが、彼は少しも之に氣付かず。先づ裝薬を船内に置き
 「ハッチ」を破壊せんとして、偶然牛の體軀が水面近く浮べるを望み、怪んで眸を凝らせば、數十尾

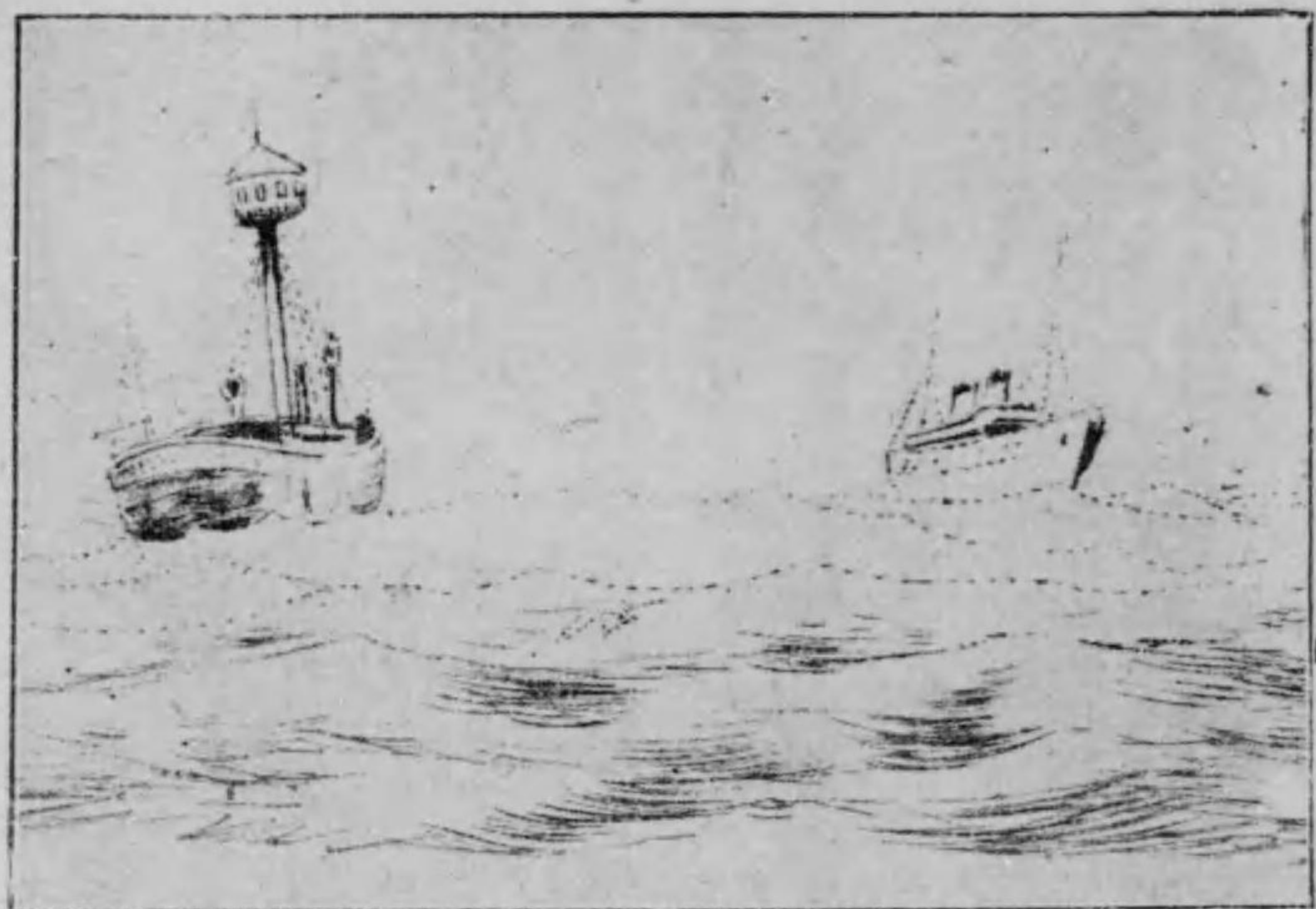
の鱈が好餌を争ひ食し、各々相戦ひ、死屍は幾多の裂片となりて、再び海底に落つるを見た。潜水
 夫は遂に鱈の大群の間に挟まれ、茫乎として爲す所を知らない。此のとき彼は自己の經驗より考へ
 以爲らく、今若し海面に昇らば却て大魚の腹を肥すべく、又之に反して海底に降下せば、救命索及
 ひ氣管は、倏忽にして噛み切らるゝであらうと思つた。彼は敢然として蹶起し、甚だ大膽なる動作
 を以て合圖をなし、恐ろしき亂軍の間より海面に引揚げらる。大鱈は忽ち突進し來りて彼を噛まん
 とせしも、彼は巧に身體を交はして之を避け、其の隻手のみ鱈の齒に傷づけられ、其の他の危害を
 蒙らずして恙なく海面に浮揚した。

五 海上の濃霧

濃霧に對する船舶の處置

堤防を連ぬるが如く、障壁を繞らすが如く、天地晦冥、大氣は濕潤、頭重く鬱陶しき太平洋上の濃霧は、濛々として今正に東京灣内に侵入し來れり。波濤は旋轉して閃めき、斷崖は白く丘岡は蒼くして、各膨脹したる淡靄を罩め、遠くより之を望めば、模糊漠々として何物も見ざるべからず何色も認むべからず。

されば海上に往來するものは濃霧を嫌忌すること甚だしく、陸上に在る人の幸福を羨望して已まざる。蓋し陸地に瀰漫する烟霧は、單に一時の展望を妨ぐるに過ぎず。何ぞ人命を絶つが如き悲惨なる災禍を惹起することあらんや。之に反して海霧は廣漠なる區域を蔽ひ、天空狹窄、海面の明視を缺く、彼の定期郵船の如きも、無数の乗客と貴重なる財貨とを滿載しながら、外國港灣より歸朝の途次、一たび海霧に遭遇すれば、速力を半減し、遅々たる航行に甘んぜざるを得ず。而して政府は豫定の著港期日を過ぎて入港する船舶に對しては、巨額の罰金を課するの規定あり。船長は實に之を熟知す



五 海上の濃霧

霧 濃 の 上 海

と雖も、亦如何ともする能はず。又海外各地に向て解纜する汽船は、泥堆或は砂洲を通過して洋中に出づれば、霧霽れされば徐航し、前路を警戒して進べし。霧中に於ける漁船、沿岸巡航用の汽船、其の他小船艇は皆時鐘を鳴らし、又手働の霧角を動かして、各自の無難を祈る。是れ船員の霧中に際し宜しく努力して執行すべきものなり。何れの時きを問はず、巍然たる高舷鋼裝の船首は、一萬馬力の駛力を以て、暗中より咄嗟に現出し來り、忽ち舟艇の水線部を破り、或は之を壓迫して不意に沈没せしむること、其の例枚擧に遑あらず。

嗚呼霧中の惡魔が海上遙に其の手を擴ぐるときは、視界は全く無用となるべし。如何なる物體も其の形影を消失し、如何なる信號も皆目之を辨ずべからず。

故に無線電信機を有する船舶は、互に其の近接を通報し、操舵の信號を授受して衝突を豫防するなり。時鐘は時々之を打ち鳴らして霧中汽角は猶屢々之を用ゆ。霧中汽角は牡牛の唸聲に似たる高音を發する一種の喇叭にして、汽力若くは手輪の作用に依りて、鳴る如く設備せられ、音響の間隔は最も正確を要して之を鳴らす、各船舶の間に共通なる海上信號法は、長短符の連結せる信文より成れり。即ち「モールス」式暗號符を應用するものなれば、内外國の各船は之に由て自己の採れる針路を報じ、相互に危険を避けて、接近するを得べし。

霧中に於ける信號器具

多數の霧中汽角同時に鳴り響くときは、一種の悲調を感じ、此の如く傷心不快なる情趣は他に之れあらざるべし。船舶の出入頻繁なる港灣に於て、濃霧の際一船獨り之を鳴すも、猶閑寂たる思あり。況んや東西南北の諸船悉皆之を鳴らし、終日咆哮するときは、其の音聲悲哀にして、眞に斷腸落塞の感を生ず。汽角は霧中汽角の改良されたるものにして、喇叭管中、無數の小孔を穿てる圓盤を備へ、汽力に依り急速に之を回轉し、其の無數の小孔より空氣を逃しめ、以て大音響を發す。是は汽船に於て一般に使用せるものなり。圓盤の回轉益々速かなれば、汽角の叫聲始めは低くして、終に高大と

なり、其の音響は能く遠方數里の外に達するの利あり。自鳴鐘浮標及び警笛浮標は夜間危険を避くる爲め、通報の効力を示すが如く、霧中のとき、亦航海者に必要缺くべからざるものなり。且つ燈船、燈臺は平生燈火を點火する外、汽角信號或は號砲信號、火箭號火等を用ゐて、航路の警戒に任ずるものなり。近年無線電信の普及は、海霧の危害を著しく減じたりと雖も、猶之よりも一層有益にして、嶄新なる發明品最近に現出せり。即ち海底信號浮標是なり。是は其の構造至て簡便なるを以て、逐次一般に襲用さるゝに及べり。

夫れ水は音響を傳達すること、空氣に比して四倍の速力あり。昔者千八百二十六年の時代に、ゼネブア湖に於て湖底に一警鐘を置き、巧妙なる装置を施して、之を實驗せる學者ありき。然るに當時は水中に音響傳達力の偉大なるものあるを知らざりしを以て、之に關する研究は何等利する所之れあらざりしが、今を距る十四年前、海底信號俄に進歩し、英米兩國に於て早く既に採擇せられたり。

定置警鐘即ち警報鐘は海底の岩礁、淺灘及び燈船の下方に設置し、氣壓力或は電氣力を用ゐて之を鳴らす、各警鐘は特設の警鐘信號を備へり。假令は一信號處若くは一燈船に在りて、隨時自動的

に下記の如き警報信號を發する事を得べし。其の發音符號は振鳴二回の後、三秒時の中止をなし更に振鳴二回をなし、中絶一秒時にして再び前の如く繰返なり、又他の信號處に於ては、始め振鳴三回をなし、中止二秒時の後、又振鳴三回及中止二秒時なる如く、連續發信する者あり。實際此の新式發明器具の特色は、前記信號を聴取するに足るべき、聽音器を用ゆるに在り、此の聽音器は約二尺平方の鐵罐二個より成る。鐵罐の内部には海水を充し、各船舶の外舷水線下に左右兩舷に各一個づつ、堅牢に取附けらる。而して其の位置は船舶の大小に依り船首より離隔する距離不同なり。鐵罐の中には微音機と稱する精妙なる電氣器具を懸垂し、極微の音響を認識するを得べし。而して微音機は電線の媒介に依り、船橋若しくは水先案内人の室内に連絡し、同處に備へられたる電話機は二組の受話

霧中の信號器の種類



口を設け、二人の士官或は水先案内人をして同時に傾聴するを得せしむるなり。此の定置電鐘は甚だ完全なる効力を有し、開閉器の轉回如何に由り音響の來れる方向、即ち左舷よりするや、或は右舷よりするや、將た前方よりするやを聴者に明示す。其の考案の公表日猶淺しと雖も、既に多數の人命と財貨とを救助するに於て偉大の効ありたり。

霧中の警戒航行

海軍艦船は濃霧四塞して海上の交通を妨害するときに際し、規定の如く霧中に在りて、警戒航行を爲し得べし。之が爲め幾多特殊の妙案あり。就中最も有益至便なるものは、霧中浮標と名くるものにして、世人之を熟知するもの多からんと雖も、試に之を記すること左の如し。

二隻以上の艦船相共に隊列を整ひて航行するときは、一縱列若しくは二縱列を制り、各艦は間隔を正しく保ちて進まざるべからず。此の距離を持続することは頗る緊要なるものにして、全艦隊の保安上、決して忽諾に附する能はざるなり。霧中の航行に於ても、容易に此の如く航進せんと欲すれば各艦船は須らく其の間隔を縮むる手段を要す。是れ其の艦尾に霧中浮標を曳航する所以なり。此の浮標は木造にして、其の形狀は區々複雑なれども、いづれも一長索の一端に之を結著し、水中を

滑走すれば、著しく噪亂せる水音を生ずる如く設置せり。其の波浪に激衝する音響は騒然雜然たるを以て、後續艦は其の艦首に在る見張番兵の眼を以て容易に之を發見すべく、之が爲め各艦の距離を正確に保つことを得べし。

海軍艦船は一般商船の如く、霧中に在ては投鉛を用ゆること多し。斯くして熟練の航海家は、大約自艦の位置を知悉するなり。鍾鉛は其の底部に小孔あり。其の中に獸脂を込め、海底の土質、砂泥、沙礫等を少しつ、粘著し得るを以て、投鉛を水上に引揚げたる時、其の底質の如何を検し、之に由り海圖と照合して航行をなし得べし。外國漁船等の乗員は海底より引揚げたる鍾鉛の奇臭を嗅き分け明白に其の嗅感より生ずる一種の知識を以て本船の所在位置を知るものあり。

濃霧中の奇禍

我が日本國に於ては北海道沿岸、殊に千島海、日本海及び朝鮮海峽の外、餘り濃密なる海霧の來襲を見ざるを以て、國民一般此の海霧に對する觀念甚だ薄弱なるが如く、予の如きも海上生活に入らざる中は、霧とは斯くも航海者に取りて、恐怖を惹起すること甚だしと思はざりき。毎年春夏之交朝鮮沿岸並に渤海灣の海上は南東信風の吹くとき、屢々濃密なる烟霧の來襲ありて、船舶の危難に

遭遇するもの實に少なからず。一天晴朗、空間に纖翳を認めざる好日和に在りて、輕微なる南東風起るときは、水天の交界先づ溟濛の烟霧堆積し、漸次風力に壓推せられて擴延し來り、海上模糊として水線忽ち没し、島影消失し船舶隱滅す、頭上を仰げば密雲低迷として蔓延し、船外唯渺茫として、恰かも紗布を隔て、物を視るが如し、最も甚だしきときは船の後甲板に立ちて、烟突を認むる能はず。僚艦と相互に談話を交へ得べき近距離に在りて、猶且つ船影を見る可らず。此の如き海上を航するに、汽笛を唯一の便りとして隊列を編成する苦心は、實に困難を感ずるなり。岩礁あるも近づくまでは分明ならず、突兀たる巖石なるを知る時は、既に危険に瀕するのときなるを常とす。加ふるに濃霧の際には潮流甚だ急激なれば、夜間霧中の航行をなせば三五年の壽命を短縮すと云ふも誣言に非ず。

日露戰役中、明治三十七年五月十五日、我が巡洋艦吉野は渤海灣に於て僚艦春日の爲めに衝突され初瀬、八島の二戰艦は旅順口外に於て巡洋艦宮古は大密口に於て、共に敵の機械水雷に罹り、砲艦大島は蓋平沖に於て、僚艦赤城の爲めに衝突されて何れも沈没し、多數の乗員は晝猶暗き海底の藻屑に化せり。是れ皆同日濃霧中に起れる變災にて、或は展望不充分の爲め僚艦相衝突し、或は敵の水雷に觸れて大破を蒙り、意外の危禍に陥りたるなり。吾人當時に於て悲痛憤慨の感に堪へず。同

戦役中空前絶後の大損害として、今猶之を追想すれば、切に海霧の恐るべきを考へ慄然之を久ふす。彼の上村艦隊は朝鮮海峡に警戒中、濃霧の爲め浦鹽艦隊を逸し、金州丸、常陸丸及び佐渡丸は其の監視區域の、近傍に於て撃沈せられ、大に我が國民の罵倒を受けたりき。我が陸上の人は、濃霧の果して如何なるものなるかを知らずして、森漫無窮の洋中は、百海里以内は常に展望開豁なりと思惟したればこそ、此の如き誤解を生じたるならん。乞ふ陸上和樂の境遇に馴れたる人は、去て浩浩たる海上に赴き、一日若くは數時間、蠻烟瘴霧に包まれたる中を航行せよ。密雨絲の如く、或は斜下し或は横行し、大氣は水分を凝聚して、衣服は忽ち霑ひ、冷風は颯々、波浪は洶湧して船上を洗ふ。天地暗淡四顧一物を見ず、唯脚下に淡綠色の海面を俯視するのみ、視力如何に鋭敏なる人と雖も、亦盲人と伍すべきを首肯せん。

海霧は實に何れの地に於ても、海員に取りて最も恐るべき強敵なり。年々多數の船舶は之が爲めに沈没し、人命の亡失亦此の如く甚だしきはあらず。海員は之を呼んで殺人的妖魔と云ふ洵に故あるなり。

六 海底電線沈設の秘訣

海底電線の送信力

最近數年前に、一年少丁抹人の考案に依りて、海底電線の送信力は著しく増加せられ、從來に比して四倍の効力を有するに至つた。是に於て深遠なる電信學界は、之が爲め大に驚倒され、中にも電纜製造所、海底電信通信處及び電信船の如きは重大の關係あるを以て、其の恐慌亦格別であつた。我が海外諸國に達する海底電線は、多くは製法粗陋、價格低廉なるものを用ゐて居る。其の送信力は概して或る速度以上に増進せざるを遺憾とした。遠距離に用ゐらるる海底電線の平均送信力は、每一分間に十六語であるが、若し此の割合が低下するときは、通信回數が増加すべきである。是に於て良質にして送信力の精確なる、電線沈設の急要を唱道する説が起る。蓋し良質の電線は沈設費巨額に上ると雖も、永遠の利益著大なるより、料金の收入も亦驚くべき多額となるのである。故に電線の送信力増大なれば、電信暗號を用ゆる場合、従前の電線よりも、多數の音信を傳送し得べしとの考案が、自ら湧起したのである。今モールヌ式符號を用ひて、日米間の通信を行ふと假定

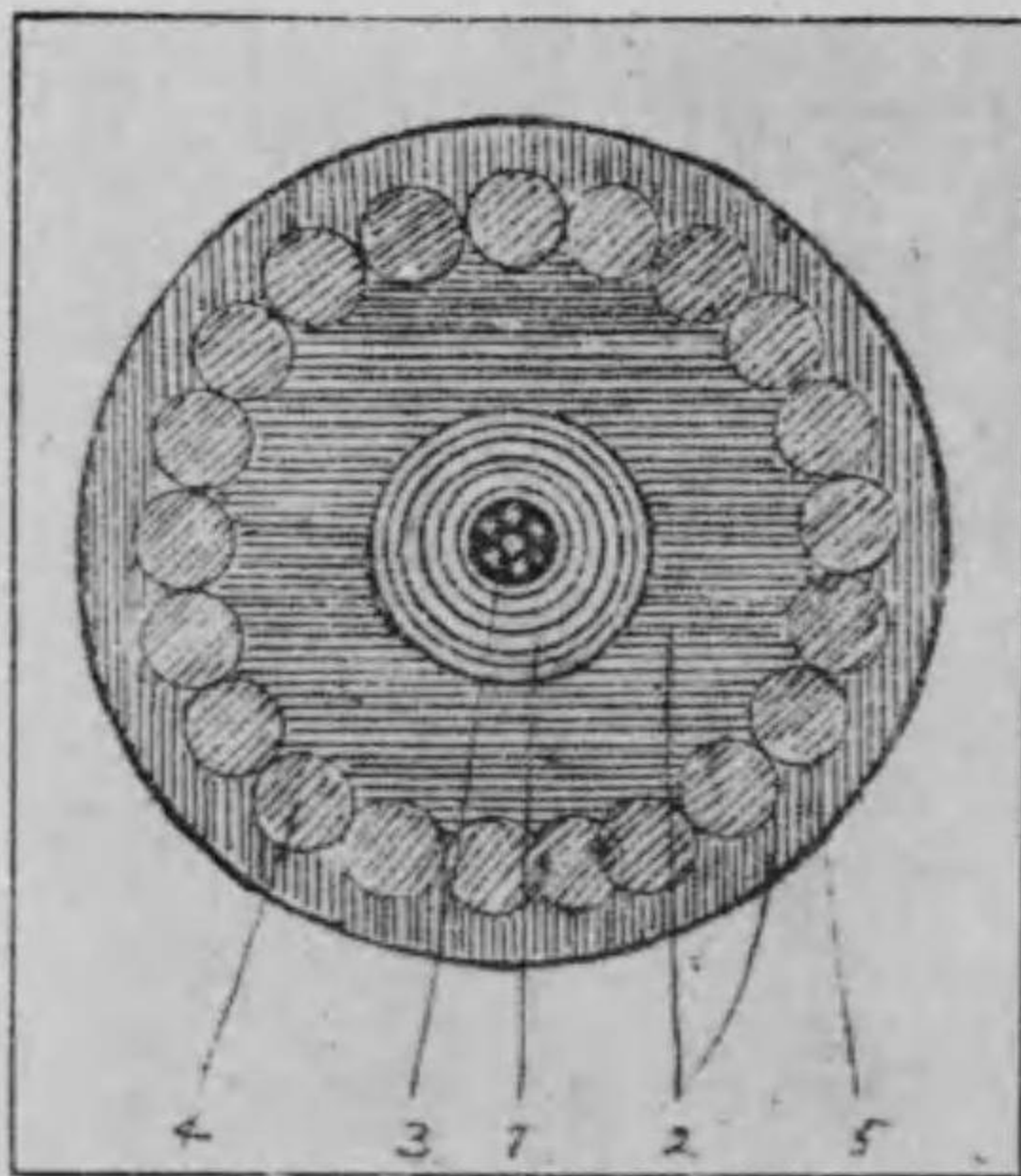
すれば、平均一字につき四回の送信を要するから、二十五字を通信するには、百回の送信をなさねばならず、されば現今採用する、通信よりも短時間を以て、多数音信の送受を行ひ得べき、或る方法が必要である。

丁抹國人ハンス、クナドセン氏此に見る所があつて、従來世人の注意せざりし簡易の便法を發明した。此の法に依れば、一回の暗號を以て一字を通信すべく、如何なる電線にも適用することが出来て、一回の送信力は四倍の効力を生じたる譯である。

海底電線の資質

吾人は本章に於ては、大洋を横断して海外諸國に通信を行ひ得べき、海底電線の製法を説述するを目的とするのではない。けれども、之に關して不案内の人の爲め數言を費さん、海底電線は格別の注意と技巧とに依りて、製造さるゝものである。乃ち良質の銅線より成る長き心線の上に、チャツタートン式混成劑を塗抹し、猶其の外面をガツタバーカの絶縁物を用ひて蔽へるものである。是等心線は嚴密に漏電の有無を検し、黄麻の纖維にて巻き、更に其の上部を鋼鐵裝錠線を以て被覆し、再び黄麻の厚被を施してある。普通海底電線の太さは、陸岸に露出すべき方に於て直径二吋半を有

し、洋中に於ては直径一時に減する。而して全く沈設工事を了せる電線は、互に相接觸粘著し易きを以て、之を豫防するが爲め白色の塗劑を用ひ、之を電線に積載せるときは、船艙中の鐵罐に貯藏する。是等の鐵罐には清水を充して、電線を其の中に縮めて保存するのである。一隻の電信船は約三千五百海里の電線を鐵罐内に收容し、重量八千噸乃至九千噸を搭載し得るのである。此の電線を沈置するには、技術者は常に海岸の方に沈置すべき索端を保持し導通力の正否を試験するを例とする。若し深海の底に投入すべき場合には、同船は二十四節以上三十節の速力を以て駛走するのであるから、電線は容易に海底に沈下しない。



海底電線の構造

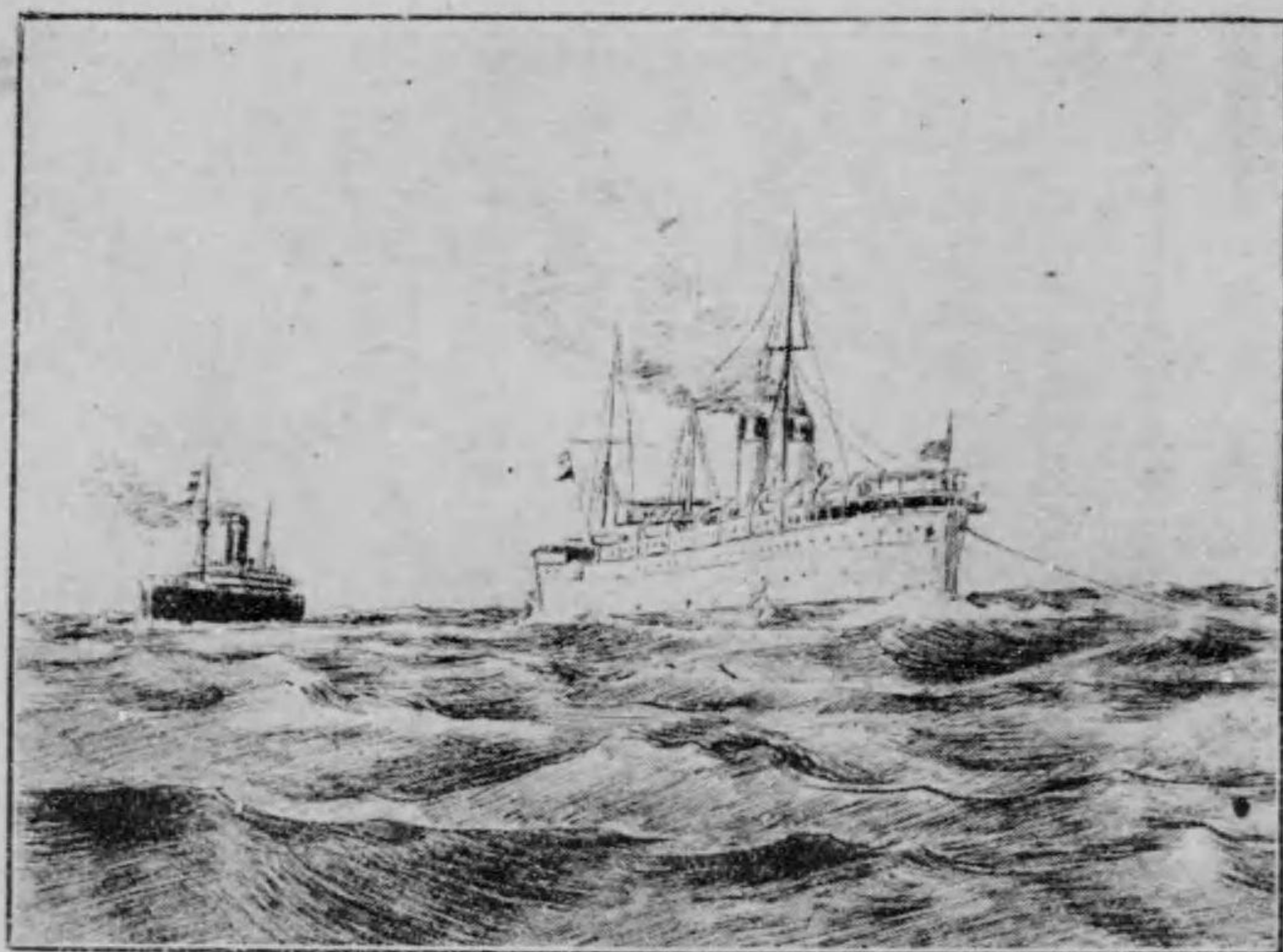
- 1 チャツタートン混成劑
- 2 黄麻被覆
- 3 七心電線即ち導通に不導の主線
- 4 鋼線の被覆
- 5 タール液を塗れる帆布結

海底電線の沈設作業及び修理

海底電線の沈設は局外者より見れば、至て簡易輕便なる作業の如く思はれるが、決して然るものではない。電船の船尾には巨大なる滑車を備へ、之に電線を導入し、格納罐よりは充分の長さの電線を出し、之を幾多の絡車に通じて、巨大なる制動轉輪に巻き付け、且つ動力計を具へて電線の緊張する時、生ずる張力を殺ぐを得べからしめ、又轉輪の側には熟練なる電線工夫が在りて、之が監視に任じ、沈設の際水深の變動するに應じて、張力の寛嚴を調整するのである。

各海底電信會社は海底線の沈設並に修理に使用すべき目的を以て、若干隻の汽船を所有して居る。現今此の種電信船を合算すれば、世界各國を通じて、總計四十五隻、總噸數七萬噸以上に及び、其船員の技術も逐年進歩して熟練せるを以て、電線沈設のとき作業日數を短縮することを得た。去る千八百九十四年英米兩國間に増設されたる新線の如きは、僅に二十日間を以て竣工した。此の作業に従事せるは英船「アラデー」と呼び、最近の電信船中最も有名なるものである。同船は從來英米兩國間を連絡する、多數の海底線を沈設せるものにて、推進機及び舵器とも各二個つゝを有し、其の構造輕快、操縦上に至便にして、沈設作業を行ふに、精細且つ熱心なりと云ふ。又其の船體堅牢なれば能く風波に抗するを得て、水際部の鋼板は厚さ一時四分三に及ぶ。

電信船の隻數は何故に此の如く多きやと云ふに、現に布設せられたる海底線多數なるを以て、絶へ



六 海底電線沈設の秘訣

電信船海底線敷設

す各處に破損を生じ、若くは通信力の杜絶し修理を要する爲めである。損害の原因は其の他にも幾多の理由があり、之を述べ盡すことは頗る複雑に堪へない。固より陸岸に接近せる海面は、トロール漁船、或は其の他小船船等の用錨の爲め、電線の破損すること甚だ多きは、當然の結果である。洋中に於ける破綻の原因の如きは、到底明確に之を述べることは出来ないけれども、海底に於ける火山脈の隆起等に依ることも推察し得るのである。又時日の経過より電線の腐蝕を起し、或は波浪の爲めに受くる強壓力等に原因することもある。海底電線は之を修理するよりも、新線を沈設する方却て經濟にて且つ確實なる通信を期することができる。縫れたる電線若くは破損せる電線を引

き上ぐるには、鉤爪錨を海底に引き摺り、之を搜索するを以て、多大の日数を要せざるを得ない。一たび電線に故障起らば、其の損處搜索の爲め、一箇月餘も徒勞に終ることがある。然るに新線を投入すれば、大洋を横過するときに在りても、三週間乃至四週間に以て、正確に之が沈設を了するに足るべく、夏日天候平穩にして、晴雨計の示針に變動全く起らざる時期を選定して、麻巻線を幾十百里となく、瞬速に繰り出すことが容易である。海底電線の製造費は、沈設に關する雜費を合し、一海里約二千圓以上に過ぎざるも、修理費は一日約二千圓に達すること珍しからぬのである。

海底線が破損を生じたるとき、其の損處の何れの部分にあるやを検知するには、精巧なる器具を以て容易に之を發見することが出来る。其の法導體を水中に浸せば、抵抗力自ら靜止するを以て、若干距離の電線を試験すれば、約二時間にて其の缺點の所在が發見せらるゝのである。

斯くて損處を検知するや、船長は蒸汽力を充分に高め、快速を保ちて船を進め、海底線沈設圖に依りて、破綻の正確位置即ち若干緯緯度を記せし處に合せせる海面に到り、一大浮標を投じて茲に碇泊し、其の位置の標示を必要とする。但し此の浮標は固定したる後、夜間は點燈するのであるが、之が投入並に點燈とも頗る危険を伴ふのである。而して之を基點として小錨を引き摺りて、其の附近を搜索するを要する故に、浮標は海流等の爲め移動せざる如く設置すべきである。一旦浮標を投

入すれば、船は各方面に航行を始め、前記の小錨を海底に投下して之を曳き、曳索が突如として緊張すれば、暗礁或は海藻類を鉤せることが明瞭に知られ、又若し其の張力漸次に増加するならば即ち海底線を捉へたるを悟るべきである。尋で之を水面に引き上げて、其の一端を止め、前と同法に依りて再び他端を鉤して之を引き上げ、遂に兩端とも船内に取込み修理を加へて、試験の上元の如く海底に沈置し、船は海上を航過して、作業經過の詳細を本社に報告する爲め母港に復歸するのである。

破損せる電線を引き揚ぐることは、實に困難極まる苦役である。此の作業中幾多の珍奇なる事態が現出し、或は大魚が電線の間絡まり、或は鯨が其の尾鰭を巻かれて、驚起して狂暴跳亂せるの結果、遂に電線を損ずるも猶其の緊縛を解く能はず、苦闘の餘、鯨は斃れて水面に引き揚げられ、船員が牽束を脱せんとするに際し、悪臭鼻を衝くに堪へずして、卒倒するなどの奇談もある。又小形なる船材の破片等を鉤して、舊時の帆船を偲ぶ縁由ともなることもある。此の如くして鉤著せる電線を船内に取込むことは、殆んど際限なき骨折にして、電線が海底より引き上げられて、損處の發見さるゝまでには、七八時間を経過すること往々之れありて、頗る興味なき作業である。

送信力の試験

數千海里に達する長大なる海底電線に送信力は至て微弱なれば、之を検測するには、巧妙精緻なる器具を使用する。是は千八百六十七年にロード、ケルビンの最重要なる發明品の一にして、其の名をサイフォン、レコルダールと呼ぶ。其の構造は精妙驚くべき程であるが、今之を簡単に述べんに、玻璃製のサイフォン管ありて、特製の墨汁を充せる容器に接続し、墨汁は特製ペンの作用に依り、其の下に敷延せる白紙上に自から筆觸を與へる。かくして微細確實なる震動に依りて、一々自記せらるゝを以て、遠隔極まりなき通路を経過せる、電流の有無が判然として現認せられ、而して其の震動は試験紙を横ざりて畫かれたる、大小不同の線を以て明記さるゝのである。熟練なき電信技手は、能く此の微震を検知して誤ることなく、通信は即座に傳達され、海外電報が容易に送受せらるる。

是等送信力の遲速を試験するの目的を以て、ロード、ケルビンの逝去後五十年祭の施行に際し、某電信會社は自ら沈設したる海底線に依りて、語數二十四を含有せる祝電を發し、距離二萬海里を隔てたるに對し、經過時間僅に八分に過ぎざりと云ふ。

海底電線の効力

前記重要の諸點に就て考ふるに、海底線は其の瞬速確實なる通信を成功するに於て、吾人之を尊崇するに躊躇せずと雖も、擔任の技手たるもの、手練は、多年の研究努力に待つに非ざれば、重要な實務を執ることができない。而して彼等は相當の技能を得るに至れば、居常重要な通信事務に當るべきを以て、其の責任甚だ重大である。彼等若し寂寞僻陬の地に在職するときは、其の身は孤獨閑寂の生活を忍ばざるを得ざるのみならず、亦不慮の危険に遭遇するの虞がある。従來是等の職務に就くもの、失意落魄の人多ければ、自ら悲觀に陥り不快を忍びつゝ、通信事務に執掌するを例としたるを以て然りしならんと思ふ。我が北海道或は臺灣地方にも、此の如き不快なる任地が少なくない。彼の濠洲のイヌークラーの如きは、四時嚴寒と烈風とを伴ひ、突兀たる絶壁高さ數百尺、眼下に洶湧たる雪白の波浪を飛散せる大海を下瞰し、其の悲哀殺風景なる狀況は、他に其の比を見ず、如何なる人も茲に半夜の夢をも結び難いのである。

各電信會社は取扱者に對して、些の過誤をも寛假せず、如何なる通信と雖も、間違ひたる事實を傳達しては不都合である。今日電信の使用に慣熟せる人は、皆暗號或は符牒を用ふるを以て、技手の

責務は益々輕小に非らざることが明白である。

平時に在ては既に前述せし如く、海底線の損害は各船舶殊にトロール船等が、水深大ならざる海面に錨を引摺るより發生し、若くは暴風に際し、數百千噸の大壓力を有する波浪の影響を受け、或は沈船が電線の上に縦置して横はるときは、電線は必ず著大なる損傷を蒙るのである。又戦時に於ては其の損傷は更に倍蓰し、非常の妨害を受ける。現時海戦の初頭に於て必ず敵國の海底線を切斷するを例とし、其の被害の邦國は即ち國力の劣弱なるを立證するのである。嘗に海底線のみならず、無線電信柱の如きも、被害を受け易き渺茫たる公海上に在るもの多く、數年前之を豫防する装置發明されしと雖も、電波も亦敵の爲め幾分か擾亂せられ、通信機關を破壊さるゝも亦止むを得ざるのである。而して無線電信柱の建設は高燥なる位置を要し、經費の莫大と、熟練なる技手に對する高給とを支出せざるべからず。又之が爲め獨占權の濫用となり、隨て電信料金の多額を來し、社會一般の不利益を招くのである。

現今我が海外諸國を連絡する海底線は、凡て歐米各國の所有に屬するを以て、其の電信料金は頗る不廉を極め、日本臺灣間は邦文一音信金參拾錢歐文五語金四拾錢なるに、日本歐洲間は一語金貳圓四拾貳錢乃至貳圓四十二錢、日本米國間一語金貳圓八十二錢乃至四圓五拾八錢の巨額を要するので

ある。然れどもケルビン、ヴァーレーの他海底電信術上に於ける先覺者の英才機智と、路透社並に同業者の通信機關の効力とは、相待て新聞通信界の革新を致し、世界各國に紛起する日常の事件を吾人に速報し、汽車、自働車及び汽船の如く、其の行程に要する時間の減少に依りて、世界各地に打電し得るの鴻益を興へ、吾人の幸福を増進せること實に大なりと謂ふべきである。

斯の如く効力偉大なる海底線を國有となし、一層の改良を加へ、一語數十錢の通信料に遞減するに至れば、海外に在る知己友人と、容易に且つ低廉に通信の交換をなすことを得るであらう。

七 出帆旗の上下

萬國船舶信號P旗の用法

萬國船舶信號旗の中に於て、白地青枠を取りたる方旗こそ、他の旗旗と連掲すれば、唯P字の意味を現はすのみであるが、若し此の一方旗を單に各船舶の前橋頂に翻へすときは、該船舶は二十四時間以内に埠頭を解纜し、再び外洋に航行すべきことを表示し、茲に清新多趣味なる海上要務の一端を説明するのである。

斯くして微々たる一枚のP旗は出帆旗となり、其の彩旗の翻る處に社會政策、或は交通問題等文明的要素の研究上、興味頗る饒かなるを覺ゆるのである。今横濱より英國倫敦に赴かんと欲する旅客ありて、棧橋より乗船して一たび船内に其の足を投するや、甲板の清潔にして船室の美麗なると、居住の安樂にして秩序整然たるとを見るの外、何等耳目に觸るゝ煩瑣の手續を忍ぶに及ばず、旅客の一身は恰かも汽車に乗ると、毫も異ならざる簡易と輕便とを感じ、安穩愉快に船内に落付き心思爽快であらう。間もなく何處よりか銅鑼が鳴り響くと同時に、一萬數千噸の巨船は靜かに棧橋を離

れて航進を始め外洋に向ふのである。

商船の荷役並に航海準備

晴雨暑寒を通じて幾十日、碇泊航海を合せて數百時間の後、本船彼の目的地に到達すれば、頗る長時間があるので、此の間に於て種々雑多なる事業が行はるゝ。船が彼の地の繫船池に入るや、熟練なる人夫の一團が船の内外に集合して各般の業務に従ひ、先づ船内より主要の載貨を陸揚し、最後に穀物類の積卸方を終れば、直ちに復航に對する準備に取り懸る。現今は各國船舶の間に營業上の競争起れる爲め、在港時間の長きは不經濟なるを以て、成るべく碇泊日数を減少して、益々營利の増加を計るに汲々たる有様である。是故に碇泊時間を出來得る限り早く打切り、豫定發著時間よりも稍々早く著港することを考へ、經費の支出を減じ収益を増すべく努めて居る。

各船舶の航海準備に先たち最も必要なる事業は、乾船渠に入りて船底の海藻貝殻類を削除し、之を清淨になし、之を塗換へ、推進機及び其の軸の如きも、損傷の有無を調査し、船體に完全なる修補を加へ、爾後繫船池に曳航し始めて航海準備が遺憾なく實行せらるゝのである。該船が初航海をなす場合なれば、石炭を積込む爲め石炭棧橋に赴きて石炭を積込む。石炭棧橋には尨大なる起重機が

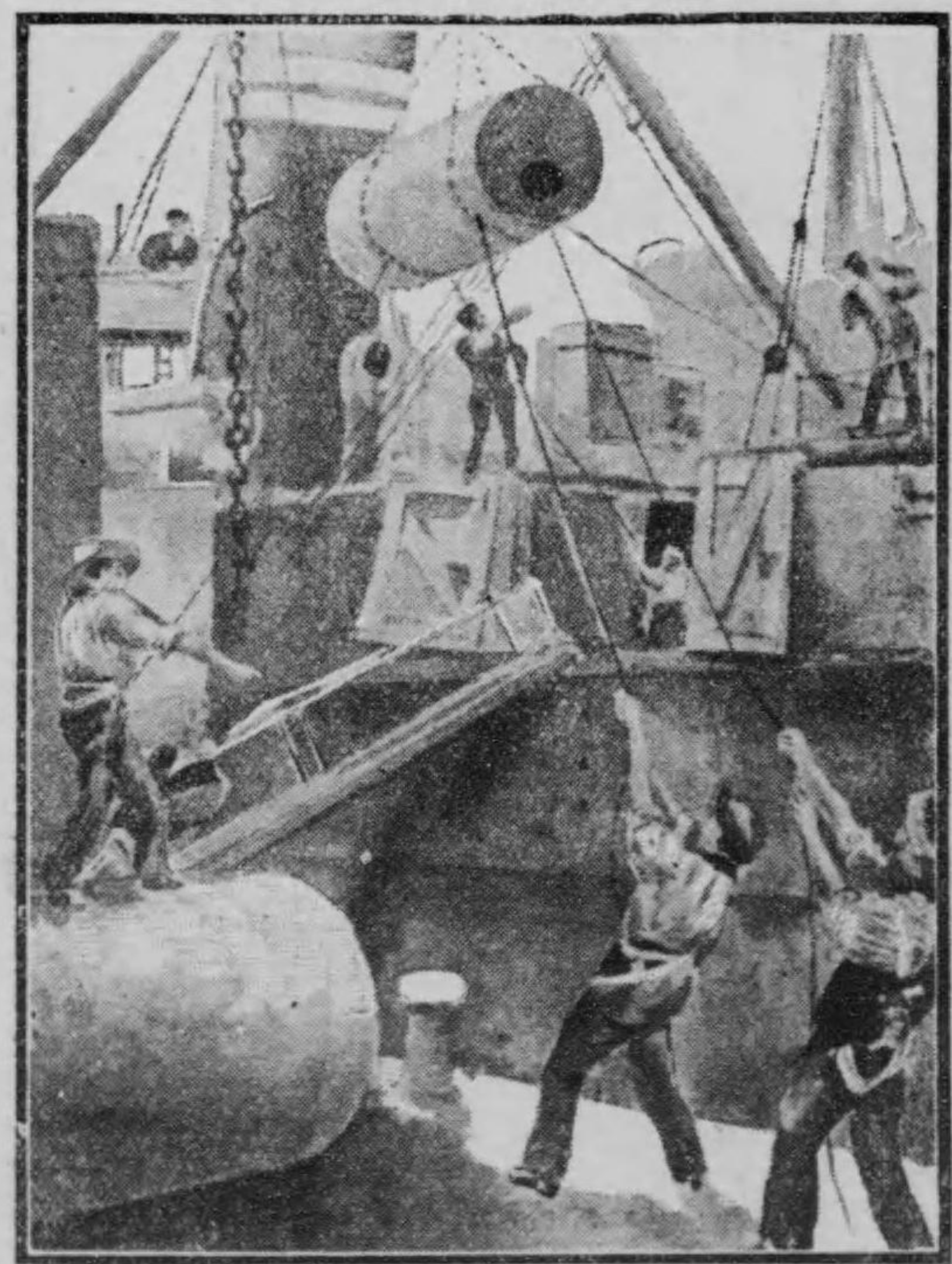
あり。船を其の下に繋留し、石炭を搭載する。其の響轟々として百雷の如く起りて、一時に石炭貨車の積載量を船内に積込むことができる。多量の石炭は船内上甲板に堆積累聚して、船橋は漆黒なる炭塊の床の上に立てる様である。試に炭庫に下りて見よ、顔面も被服も墨の如く染まりたる人夫は、絶へず載炭口の石炭を他處に移し、熱心勉強して之を整理しつゝある。起重機を操縦するものは、一定時間内に定量の石炭を積載するを知るのみにて他を顧みず、何ぞ徐ろに之を行ふ如き好意を有して居らう？。此の如く運炭手は運炭し、積載者は之を積載して、船の喫水漸次に深くなり、廣濶なる炭庫は多大の炭量を有し、何れの港灣に往復するにも差支ないのである。

今曳船が來つて本船は靜かに曳出されて、石炭棧橋より貨物埠頭に移る。船艙は此時より周到の注意を以て膨脹するのである。マンボー材が巨室の兩端に正しく積重ねられる。此の木材は荷物の間にも押込んで積載するもので船底に横に之を敷置し、積荷を濡らさざらしむる。之が爲め荷物と船底との間に相應の空隙を存じ、又其の上に葎蓆をも敷くこともある。

如何なる汽船と雖も、此のマンボー材を船艙に用ひぬものはない。三四尺或は四五尺の深さある二重底を有しても、之を用ひぬ譯に行かぬ。船艙内は甚だ濕氣多くして、常に舷側より雫が落つるを以て、積荷の濕るを防ぐため、沖積仲仕をしてマンボー材を奇麗に置かしめ、其の用意全く終るを見て荷役

を始めるのである。積荷は其の種類の何たるを問はず、若し鐵道材料を積込むときには、最も丁寧に取扱ふべき必要がある。是等は鋼鐵材なれば、天候不良にて海上波浪ある際など、往々取扱者の不注意より之を海中に落す事がある。鐵軌の如きは一本約半噸の重量あるを以て、一束十本の貨物は著大の重量を有する者なれば、少刻の油断に依り損じ易いのである。又汽罐五六個を積込ときも、格別の注意を以て慎重なる取扱をなさねばならぬ。是等重物積載の爲め特殊の絞轆が備はれ、巨大の張力を支撐し、埠頭の

重 物 積 載



上より捲き揚られ、船艙内に垂下して遂に運轉を靜止し、絞轆が繰弛られて重物は船内に積込まれて

直に固縛せられ、楔子を處々に挿入し、大形の包装品となりて、差當り船全體の固定物を形成する。他の船艙の上には揚貨機がガラ／＼とシユ／＼と鳴り響いて、巨大の繫索もて普通貨物を積入れる。同機がガツタリ／＼ガツタリ／＼と動けば繫索は舷外に振向けられる。又第二の揚貨機がガツタリ／＼ガツタリと動けば其の繫索は舷内に轉回して、ハツチデリック（船口起重機）の下に来る。下ゲー、弛メーの令にて繫索は電火の如き勢にて降下し、「ハツチマン」は手及び聲にて揚貨機の運轉手を指揮する。下方艙底に動作する人夫は荷物を鉤把すること前の如く、尋で之を緊張し之を弛め卸ろすべき相圖がなされるれば、貨物は唸聲を發しつゝ取り卸ろさる。其の繰弛めらるゝや繫索は鉤爪より解脫し、沖積仲仕は元氣旺盛なる容貌と、狂せる如き態度とを以て、貨物を扛起し若くは船艙の一隅に運搬して、命せられたる位置に正しく之を積込む。樽及び重量ある函類は艙底に入れ、破損し易き物品及び輕量の貨物を其の上に載す。かくて取扱の粗漏より破損を生ずる如き不都合を見ず、萬事秩序を重んじ作業を敏速にし、荷役が規定通りに行はるゝのである。陸人は此の積載法を見れば、確乎たる目的なき如く思へども、是は全く巧妙なる法則に依りて實施さるゝのである。澤山の酒樽類は通例並列して積載するが、然らざれば上層の樽が下層の樽を壓潰して液汁の漏洩を生ずることがある。濕氣ある貨物即ち曹達の容器、大形の酒樽、及び糖蜜の桶等

は乾燥貨物の上部に積むことは出来ない。是等は漏水の虞があつて、其の下層の荷物は皆恢復すべからざる損害を惹起するからである。而して個々別々の樽類は塞子を上にし、漏泄又は破壊の虞なき様にする。

積載法は其の他にも亦數種あるが、若し過大の重量物を艙底に積込むときは、船の操縦に甚だしき困難を感じ、航行中船體の横動を増大ならしむるに至る。此の横動は常に載貨の安全を害するのみならず、事實船體の安全にも大に影響すること勿論なれば、重量物の過半は中層の甲板に於て、平均に收容し積載するを良とするのである。

荷物積載の間は水夫は多く艙内にあらず、或は上陸中のものがある。蓋し各船舶歸朝の後母港に碇繋すれば、水夫等は給金を支給されて休暇を得、或は退船し、唯二三の當直員在船するのみである。而して此の少數の人員が、船の内外部其の他の塗飾を受持ち、航海中著手する能はざる場處の塗換等にも従事し、頗る多忙を感じる。

出港前に於ける船員の警務

各運轉士は碇泊中と雖も悉皆在船して荷役の要衝に立ち、鋭意貨物の積載を行ふ。荷役を總轄する

ものは特置の一等運轉士である。彼は實に各港灣の諸規則を熟知し、荷揚の場所をも取決め、如何なる貨物をも受取りて、船内に積込むべきかを豫定して居る。

某地に於て機械類及び酒類を陸揚すべき事情を認めれば、其の貨物は速かに取り出さるゝ如く積載するを要し、他港の貨物を其の上部に載置せざらむ。若し此の順序を誤るときは外國の沖積伸仕等をして邪魔荷物を移動するため、無益の労働に従はしむる不都合を生ずるのである。

各船艙のマンボー材の敷かるゝに先たち、大工は船底に下り車軸の溝渠を調査し、唧筒を働かすに些の故障ならしむることに注意する。之が爲め渠口の戸扉を開き、堆積する塵埃汚物等を取り去りて、之を清浄ならしめたる後之を當直士官に報告する。是に於て當直士官は自ら之を點檢し、諸事異状なきを見て、渠口を閉鎖すべきことを命ずるのである。

機關室に於てなさるべき事業は複雑多岐に渉る。汽笛の覆蓋を去るは碇泊直員の業務である。外國航海より歸著後暫らくの間は、機關を使用する見込なく、機關の解放検査には逸すべからざる好時機なれば、機械は細密に檢査して、損處は一々修理を加へる。推承臺の如きも凡て取り外され、接合杆は張力の徴候を檢し、汽罐は水中に存する鹽分等に依りて、甚だしく錆蝕を來すことあるを以て内部の錆を削り去る。焚火孔は之を清浄にし、汽管は之を引抜き疵の有無を檢する等萬般多忙を

極めて居るが、混雑中にも規律は能く整へるを見る。

客室に於ては司厨長が糧食品の購入及び格納に忙はしく、其の貯藏物品は下記のとおりである。即ち鹽牛肉及び豚肉の樽、船客接待用の精良食品を入れた函、豌豆、菽豆、及び白米の袋、温飩粉袋等其の品目は千差萬別である。

是等の糧食品は上席司厨長之を受取り、品質の良否、包装の善惡を綿密に調査したる後、適宜なれば受領證を製造する。糧食品は彼の監督の下に糧食庫及び治療室に收め、船客用の食器等は之を受取り來りて、一々命せられたる場處に備へ附け、藥劑箱に藥品を入れ、但し船内に船醫乗組まざる場合に限る。而して時日に餘裕あれば、船室と大廣間とは塗換を行ふのである。其の間に水夫長は格納品を受取りて之を其の倉庫に收む。試に其の主要品目を擧ぐれば、大小の索具、甲板填隙用の網屑、塗具罐、刷毛、磨石及び枝朶筭等である。又舶來の輸入にかゝる油類の大樽もある。是等の油類は命せられたる格納罐に容れ、空虚の樽は後に之を陸揚する。塗具は塗具室に格納し、索具は破損せざらしめん爲め船首艙に收め、帆布は大抵一等運轉士の管掌に屬するが、索具類は水夫長の特別の注意を要する。或は稍々偏見の譏を免かれざるかも知れざれども、汽船は帆船に比して一年間に於ける索具の消耗量遙かに大にして、船具の外荷物積込用の索具だけでも夥だしき巨額に

上るが如く、其の節約並に整理は至緊至要の事項と思ふ。

前記諸作業の進行中、船長は多くは船内に在らずして休暇を取り、其の歸船の際は廣濶の船艙内既に荷物を満載して居るから、船長は奮勵して自ら成さんと欲する所を仕遂げることが出来る。船長たるものは出帆前其の船主を訪問して命令を受けざるべからず。或は貨物輸送に關する警告に接せざるべからず。或は荷送人及び荷受人の苦情を聞かざるべからず。又一等運轉士が選定せる水夫の傭人に就て契約書に調印を濟さざるべからず。乗組員の使用權を一手に握り其の任免黜陟を委任せられ、凡ての金圓の前借證書に調印を濟さざるべからず。又税關にも往訪し必要の書類は悉皆之を得、自己の懐抱せる意見を陳述することも出来る。且又港務部に到り最新の指教を得て、自己の知識を開發するに努め、埠頭其の他重要な案件に關し交渉協議することもある。

船が愈々出帆間際となれば、船長の多忙は一方ならず、其の用務甚だ繁雜である。航海の途次各寄港地の港務官に提出すべき健康證明書を用意し、其の書類は些の誤謬なからしむべく嚴密なる校訂をなさざらばならず。而して本船の出港時刻を前以て港務部に届出づるを以て、港務官内諸設備を應用し、渠口を開き豫定時刻迄に水路嚮導をして乗船せしむる手筈をなすのである。船の下層に積込むべき最終の貨物が此の時船内に取込まれて、破損し易き荷物や、危険なる甲板載

貨品等が積載せらる。二等運轉士は大工と共に操舵装置を檢査し各部の具合良好なるを確かめ、出帆と同時に船の進行は唯其の舵機に依頼するのみなれば、特に其の取調を周密ならしむるのである。若し之を粗略にすれば航海中故障多く、意外の損害を起す虞がある。又二等運轉士は機關通信器の有効なるを調査し、「クロノメーター」を比較精測し、羅針盤の附近に鋼鐵器具等の存在せざる如く注意を拂はざるべからず。鋼鐵器具は羅針の誤差を生じ易く、要するに其の修正に對し幾多の試験を執行せねばならぬのである。出帆前郵便物を受取り、之を格納し、入港後直に之を陸揚するは、二等運轉士の役目である。郵便物を積込めば前橋に郵便旗を掲げる。水夫等下級船員は多く一航海毎に交代するを例とし、大抵全員数の四分一位が殘留するに過ぎない。彼等は前甲板に起居して寢食をなす、其の寢臺は安全なる方圍を配與され、出港前まで其の中に潛入して睡眠し、或は猶一回の上陸を試み知己朋友と會談することも勝手である。大概出港前の全夜は後送貨物の積載の爲め費消され、船艙内の容積少しく餘地を存することが漏洩して、少なからざる積荷が默許の儘に船底に轉入し、或は急遽投げ込まれなどして遂に天明に及ぶのである。

かくて出帆旗は翻々として前橋の上に閃めき、烟突は濛々たる黒烟を天空に吐き、汽笛及び烟突よりは團々たる熱氣の白煙を噴出せるを見る。端舟は既に入れられ雪白の覆布を以て包まれ、錨具は

皆固縛され、下甲板の窓扉は全く閉鎖される。機関士は汽罐の上層より蒸汽の大勢力を發揮すべく火夫をして奮勵其の位置に就かしむ。蓋し其の蒸汽は夜來既に點火して、數時間を以て發生汽釀せしものである。今曳船が來た、繫索は解離され、機關通信器が聲高く鏗然たる響を發する。汽笛が咆號して飛沫を上甲板に浴びせる。船長以下船員及び水先案内人が船橋に登り來る。一等運轉士は錨を揚ぐる準備をなさんため前甲板に赴く。二等運轉士は推進機に索具の絡まらざるを見んため後部に馳せる。推進機の「スクルー」は船鰭の停滞せる海水を攪亂して、白沫を水面に散布する。水門が開く、舳索は陸地に取られ、之を緊張して徐々として本船を沖合に移動し、萬一棧橋に衝突して損害を生ずることを避くのである。汽笛が再び鳴り叫ぶや、本船は最早海上に直進し、昨日まで靜寂瀕死の境遇にありしが、今は生氣潑濺として恰かも知覺精力あるもの、如く振舞ひ、或は他の棧橋に横附して旅客を船内に收容し、其の船尾一たび陸岸の上に廻轉するれば、出帆旗は橋上より卸ろされ、船は悠揚として航海の首途に就くのである。

夫より本船は各港に寄泊し荷役を處理し、船員は常に揚貨機の喧囂なる間に忙殺されざるはな、而して出帆旗の上下は各地とも必ず前述せる如く行はる。

海上の苦役

各運轉士は航海中は毎日八時間づゝの當直勤務に服し、常に船橋に立ちて船の運用を掌り、或は船の位置を測定する外、風雨寒暑と闘ひ、瘴烟蠻霧に苦しめられ、頗る困難なる職業であるに拘はらず、碇泊中些の休養を與へられず、各自二三の船艙を所持し、無教育の異色人夫を監督して、一切の荷役を擔任するのであるから、洵に多大なる勞苦である。殊に歐洲航路の如き各寄港地に於ける碇泊日時は極めて短少なるに對し、取扱ふべき荷物は常に過多にして、船は終日徹夜揚貨機を動かし、彼等士官は二日二夜に亘りて全く一睡もなし得ざることもある。此の如きは人道に忍びざる慘酷酷薄の待遇ではあるまいか。同じ海上の勤勞に於て、海軍々人の血色鮮美なるに反し、商船乗員の顔容蒼白にして憔悴なるは、恐らく過勞虐待の結果であらう。堂々たる上級船員が徒らに「ハッチ」の側に袖手傍觀を敢てする形式的の監督に陥り、若しくは荷役擔任の士官が居睡をなすつ小言を並らべる如き、不體裁を醸す位なれば其の效力の微々たるは推して知るゝであらう。我が帝國の大船舶會社の重役等は將來の利害關係尠小ならざるを思ひ、充分に弱者の保護に任せざるべからず。此の點は社會政策上より考ふるも、長く放擲する能はざる重要問題である。早く可憐の船員をして現制の桎梏より蟬脱せしめて、相當の待遇を與ふことは實に目下の急務と思ふ。

八 海上氣象の觀測

簡便なる氣象觀測法

吾人海員は他の社會に於ける人々よりも天候氣象に關する知識を有すること一日の長がある。是れ職務の必要上外氣中に身體を暴露し、日夕を経過すること多きが爲めであつて、自然實驗的の推理が次第に進歩し、日常晴曇風雨の觀測のみならず。陸上の人のなか／＼氣付かざる風信寒暑の變異をも豫知することが出来て、多年の觀察と注意とを以て綜合考較したる吾人の研究は、茲に簡便なる氣象觀測法を孕み、應て氣象學の楷梯となりて、一般人類を裨益すること少なからぬのである。

天氣の變する數時間前に之を豫知し得るの方法は、往古には全くなかつた。彼の曆書などに記載せる天氣判斷の如きは、最も粗略極まる推測臆斷に成りしものなれば、決して信を措くべきものでない。粗雑なる人間の腦力にて、數日以後の天候を察知して毫も誤りなきことは六ヶ敷い。如何なる手段に依るとしても、吾人は斯かる先見透徹の知能がないのである。けれども十二時間或は二十四

時間以内に於ける、天氣模様の概略を知る如きことは、左程困難ではない。少しく海上の氣象に慣熟するものは、容易に之を豫知することが出来る。如何にして然るか云ふに、即ち天空の模様、雲煙の形態と色彩、風向、氣温等其の他特種の現象に對して、精細綿密の注意を拂ふときは、能く其の想定を誤らぬのである。

天空の模様

吾人は先づ天空の色合に就て述べんに、夕陽に於ける薔薇色の紅空が翌日の晴天を示し、朝燒の紅空が當日不良の天候たるを表して、必らず風雨の前兆たることは、世人皆能く知るところである。夕空に亘れる暗綠色は風雨を催すことが多く、鼠色の朝空は當日の快晴疑ひがない。濃黒藍青の天色は烈風來るの兆候であつて、明快鮮麗なる碧空は好天氣を保證する。而して夕空の黄色なるは決して善良の日和でなく、卵黄色の日没は多くは雨を降らし、深黄色なれば風を起し、黃褐色なれば風雨並に到るの恒例である。

雲煙の形態及び色彩

又雲煙の形態と色彩とに依りて、吾人の知得するところ數例がある。蓋し雲煙は寒冷なる大氣の濕潤して、幾多微細の小水粒となつて收縮せるもので、其の直径千分一吋以下の極小分子よりなれる此の小水粒小滴露の大塊團が集まり、吾人の眼前頭上に展開するに及んで、空中に高く昇騰すれば所謂雲煙を生じ、地上若くは海面等に低く垂下するときは雲霧となるのである。

雲煙には七種類がある。卷雲、積雲、層雲、卷積雲、卷層雲、積層雲、及び亂雲である。

卷雲とは毛髪を束ねたる如く、又羽毛を散布せる如く、鈍々飄々たる雲煙である。往古の海員之名づけて牝馬の尾毛と呼んだ。是は雲煙中其の位置最も高く、海面上三海里乃至五海里を隔つる。若し數片の卷雲ありて、其の縁邊纖細にして風と同一方向に飛散するときは、風力漸く大ならんとする兆候で、又風向は變轉しないが、卷雲の末端後方に吹き拂はるゝときは、變風の虞があるのである。

積雲とは弧狀堆積、濛々漠々たる雲塊であつて、其の名の如く大氣の累積凝縮せる一變態に過ぎない。吾人は夏季の炎天に、雲煙の大塊が蓬々然として半天に渦き、恰かも白雪に蔽はれし遠山近嶺の、連綿重疊するに似たるを望見する。是れ即ち積雲であつて、一名を雲の峰とも云ふのである。若し其の形態平凡にして、さまで大ならざるものが晝間に現出するときは、天氣の快晴は疑ひない

又夕刻に至りて俄に擴大し延長して止まぬときは、降雨將に來らんとする豫報である。

層雲とは細長く横さまに連亘する。一條或は數條の雲煙であつて、其の位置は最も低い。通常日没前に現はるゝこと多く、時として夜間に見ゆることもあるが、翌曉日出前迄には必らず消滅するのである。

卷積雲とは幾多小團塊をなせる。白雲の簇生して相互に分離し、空中高く飛揚する。其の形態恰かも魚鱗の如きものであるから、一般に魚雲と呼ぶのである。夏時晴天炎暑の日に於て此の種の雲煙を見ることが多い。若し卷雲と相交錯して現出するときは、烈風の前兆である。

卷層雲とは其の名の如く、半は卷雲、半は層雲の集體であつて、常に暴風の先驅となるものである。積層雲とは層雲と積雲とが、相混合して發生するものである。

亂雲とは即ち雨雲のことで、他の雲煙とは全く其の形態色彩を異にする特種の雲である。

積雲が連綿低下して、其の直上に卷層雲の存在するときは、上下兩層の雲煙漸次に混合し、一團塊となつて、遂に降雨を見るに至る。

天候不良の日には雲煙は低下して、其の高さ半海里にも足らぬが、快晴の日には二海里乃至五海里の高さを保つて居る殊に卷雲は之よりも猶一層高いのである。雲煙の展開する面積は、甚だしく巨

大に涉ることがあつて、往々十海里以上の廣濶面を有するのである。雲煙の色彩と形態とが、軟質鮮美の看を呈するときは、一見して天候良好の状態なることが知らるるが、之に反して雲煙の縁邊が劃然として、異彩の光輝を發するときは、天氣險惡の兆候を示すのである。

小形なる離れんの墨汁を流せる如き、雲煙の疾走するは降雨の兆である。地平線附近の天空が暗青色の雲にて蔽はれ、其の前面に淡薄の雲あるも、亦降雨を現示する次第である。晴天連日持續したる後、卷雲の大集團が發生すれば、必らず天候變調の徴候で、此の時若し天色著しく麗かに輝き渡るときは大風起るべく、又空中濕潤の氣を含むときは大抵降雨となるのである。

上層の雲煙が急速力を以て、太陽若くは月光を遮蔽しつゝ、下層の雲と全く方向を異にして亂飛する場合には、暫時にして風向が變じ、上層の雲の如く、同一の風位となるのである。

山嶽丘陵の頂上が雲霧にて包まれたるときは、風雨の前兆であつて、其の滴露の地上に降下する傾向あるときは、必らず雨天に變すべく、其の天上に向つて昇騰するときは、却て好天氣の持直すものである。

海上の日没に際して太陽波間に落下するとき、其の形狀が團圓ならしめて、楕圓形を呈することが

屢ある。是れ晴天の兆であつて、其の理由は下記の如くである。大氣は光線屈折の力を保有すること甚だ大なる爲め、太陽の光芒一たび大氣中に入るや、忽ち反映屈折されて新方向に轉するのである。故に大氣の容積多ければ多い程、其の屈折力愈大となつて、日没の際には太陽の位置地平線上にある爲め、日中などよりも大氣の厚壁を通過して、吾人の眼中に入り來る譯であるから、何れの時よりも光線屈折の影響を蒙ることが多いのである。而して大氣濃密なるときは、其の屈折力一層大に、而して氣壓高ければ之が爲め屈曲度益多くなる。故に天氣好晴にして空氣乾燥のときは、太陽の球面が團圓に見えずして楕圓形に變するのである。

虹霓は好晴の天氣に對する正確なる記號とも言ふべきもので、朝虹は海員の警戒を要し、夕虹は海員の快心を喚起すとさへ唱道さるゝ如く、朝虹の現出するときは天氣不良となり、夕虹の發生するときは晴天となるものと決定せらる。我が帝國東京附近の地に於ては、降雨は西方或は南西方より來ることが多いに由て、朝虹は太陽が東天に在るため、雲陣の西方より襲來することを知り、夕虹は太陽西天に在る爲め、雨師は戈を倒まにして東方に退却し去ることを示し、該地の風上に位置せるより晴天恢復するに及ぶ譯である。

降雨を豫知すべき他の最良確實なる證據となるものは、月の周圍に生ずる陰暈である。又太陽の周

圈にも大量が生ずることがある。然るときは天候不良の兆候たるは争ふべからざるものである。

風向氣温氣壓等の観測

前述の諸件は固より天氣判斷の細小事に過ぎぬが、航海旅行其の場合に於て是等の點に注意すれば、多大の利益を得ること明らかにして、氣象上の知識を養ふことが出来る。吾人海員は平常渺茫たる大海原を跋涉するので、各般の氣象に對して實驗することが少くない。此の他に猶數多の珍奇なる表示法や豫斷法がある。

例へば海面にある物體が浮出して、實際の位置よりも著しく高く見ゆることがある。かゝる時には空氣の乾燥甚だしくして、光線屈折力の強きときに限る。此の場合に於ては風向は必らず東方或は南方に變ずるのである。今茲に遠く隔たりたる或る海岸に、矮樹の森林ありとせんに、或る時は是が數百年を経過したる古木の如く、甚だ高く屹立して見ゆることがある。其の時に於ける空氣は實に濃密で、屈折力が盛に強いのである。即ち氣温暖かにて能く乾燥したる南風の發生せるときなど吾人は此の種の現象に接する。

大氣中に此の光線屈折の作用ある例を知るには、乾燥せる風候のとき海岸に立ちて、沖合遙かに隔たりたる船舶島嶼等を眺むれば、極めて奇觀を呈するに考へても明瞭である。或は二橋船の帆影が實際の高さの二倍以上に超へて現はれ、或は猫額大の小島が巍峨たる巨峰に見ゆるなど、吾人は屢怪訝の光景に惑はさるゝことがある。

世界の暖國殊に大氣が電磁性を伴へる熱帶地方に於ては航行中の船舶が其の橋桁の尖端部若しくは圓材の末端等より閃光を發して白炎灼々として起り、恰かも火球の如く輝くことがある。蓋し此の白炎たるや、往昔嘗て西班牙國の加特力教徒たる一航海家が、神火と名けて尊崇したるものであつたが、英國人は之を鬼火と呼んで航海中不祥不吉の象徴となし、海員いづれも戰慄恐惶したと傳へらるゝのである。是は天候不良なるとき、風雨強猛の際に發生し、此の怪光を見れば、兇暴を逞しうする風害は、既に過ぎ去りし後である。

人若し各地の天候に關し、多少の研究を試みんと欲せば、必らず晴雨計の示度に注意せねばならぬ是等の感念に乏しき人は晴雨計を過信するの癖があつて、却て實驗上の煩累となることさへある。但し其の誤解の根源を尋ぬるに、晴雨計の符標に快晴、定晴、大雨、荒天等の如き舊式なる記號の存することを了解しないからである。晴雨計の効能は氣壓を自記することが第一で、氣壓少しにても變すれば、直に其の示度に分明する。是れ此の器具の特長である、氣壓は甲地にては高く昇

り、乙地にては低く降ることがある。而して氣流は高氣壓の地より低氣壓の地に向つて進行するので、各地に風力の由つて發生するに至るのである。

天氣の變更するは畢竟風位の變轉するより起る。晴雨寒暑も風の爲めに左右され、種々の現象を呈するのである。我が帝國にては夏時の流行風は南方より吹き來ることが多いので、廣潤なる太平洋の海面より涼氣を送り、陸上常に清風が絶へず、氣候極めて爽涼を感ずる。けれども冬期には之に反して北風連吹し、朔北地方より嚴寒を誘致するので、甚だ寒冷を覺ゆるの氣候となるは止むを得ない。若し晴雨計をして風の特異の變態を豫告すべき、特異の現象を指示せしむるに足るとせば、天候の變調も自から判明なるべき道理ではあるまいか。

晴雨計水銀の高低が甚だしき變動を示さるときは、即ち天候確定せるものと信じて差支ない。けれども水銀昇降の度高低不定なるときは、天氣の變化は到底測り難いのである。故に晴雨計に依り氣象學の研究をなし、至大の知識を得んと欲するには、其の示度の一高一低に深き注意を拂はなくてはならない。急劇の昇騰、竝に降下は、常に天候の變異を卜する唯一の豫告であるから、航海家の如きは日夜とも憂慮懸念の情を以て、之を注視して風雨を豫知し萬一の危難を冒すに當りても綽々として餘裕ある次第である。誠に大風浪の起るとき、晴雨計の俄然として昇騰を始むるや、隨

て海面一層狂暴猛烈の威力を逞くして、怒濤山を捲き紫瀾洶湧するに至る。

晴雨計の水銀は偏北風若くは北東風の如き、乾燥せる氣流に對しては概して昇騰し、偏南風若くは南西風の如き、濕潤せる氣流に對しては降下することが普通である。

寒暖計は常に晴雨計と同一處に備へて、氣象觀測の利便に供することが肝要である。毎時刻の氣壓と氣溫とを相互に指點して、比較研究することは此の調査に於て、尤も緊要缺くべからざる譯である。

煙霧は高氣壓のときも、又低氣壓のときも各發生する。是は晴朗の天氣に附隨する、一時の變現象なるに過ぎぬ。海霧は殊に出沒去來の變化甚だしく、或は濃煙水上に瀰漫しながら、其の厚さ僅に數尺に超えぬこともある。我頭上に艶美なる靑空を望み、赫々たる陽光を仰くに拘はらず、海面は一物を認むることが出來ないことがある。或は深靄濛々として天地陰暗、船尾の甲板より船首は思か煙突をさへ見ることが出來ぬことがある。又薄絹を隔て、物體を望む如く、輕煙淡霧中に萬象を明視し得ることもある。

潮汐と風波との關係

古來海員間には天候氣象に就て、種々様々の迷想を懷抱し、間々牽強附會の愚説を妄信することが少なくない。或る有名なる大航海家の如きは、天候は月の盈虧に伴うて、變化するなど、思惟したるものもあつた。

吾人は「月は缺け始めたから、荒模様になつた」とか、「新月現はるゝ迄天氣は持續せん」などの俚言怪説を耳にすることもある。けれども月と天候とは何等の關係を有するものでないから、此の如き理由を認むることは出来ぬ。唯茲に注意すべきは、潮汐の爲め海上に多少の風波を發するは、實際の現象である。月は月の直接的引力に由るとは言ひ難いが、海邊地の天候は或る程度まで潮汐の干満漲落に應じて、推移變動すること争ふべからざるのである。險惡なる天候と狂暴なる風雨とは往々潮汐の漲ると共に到り、其の退くと共に熄むのである。けれども新月、満月若くは弦月の爲め直接に天候の變化に影響する如き現象は、決して吾人の目撃せぬ所である。正確に天候の變動を受けるは天體の一大能力にして、太陽の球面に於ける黒點の多少に依るのである。該黒點と地球の電磁性との特殊の關係に基いて、北光及び電流等が發生することは、世人の能く知る所なるも、其の所謂特殊の關係や、原因の如何は未だ研究され詳説されたことがないのである。

九 マゼランの大航海

古今獨歩の快擧

古今東西の文書に見るに從來世界に於ける大航海と云へば、先づ太平洋橫斷を以て巨擘となす。往昔コロンプスの北米を發見したる、若くはヴァスコ、ダ、ガマの印度を探究したる如き、固より文明史上に於て重大奇警なる遠征として特筆大書せらるゝも、其の渺漫極まりなき遠洋航路の發見、竝に世界周航の目的を達成したるものとするには、猶多大の懸隔あるを免れざるなり。ヴァスコ、ナズ、デ、バルボアの眞珠島に於ける、ペドリアス、ダビラの巴拿馬に於ける、ギルコンザレスのニカラガに於ける亦然りとなす。是等數人の行程は未だ以て地理學上に於て、顯著なる大航海とする能はざるなり。而して吾人の所謂古今獨歩の一大航海とは、西曆千五百十九年フェルナンド、デ、マゼランの試みたる、太平洋橫斷の快擧を推して第一となす。

マゼランは元來葡萄牙國人なりしが、西班牙國に渡來して太平洋の周航をなし、空前絶後の功名を彰はしたる偉人なり。其の踏破せる航路は、西班牙よりテネリフ島(カナリー群島中に在り)を経て

大西洋を渡り、南米北東岸に到り、更に南下して南米の南端ケープホルンを迂回し、同處より西航して菲律賓に達したりしが、不幸にも蕃民の爲めに襲撃せられ、横死を遂げしを以て、マゼランの部下たるセバスタン、デル、カノー代りて其の後を襲ひ、菲律賓より喜望峯を繞りて歸航の途に就き千五百二十二年を以て故國に歸著せり。

此の大航海は前後三年間に亘り、千辛萬苦を凌ぎ、堅忍不拔の心力を竭して、造化未だ洩さざるの秘を開き、先輩未だ探らざるの地を尋ねて、世人の迷夢を覺醒し、赫々たる功業を史上に留め、勇武絶倫、誠實格勤、洵に後世の龜鑑とするに足る。然れども悲痛壯烈なるマゼランの最期を思ふときは、誰か潸然として暗涙に咽ばざるものあらんや。今其の梗概を説述すること左の如し。

マゼランの壯年時代

マゼランの生年月日は詳かならざれども、大凡千四百八十年頃の出生に係る、其の父は葡萄牙國の一貴族なりしが、マゼラン幼にして母を失ひ、其の家系由緒あるの故を以て國王の近侍となる。時に歐洲諸國は新時代の航海熱昇騰し、輿地探檢の氣焰漸く熾にして、葡國のヘンリー親王の如きは高貴の身を以て遠航の實踐を試み偉大なる効果を得たるの際なりしかば、葡國民は優秀なる海國民

の先鋒となり。ガマの如き青年氣鋭の航海家あり。バルボアの如き老成なる大冒險家あり。且又東印度の如きは實に同國の勢力圏たりしなり。降て千五百四年フランシス、ダルメイダ將軍の東印度總督として赴任するに及び、マゼランは之に従ひて同地に航し、妙齡七年を印度に送り、其の間幾多の辛酸と戦ひ、實地の教訓を得て、後日雄飛の地盤を築けり。嘗て印度よりモロッカ島に遠征隊を派して香料の輸入を謀るや、マゼラン特に選ばれて之に赴き、マロッカに寄港したるに、折柄同地は太平洋の門戸にして、東亞第一の貿易港たるを以て、亞拉比亞人、波斯人、瓜哇人、支那人、菲律賓人等の乗込める大小船舶輻湊して港内殷賑を極めたりしが、葡國船の入港するを見て皆之を忌避し、其の通商を拒絶せんと欲す。是に於て島王は島民に令して葡國人の殺戮を命じぬ。マゼラン機敏にして早く之を偵知し、其の計略の裏を掻きて出港し、無難なるを得たり。要するに當時の歐洲諸國は偶バルボア、巴奈馬を探究し、太平洋發見の報道傳はりて、人心活躍せるの秋なりき。マゼランは現に自ら香料を拾集しつゝある。モロッカ島が或は太平洋の對岸ならずやと思ひ、更に後日を期して西方の航路を探討し、自己の推察の誤らざるを證せんと待ち構へたりければ、此の東航は圖らず太平洋の東方境域に侵入し、最も有益なる研究資料を收得したりしや明白の理なり。

西班牙王の命を受け征途に上る

此の時に際して西班牙國のセビール港は、新世界の探究と領土の發見とに對し一大策源地にして、船舶の出入頻繁を極め商業甚だ盛大なるを見る。由てマゼランの航海準備も悉皆此の地に於て施行さるゝことに決せり。當時西班牙國王は全世界の覇主として隆々たる勢力を有したるを以て、葡國人の自國內に於て志を得ざるもの此地に集まり來りて、西王の一顧を期待するもの少なからず。マゼランも亦其の一人にして彼の友人フアルーロ、ジャン、デ、サラノ、セバスチャン、デルカノー、ジャン、デ、カータジエナ等の如き何れも永く同地に滞在し居たりき。マゼランは其の時代のロスチャイルドとも謂ふべき印度貿易商クリストフハル、デ、ハロの助力に依り、五隻の巨船を購ひ得て、其の艦装に著手し、西王チャールス五世之に對し相當の約款を設け、彼に告げて曰く、

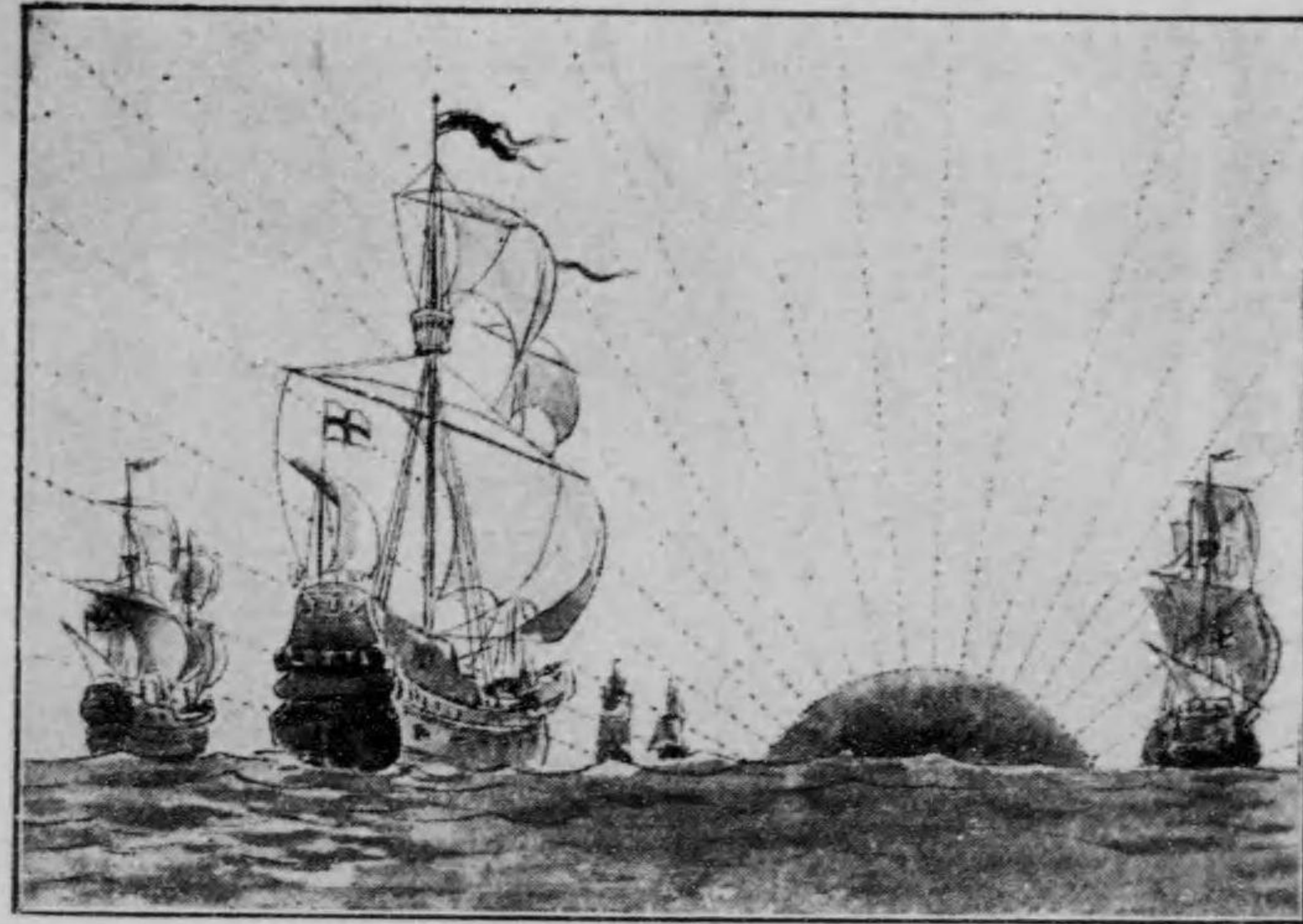
「卿我が西班牙國の爲め領土の發見をなさんとして、今や將に出發せんとす。其の勞苦や實に大なり。然れども大成功の更に刮目すべきものあるを疑はず、卿其れ之を勉めよ。朕は卿の權利を決して侵害せざるを盟ふ。是れアレキサンダー法皇の敕命に遵ひ、從來未發見の領土は凡て西葡兩國に於て分割せんとの趣旨に外らなす。」

と、斯くてマゼランは王命を奉じて左の如く一艦隊を編制せり。

艦名	噸數	官	艦長氏名
サンアントニヲ	百二十噸	少佐	ジュアン、デ、カータジエーナ
トリニダット	百十噸	司令官少將	フェルナンド、デ、マゼラン
コンセブシオン	九十噸	大佐	ガスバード、クエサダ
ウイトリヤ	八十五噸	同	ルイズ、デ、メンドサ
サンチャゴ	七十五噸	少佐	ジュアン、デ、サラノ

各艦の將校兵員は共に西葡兩國人の混合せるものにして、畢竟猜忌嫉妬の感念甚だ盛なる爲め、他日反亂不軌を謀る等の素質、自ら潜伏したること亦已むを得ざりしなり。伊國人アントニオ、ピガフエッタと云へるものも、亦此の艦隊に乘組みて遠征に従事し、歸國の後航海實記の著述をなしたり。

マゼランは幼年の頃より學問を勵み、最も地理學の造詣深かりしを以て航海術に精通し、爾後年齢の加はると共に益々經驗を積み、熟練敏活なる航海家たるに至れり。其の人となり勇猛大膽にし



マゼランの艦隊の航海

て危難を顧みず、當時有名の大航海王たるヘンリー親王、若くは歐洲印度間の新航路発見者たる、ヴァスコ、ダ、ガマに次ぎて傑出したる葡國人にして、能く至難の大航海に當り、學術上に鴻益を與へ、文明社會無二の大恩人となす。彼は其の資性剛毅果斷なるを以て、常に邁往進取を好み、艱苦困難を意に介せずして著々成功を期す。其の風ヘンリー親王に相似たりと云ふ。

前記艦隊は遠航の準備滞りなく完了したるを以て多量の貿易用品を各艦に積載す。其の主要なるものは小刀、釣針、織物、天鵝絨、象牙、水銀、櫛、鏡腕飾等の外、小鈴二萬個なり。千五百十五年九月二十日、艦隊は船艦相俾んでセビール港を出帆し、テネリフ島に寄港し、夫より南米北東岸に直航し

てブラジル沿岸よりサンタルシアに達し、同處に於て生糧品を積込み、且つ通商貿易を行ふが爲め二週間碇泊したる後、更に南航して各港灣河口等を一々探検測量し、巴奈馬北岸より菲律賓に至るの航路は、残る隈なく研究調査せり。其の航海日数の加はるに従ひ糧食の不足に苦しみ、各艦乗員の間、軋轢不和を生じ、容易ならぬ紛糾に立到り、長時日を費して漸く詮索し得たる一海峡の近傍に在る、サンジュリアン港に到着するに及んで、從來紊亂せる秩序全く崩壊して、背叛者を出したることを遺憾なれ。是れ司令官と各艦長との間に年齢の大差あると、人種の同一ならざるとに依りて、衝突の主因自ら存在せりと認むべきも、當時の歴史を通過すれば、長時日の航海に従事したる船員等、概して叛逆無道の振舞多かりしが如し。マゼランの部下も之が爲めに悪影響を受け、此の如き暴舉を敢てしたるにあらざるか。蓋し拉丁民族の國民たるや、上は國王より下は兵士輩にいたるまで皆此の傾向を有し、コロンブス、コルテス、ピザロ、バルボアを初め、其の他の探検者が悉く同様の失態を繰返したるは、實に奇怪と謂ふべし。故にマゼランのみ獨り此の例に洩るゝ能はざる所以なり。

マゼランの人格高尚にして才智絶倫なるは、固より史上に有名なりと雖も、叛徒の卑怯未練なる態度に對して、彼は正々堂々として應急の措置宜しきを得、司令官たるの威嚴を毫も汚損することなし

く、自己の沈勇と膽力とを發揮して、練々餘裕ありしが如きは、史家の慧眼能く之を看破し、乃ち敵人の兇惡無智なるを標榜するが爲め、對手の名聲益々加はるを見るべし。

部下將校の叛逆

艦隊は本國出帆以來、航海中風浪少しも止まず、互寒骨に徹し、定額の糧食は更に減額さるゝの不幸に會す。故に乗員たるもの萬事に心思を勞し、憂鬱不快の念を起さざるを得ず。速に前途の見込面白からざる遠征を中止して歸航するに若かずとは、彼等一般の希望なりしが、一人も之をマゼランに要請するものなく躊躇逡巡して徒らに時日を送り、詮方盡きて終に陳情することに決し、彼等司令官に乞ふて曰く、

「我が艦隊は日夜水路の探求に苦心すること已に數旬なるも、最早一海峡のあるなし。我儕は今將に嚴寒極まりなきの窮地に陥らんとす。縦令航路を發見するとも、食物なくして果して何をか利する所あるべきや。」

と、而も部下たる身分を忘れて、司令官に對し侮辱と冷罵とを加へて平然たり。始め彼等の不平は目立ちて其の舉動に現はれしと云ふにあらず。唯然く感ぜらるゝ如く至て微々たるものなりしに、漸次に嘲弄輕蔑を逞しうするの態度甚だしく、マゼラン之を黙過する能はざるに至りしぞ氣の毒なれ。艦長にして叛徒に與したるものあり。其の巨魁は實にジュアン、デ、カータジエナなりき。彼は嚮に旗艦に於て施行したる叛兵の軍法會議に、他の艦長等と共に臨席し、司令官の堅忍不撓なる取調べに對して不満を抱き、今日迄採用せる航路に關し、其の面前に於て公然之を誹謗したりしかば司令官烈火の如く怒つて、

「咄、叛逆者よ、不徳漢よ、汝は我が犯罪人なり」

と叱責し、カータジエナの身體に飛薙り、其の咽喉部を隻手にて押へ之を捕へぬ。カータジエナは來會の艦長に救助を乞ひしも省せられず、見る／＼手枷を加へられ、ウイトリヤ艦内に幽閉され、爾來同艦長メンドザ監視の下に、安全なる囚人生活を營むに至れり。

此時全艦隊員相協同して一揆の運動を起すには、形勢猶未だ熟せざるの嫌ひありしも、サンジュリアン港内は昨今寒氣凜烈、萬物皆凍結するの際にて、彼等は寒冷と饑餓とに苦しみ、全員の過半は遠征事業を抛擲して歸航するに決す、是れマゼランに取りて最大不幸の日時なりき、部下將校は殆んど皆叛き、兵員之に雷同するもの多し、彼等は唯徒に喜んで叛逆に應ぜり。噫、兵員の志操意氣は果して確實至誠なりと認むべきや、而して司令官は自己一人の外、他に信賴するに足るものな

く、我が位置の甚だ危殆なるを感ず。我若し歸航を許さざれば部下の爲めに屠られんこと必せり。部下も亦此の如く語り。然れども剛勇なる司令官は、我が意志を翻して、歸航するが如き不見識の人ならざるなり。

今や耶蘇復活祭の日取も漸く近づきぬ。當日總員は陸上に赴き、地方蕃民に接觸すべき命令あり。各艦長は該作業の終了後、旗艦に集合し、司令官と會食すべき豫定なりき。過般カータジエナの降官されしや、マゼランは其の甥アルヴァロデ、メスクイッタを擯んじてサン、アントニヲ艦長に任用せしが、復活祭の當日に於てクエサダ及びメンドザの兩艦長が蕃民と接見したりしも、司令官の饗宴に參會したるものは唯メスクイッタ一人のみ。

同夜マビランは心中不安の憂慮に堪へず、旗艦内に準備したる宴席を早く撤去して、寢室に退き就眠したりぬ。叛徒等の艦内に在りても、悽愴たる殺氣横溢して物情恟々たり。然れども中夜直の終るまでは何事も起らず、表面はいと靜肅なりき。而して夜半に及びて、ウイトリヤ艦内に檻禁されたるカータジエナは、同艦長メンドザの爲めに縛を解かれ、クエサダ及びセバスタヤン、デルカノの兩人と共に、甲装を著けたる兵員三十名を率ゐて、徐にサン、アントニヲ艦に赴き、直に艦長室に闖入し、俄に艦長メスクイッタを捕拿し手枷を加へぬ。同艦の忠良なる兵士は、艦内騒がしき

音響を聞き、蹶起して抵抗を試みたるものありしも、皆クエサダの爲め或は銃殺せられ、或は捕縛されぬ。デルカノはメスクイッタに代りて、サン、アントニヲ艦長となり。直に銃手を橋樓上に登らしめ、戦闘準備を行ひ、甲板を取片付け戦を挑みたり。然るにマゼランは當夜の事件を全く知らずして、翌朝早起して艦内の作業に必要な淡水の缺乏せるを以て、サン、アントニヲ艦に一端舟を派遣し、兵員をして之を請はしめたりしに、一言の下に拒絶されぬ。是れ同艦の指揮を掌るものは司令官マゼランならずして、クエサダなればなり。因てマゼランは彼等の意志の存する所を詳に知了し、且つ其の決心を翻さしめんと欲し、使者を馳せて各艦長の意見を聞かんとせしに、クエサダは答へて曰く、

「我等は我が國王と自己との爲め、自由の行動を執るのみ。何を卿等の干渉を要せん」

と、他艦長の意亦此の如し、但しマゼランに左袒したるは、サンチゴ艦長一人のみ。

目下マゼランの境遇を考ふるに、勇猛剛健の精神は依然として能く其の勢威を失墜せざりしを嘉せずんばあらず、嗚呼、三大艦は其の艦長並に兵員を擧て叛旗を翻せり、我が味方は小艦一隻と、我が旗艦の忠實なる乗員あるのみ。敵は悉く西班牙人にして、いづれもマゼランを嫉視し其の他國人なるが故に之を憎惡し、其の上官たり賢人たるが爲め、殊更に之を除かんと欲したるなり。

されどもマゼランの巧慧多智なる、其の身の危難に逼りて少しも驚かず。悠揚として獨り自ら所爲らく、敵は三艦を有するも我は僅に二艦なり。寡を以て衆に當るは良策と謂ふべからず。若かず、詭計を用ひて先づ敵を破らんにはと、時に叛徒より通牒あり。其書に曰く、

「我等はサン、アントニヲ艦内に於て、司令官閣下に面晤を遂げ、小官一同の素志を表白せんと欲す。」

と、司令官直に返書を裁し、答へて曰く、

「汝等要用あらば、従前の如く我が旗艦に來り懇談を交ふべし。何爲れぞ木職を他艦に拉し去るを要せん。」

と、然も雙方いづれも對手の犠牲となるを欲せざるなり。既にしてクエサダより一書到りたれば、マゼラン直に其の端艇を奪ひ兵士を抑留せり。

嗚呼マゼランは、如何なる方法を以て戰ふべきか、今は一刻も早く敵を倒さざるべからず、由て彼は敵の三艦に於ける將卒の人物性行並に地位等に想到せるに、グイトリヤの艦長メンドザは西班牙人なるも、其の兵員はすべて我と同國人にして、常に我に對して友情あるを思へり。此の危機に際し之を利用して我が運命を決せんと欲し、茲に警史エスピノサに命じて、兵員五名を率ひ、武器を

匿し携へグイトリヤ艦に到らしめ、又他の端艇をして、マゼランの従弟バルボサ指揮の下に、精選したる兵員十五名を載せ、旗艦を發せしむ。彼等は共に司令官より特別命令を與へられ、重大の任務を託せられたり。エスピノサは即刻グイトリヤ艦に馳向ひ、五名の兵と共に同艦内に入り、司令官の手書を同艦長メンドザに提出して、直に旗艦に來るべきを要したるに、同人は傲然として冷罵して曰く、

「我豈鳥獸の類ならんや。何んぞ容易に欺かるべけん。」

と、後方を振り回して立去らんとしければ、エスピノサ今は一刻も猶豫すべからずとなし、奮然劍を揮つてメンドザの首を刎ねたれば、グイトリヤ艦長の五體は果敢なく甲板上に斃れたり。之れと殆んど同時にバルボサは十五名の兵と共に、上甲板に來集し、將旗を橋頭に掲げ、グイトリヤ艦の捕獲を全うせり。

是に於て我が艦數は敵の二隻に對して、三隻となりたり。マゼラン敵の二艦長が何事をも知らざる内に、敏速に我が三艦の錨地を移し、港口を監視し敵艦を見逃さざらしめ、トリニダツト艦は戦闘準備を行ひ、艦内外を整頓せり。其の翌朝に及びて、サン、アントニヲ艦は錨を引摺りつゝ、旗艦に肉薄し來れり。其の後甲板にはクエサダが投鎗と楯とを携へ、接戦を試みんと欲して兵員を呼集し

つゝあるも、一人の敢て其の命に應ずるものなし。而して同艦が旗艦に相近づきしとき、トリニダット艦より多数の兵員敵艦の舷側に攀ち登り、艦内に竊進して、クエサダ及び其の徒黨を捕へ、手枷を加へたるに、其の後間もなく、カータジエナは他の一艦を以て降伏するに至りたれば、茲に叛徒は潰滅に歸し了り。由てマゼランは巨魁の罪状を案じ、クエサダは遂に斬首され、其の死體はメンドザの遺骸と共に陸上に曳廻され、終に寸裂せられ、カータジエナは艦隊の出港前、海岸に追放され流刑に處せられたり。

マゼラン海峡の發見

是より後マゼランは更に遠航を繼續せんため、諸種の準備に取懸り、船體の修理をなさしめ新補の士官を任命したりぬ。サンチアゴ艦は海峡の水路を探索すべく沿岸を巡航中、誤て暗礁に觸れ難破したるも、幸に人命の損失なし。由てセラノはコンセプション艦長に轉じ、メスクイッダはサン、アントニヲ艦に、バルボサはヴィトリヤ艦に各移乗せり。自餘の諸艦は舳艫相俾んでサンジュリアン港を發し、極力水路を搜索しつゝ航行したるを以て、日々幾回となく停止して又進み、具に艱苦を嘗め盡し、漸く一海湾の入口を發見す。即ちマゼラン艦隊は千五百二十年十月二十一日を以て、

此の海湾に入るを得て、從來長く探尋せられたる海峡を始めて實見したるなり。斯くて艦隊は南進を續け、海峡の通航に従事し、三十有八日を費して之を通過す。其の南岸に火光の起るを望み、テルラデル、フエーゴと名づけ、其の海面は始めバタゴニヤ海峡と云ひしも、後マゼラン海峡と呼び、又其の陸地は昔時マゼラン領土と唱へたりしも、今はバタゴニヤ州と稱せらる。既にしてサンアントニヲ艦は本隊に分れて單獨巡航中、其の兵員等叛逆を企つるに際して、艦長メスクイッダは之を制馭する能はず、却て兵員の爲め縲綽の辱を受け、同艦は直に西班牙に歸航し、叛徒の巨魁は榮譽を荷へるも、彼等に創痕を與へ、若くは誹謗を加へたる正義の人士は、すべて牢獄に投せられたることを淺猿しき限りなり。

太平洋の横斷

マゼランの當海峡に入りたる後、連日大西洋の風波に苦しめられしが、一たび海峡を出づれば、波靜かにして適良の風吹き、航行甚だ壯快なり。之に由てマゼラン大に喜び、其の海面に太平洋の名稱を與へたり。嗚呼、太平洋は果して大西洋よりも靜穩なる海面なりや。否決して然らざるなり。元是れ渺茫たる大洋洋なれば、暴風襲來する毎に波浪忽ち澎湃たり。大西洋の赤道帯は面積狹隘な

れども、之に反して太平洋の同帯は甚だ廣闊なり。乃ち前者は後者の三分の一に過ぎず。而も北部に颶風あり。南部西部には、旋風、大風あり。バルボア、マゼランの徒も之が爲め大に苦しめられ、部下の背叛と不平とを惹起したるの状況共に相似たるも亦奇ならずや、吾人は太平洋といへる命名の甚はだ優雅なるを愛す。其の用語簡單にして記憶に便に、殊に大々洋の恩恵に浴するものに在りては、此の稱呼に依りて偉大宏遠の感想を抱懐せざるなし。

艦隊バタゴニヤ海峡を出でたる後、マゼランの探究したる航路は、バタゴニヤの北岸より更に北西に轉じ、夫より暫らく正西に向ひ、次で西徼北の針路を以て、一直線にラドロロン島竝に菲律賓島に達したるなり。而してマゼランの嚮きに踏査を遂げ、今復搜索しつゝあるスバイス島は、菲律賓を距ること甚だ遠からずと云ふ。此の世界一周の大航海は、到る處詳密に水路を探究し、紆餘曲折して、東西各地に航過したるを以て、其の距離を算するときは、恰かも二十回の世界周航をなしたるに相當す。其の長期の航海中壞血病流行し、飢餓相踵て起るあり。糧食盡きて鼠を食するすら猶甚だ贅澤と思はれたり。一疋の鼠を一銀錢に代へて、争うて購求したりと云ふ。

かくてマゼランは日數九十八日を要して太平洋を横斷するや、ラドロロン島即ち盜賊島に到着す。同島民狡猾にして好智に長じ、各種物品を窃取することの巧妙なるには、艦隊員一同深く驚嘆したり

ぬ。艦隊の同地に投錨する間もなく、將官艇紛失し、その他大小幾多の器具をも奪はれしが、賊徒は皆敏捷にして、西班牙人は如何に焦慮するとも之を追捕する能はず、又之を驅逐するに由なし。止むなく小銃を連發し彼等の多數を射殺して、懲戒の方途を示すに至れり。尋でマゼランは菲律賓に航し、同地發見の當日神聖なる耶穌祝祭日に因んで、之をセントラザルス島と命名したるが、其の後千五百四十二年に至り。西班牙國王フィリップ二世の名譽を表彰して、全群島を現名菲律賓と改めたり。

菲律賓の蕃民は艦隊員に椰子實バナ、を與へ、又橙、柑橘類を持來り、魚鳥をも寄贈して好意を表せり。我は之に酬ゆるに鈴、鏡其の他玩具を以てす。島王はマゼランを訪問せんが爲め、金品米穀を携へて來艦せり。マゼラン彼に赤黄色の土耳其帽と紅帽とを贈り、又相互の友情を叙する爲め饗宴其の他の儀禮も略交換されぬ。マゼランは島王に國家將來の利益を説き、且つ戰爭に携はるべき必要上基督教徒たるの得策なるを勸説したるに、國王は直に快諾し、何等の支障をも見ずして、此の島國に基督教を扶殖するを得たり。

マツタン島の征伐竝にマゼランの戦死

爾後マゼランは附近の各島嶼を巡航し、歐洲雜貨を以て金品香料と交易して巨利を博し、諸蕃地を跋渉して終にセブ島に達せり。同地は島内到處、自然の富源を包藏せるを以て最も有名なりしかば、彼は大に之に著眼し、辭色を卑ふして島王に説く處あり、是に於てセブ王も亦基督教を受け理するに至りき。時にマゼランは全群島をして凡て同一基督教徒に化せしめ、剩へ西班牙國の領屬たらしむべき野心を抱き、西人六十名と土民との同盟軍一千名を率ゐてマツタン島を征伐せんとせしに、意外にも敵は烈しく抵抗し、其の兵數我に倍するの優勢を示したり。

然れどもマゼラン神色自若として以爲らく、縱令敵兵我が軍に數倍するとも、敢て恐るゝに足らず。我は西兵六名あらば之を破るに何の難きこと之れあらんとなし、恰かも遊獵に於けるが如く、好戦勇猛の將軍は敵兵を輕侮せり。尋て將軍のマツタン島に到着するや、島王に使者を遣はし、降伏を勧めしも聽かれず。島王は却て暴慢無禮の態度を以て、一書を送り來りて曰く、

「卿宜しく端艇内に在りて海岸に待つべし。我は兵を馳せて卿を破らん。」

と、マゼラン赫怒して之に答へて曰く、

「爾等其の處に残留せよ、我が基督教徒の善く戦ふを爾等に示さん。」

と返書を送り。時に日已に暮れ、夜色沈々として天地閑寂たり。翌日拂曉、侵入軍は急遽上陸を

始めたるに、敵は猛烈に應戦せり。投石は雨の如く落下し、投鎗の火焔連發し來て、我が軍の損傷少からず。加ふるに戰場は人家櫛比し、樹木其の前に列して我が攻戦に便ならず。會々島民自ら市街に火を放てるあり。我が兵の窮蹙甚だしく、敵は勢に乘じ勇氣百倍して、潮の如く突進しければ、我が兵算を亂して逃走し、周章して端艇に引歸すもの多し。マゼランは西兵六名と共に敵の重圍中に踏み止まり、力戰奮闘せること久しきに亘りしが、身に重傷を蒙り、止むを得ずして海岸に退却せんと欲し、且つ戦ひ且つ叱咤しつゝありしに、遂に西兵悉く剿滅され、マゼランも蕃民の爲めに竹鎗十二本を以て刺され、殺害せらるに至りしは實に憫れむべし。かくて空前の大航海を成就し幾多の土地と水路とを發見して、世界文明に貢獻する所著大なる絶世の英雄は、宗教熱と虛榮心とに躁急にして、空しく其の生命を失ひたり。時年五十二歳。

艦隊の歸航

是れより後、マツタン島民は西兵の與し易きを知り、之を見れば忽ち屠らんとす。之が爲め殘餘の艦隊員も各地に轉戦せる結果、大に其の兵數を減じ、コンセブション艦は減員の數殊に甚だしく、航行に差支ゆる始末となりたれば、遂に同艦を燒毀し去り、又トリニダット艦は船體に漏水の箇處

あるを以て、一時乗員を陸上に移して修繕を加へたる後、巴那馬に向け出航せしが、壞血病と凍傷との爲め乗員の四分三を失ひ、再び途中より引歸し、生残者は艦と共に、葡國人の救助を求むることゝなれり。然るに此のとき葡國人は大擧して此の島に渡來したりしかば、トリニダット艦の歸泊するを見るや、直に之を襲撃して、エスピノサ以下一同を縛して之を禁錮し、非常の虐待を加へ、之が爲め命を失ふもの多く、エスピノサ亦此の毒手に斃れたり。而して他四人の生残者も纒かに呼吸を繋ぎつゝありしか、後葡國人之を憐れみて、船便に托して西班牙に送還せり。彼等はワイトリヤ艦の歸國後四年にして始めて故國に歸著せりと云ふ。然るにワイトリヤ艦はモロッカスに於て高價なる香料を積載して、セバスチャン、デルカノー之れを指揮し、千五百二十二年九月六日を以て、恙なく西班牙の故國に安著せり。三年前艦隊の同國出發の際、マゼランと同行したる全艦隊員二百六十五名なりしが、此のとき生還したるもの僅に十八名に過ぎず。而して此の人々が世界周航の嚆矢たるを得たるなり。ワイトリヤの生還艦長デル、カノー(又エルカノーとも稱す)は、西國王より地球儀を擔ひたる甲冑一領を賜はり、其の功績を記表したる令旨を鎧板に彫刻されたるぞ、異常の恩賞なれ。按ずるにデルカノーは性質粗暴なるに似ず、敏捷伶俐なるを以て、能く在朝高官の歡心を得るに長じ、世界周航に對する恩賜の如きも、實は彼よりも功勞更に大なるものあるに拘はら

ず、獨り自ら榮譽を私したること、何ぞ奇とするに足らんや。デルカノーの自製せる日記に依るに、ワイトリヤ艦歸著の當日は九月五日なるに、西班牙國にては六日なりき。由て日記に誤謬なきやと詳しく調査せしに、彼は航海中毎日精細に記載せしものなるれば少しの誤なしと云へり。さらば航海中一日の損失は如何なる原因に在るやと、西班牙國王は當時の有名なる天文學の大家コンタクニーに命じ、此の問題を解釋せしめれば、コンタクニーは研究の末、其の理由を發見したりぬ。彼は東より西に向て航するは、太陽を逐ふて進むものなれば一日の損失をなすは自然の結果なるを説き、之に反して西より東に向ひ航せば、一日を贏ち得べきことを述べたりと云ふ。是れマゼランの遠征に依りて發見し解釋せられたる。最も肝要なる事實の一なり。

十 極地に於ける氷海の探險

エスキモー人の生活

エスキモー人は北米の最北端に位置する地方に棲息する人種である。同地方は年中氷雪の外、一物の眼に入るものなく、土人は居住に充つる爲めに雪窟を作り、糊口の爲めに海濱に沿ふて、氷原上に長途の旅をなすを例とする。

讀者諸君は各種の生活を實驗されしならんが、此のエスキモー人の生活の如く、單純にして奇抜なるものはあるまい。彼等の身體は矮小にして皮膚は黒色を帯び、頭上より足の先きまで毛皮を纏ふて居る。其の生國は四時積雪の絶ゆるときなければ、殆んど一定の生業とはなく、唯各處を漂浪して或は海獸を獵獲し、或は魚鳥を捕拿して衣食の資とする。彼等は臘腸獸の生肉を以て最も嗜食する餌食となし、若し之を得るものあれば、吉報は四方に擴がり、知友隣人來會して太牢の饗に與かる。彼等は吾人の所謂家屋を有せず、唯雪中に窟穴を穿ち、或は凍結せる氷雪塊を積疊みて、恰かも蜂房の如く地上に小屋を營み小なる出入口を設け各自匍匐して出入する。室内概して十二人

内外を容るゝに足れども、至て狹隘なれば床上に踞踞し得るに過ぎない。換氣と採光とは右の出入口に依るのみなれば、何れも不良なること甚だしきも、彼等は之に満足し、常に魚油の燈を點じ、平然として室内に於て喫煙をなすのである。

諸君は此の如き境遇に在る土人が、如何にして其の生計を立つるかを怪しむであらう。然れども彼等は生國を愛好するの情思至て切にして、決して郷土を離れ去ることをなさず、且つ其の感ずる愉快は天眞の快樂である。斯くて神明は萬人に幸福を授けしこと固より

エスキモー人



明白なれば、吾人は其の恩恵に従ひ各自其の分に安んじ、日常の業務に勵精しなければならぬ。若夫れ分外の慾心を起し、己れの享有すること能はざる虚榮逸樂を欲するに於ては、到底圓滿に一

身一家の幸福を得べきものでない。

四時堅氷の凍結せる極地に在りては、土人は常に積雪の中に居住するのみならず、多くのものは氷雪を突破して旅行し、海上に遠征を企つるを以て其の生業とする。之が爲め智識の程度も低く、文明的の天恵を受くることが少ない。

氷海の跋渉

吾人は之より或る宣教師が傳導の目的を以て、是等僻陬の地方に往復したる探險談を試むるであらう。此の宣教師は埃國モラヴィヤ人にして、エスキモー人を嚮導として極地を跋渉し、頗る精細に其の光景を説述せるを以て、讀者に少なからざる感興を興へる。

此の一行は英領ラブラドル沿岸の布教に従事せる、埃人サミユール、リービスといへるもの之が指揮を掌り、男子三名と婦人小兒各一名の外、嚮導二名合計七人より成り、同國の最北端に位するオクカクといへる地に赴けるものにて、同處はリービスの滞在せるナインと云ふ地より、北方に約百五十海里を距つて居る。同行者中他に一人の宣教師ウイリヤム、ターナーと呼ぶ英人もあつた。千七百八十二年三月十一日に一行はナインを出發した。時正に早朝にて東天未だ明けざれども、晴

空拭ふが如く星斗爛然として異彩を放つた。橇二臺に分乗したる一行は、二名のエスキモー人を御者となし、一臺には宣教師二名と、マークと呼ぶ洗禮を受けたる土人の御者乗込み、他にはエスキモー人四名を載せ之に伴つたのである。

エスキモーの橇は特種の犬を使用して之を牽かしむ。其の犬の形は宛然狼に似て居る。而して亦狼の如く少しも吠えざるも、唯氣味悪く咆哮する。土人は是等の犬を澤山に飼養し、富裕なるものは一群或は數列の犬を以て橇を牽かすのが通例である。犬は從順にして主人の命のまゝ能く之を輓く、而してエスキモー人は之を虐使しながら、食物の如きは至て少量を與へ、主として魚の屑肉古皮、臟腑、或は他に用ひられざる鯨魚の臟物、又は腐敗せる鯨翅等を其の食用となす。若し此の如きものなければ、土人は之を解放して隨意に海濱を徜徉せしめ、死魚或は貝類を拾はしむ。彼等は飢餓に逼るときは、如何なる物をも吞噬する、旅行中は夜間之を輓具に繋きたるまゝ、雪窟内に留めて其の食食を防ぐ。然らざれば翌朝使用に堪へざることがある。

旅客其の宿營地に達すれば、犬を繫索より解放する。然るとき犬は雪中に自ら窟穴を穿ち、喜んで其の内に憩ふ。而して翌朝出發に先んじ御者の呼ぶ聲に應じて來集し、食物を得るのである。其の體力は飢餓に逼れるときにも、極めて旺盛にして駆力頗る速かである。橇に犬を繋ぐには特別の

注意を要し、之を駢列せざる如く行ふ。一々長短不同の革紐を用ゐ、其の一端を橇の前面に附著せる轆木に結束する。老年にして道路を知れる犬は、必ず十歩乃至二十歩の間隔だけ最先きに馳驅せしめ、御者は非常に長き鞭を打振り、獨特の技量を現はして之を指揮すれば、他の犬は羊群の如く之に随ひて疾驅する。

犬は鞭笞を受ければ必ず隣接せる他犬を噛み、かくて噬搏一回だけ行き渡るに至る。

話頭は前に戻り、リービス一行は二臺の橇に搭し、一同の元氣旺盛にして面色亦快活である。彼等は二三日の後オクカーに安著すべしと確信して居た。凍結して鏡の如き海上を通過する間は、豫定の如く良好の状態に在りて滑走し、毎時六七海里の速力を出して行進容易なりしも、ナイン灣内の島嶼を過ぎてより、キグラベイトの高山峻嶺を避くる爲め、陸地を甚だ遠く離れて氷海上を滑走したるに、約八時頃沖合より陸地に向つて、疾驅し來れる一臺の橇に出會した。其の橇にはエスキモー人が數名搭乗して居りしかば、互に普通の挨拶をなした。時に彼等は其の常習の如く、烟草の火を點しつゝ二三の會話を試み、リービスに告げて、是より北進の目的を抛擲して、ナインに戻るに若かずと勧めた。然れども宣教師等は彼の士人等は我と同行せんことを望み、我を要して歸途に就かしめんと欲せしならんと、且つ疑ひ且つ謝して其の言を排しつゝ、更に前進した。

數時の後、一行中のエスキモー人も氷海の下大暴浪ありと一行に注意した。一行は身體を氷面に横たへ、耳を之に近づけて聴くときは、空洞中不快なる激浪澎湃の響を感じ、恰かも深淵より何者か登り出づるが如く思はれたが、橇上に在りては更に其の現象を知り難い、加ふるに天氣は快晴にして、唯東天に一團の雲烟光輝を發して現はれ、數條の亂雲其の間に點綴せるのみなれば、其の儘北進すると數海里に及んだ。時に北西風始めて強吹し、天候劇變する如き徴候が起つた。

此の時太陽は高く昇騰し、天空の色合などには、何等の異變も認むること能はざりしが、唯氷面の下、海水の動搖漸く盛なる如く思はれしかば一行大に驚愕し、先づ海岸に近づきて警戒しつゝ、進むより外に、執るべき方法がなかつた。氷原は處々に破碎し割目が夥しく發生し、中には幅一二尺の罅裂を見た。然れどもリービス等之を望み、是は此の地方に特有の現象と妄信し、犬も平氣にて此の割目を飛び越へ、橇は毫も危険を感せずして進行を續け、一行も甚だしく憂慮せず、唯如何なる變災が新たに襲來するかと、只管恐怖の念を抱いて居た。既にして太陽西天に没せんとする頃、風力益々強く遂に荒天に變じ、彼の東天に現出したる一團の雲幕は、倏忽中空に捲上り、暗黒醜怪の亂雲風向に反して疾走するを見た。夫より飛雪繽紛として飄り、一陣の旋風は氷原又は高山を掠めて、俄然として殺到し、氷面下の大暴浪益湧起して、氷上に感ずる激動は一同の心膽を奪つた。橇は

氷面上を滑走すること漸く困難にして、或は犬を後方に急轉し、或は隆起せる小丘に攀上ること能



氷海の際

はざるに至つた。是は數海里に蔓延せる凍水の弾力が、海水の攪亂せる爲め其の氷厚三四ヤードなるも著大の動搖を生じ、恰かも潺緩たる溪流中に一枚の洋紙を浮べる如く、壓推力の不平均より氷面破碎して、其の音響各處に轟き、砲聲の如く遠方にまで達した。是に於てエスキモー人の御者は全力を以て犬を驅り、海岸に向て進み、ナイバツクの南方に於て、宿營の場處を求めて留まらんとしたが、一行は氷原が忽ち破壊して、廣濶なる海洋に化せん事最早明瞭なれば、マークはナイバツクの北方に前進し、同處より更にオクタクに到らんと勸告した。

此の提案に對して一行は同意を表したるが、橋の海岸に達するや、彼等は意外の慘狀を目撃して戦慄した。此のとき氷面は全く破れて岩石より離れ、險崖の側には無数の氷塊が或は研磨せられ、或は粉塵して轟々爆破の音響を發し、風の叫號する聲に和して居る。而して飛雪は寸時も止むときなく、濛々漠々として降下し、一同の視聽は殆んど全く妨げられて、其の心思を感亂した。彼等は茲に上陸を試みんとするは、甚だしき冒險と謂ふべきであるが、既に危急の身に迫る上は、今之を企圖すること、一行に取りて安全を計る唯一の希望である。然かも多大の困難を凌ぎて、上陸は漸く履行された、折柄驚異の感に襲はれたる犬は更に前進を強ゐられたるが、氷塊の全部は岩石の上下に浮沈して危険言ふべからず。一高一低の差は頗る大にして、上陸を爲し得る機會は實に海岸の高さと同じ位置に、氷塊の浮上りし一刹那である。御者は之を見て其の操縦に巧妙なる成功を告げ、一同恙なく上陸したるは、全く神助の加護とより外認められない。かくて二臺の橋は海岸に著し、一層の困難を以て海濱に牽上げられた。

大風波の急襲

一行は愈々其の身の安全を得しも、神恩を感謝することだに考ふるの遑なく、倉皇として再び陸上

に疾走を始めたるに、陸岸の氷塊忽ち破壊し、海水下方より溢出して一面の海と化した。直に信號がなされたる如く、氷塊の大量が海岸より數海里の間に散布し、展望の届く限り遠方まで破壊を始め、氷上には巨浪濤濤として押寄せ、益々之を摧破し去つた。

其の光景洵に慘澹たる奇觀を呈し、且つ莊嚴雄大の威力を示した。廣濶なる氷野は一層荒涼となり、海上には峨々たる氷塊の屹立せるもの其の數を知らず、彼此交互に衝擊して、凄まじき勢を以て海中に沈む響は、眞に數門の大砲を齊射する如く天地を震撼した。

物凄き夜中の暗黒は、風濤の咆哮と、岩石に抗爭する氷塊の摧破する音響と相合して、悽愴悲哀を極め、一行をして敬虔且つ恐懼の思に沈み、片言隻語をも吐露すること能はざるに至つた。彼等は茫然として生命を全ふしたる好運を怪しみ、一同唯驚心瞠目して佇立し、不信心なるエスキモ一人と雖も、其の神助に對して感謝の意を表した。

エスキモ一人は今より急遽雪窖を造らんとして、海濱を距ること約三十歩許の氷雪上に掘鑿を始めた。然るに工事の未だ終らざるに、波浪は已に橋の繋留しある場處に達し、彼等は辛ふじて其の身の海中に没はるゝことを免れた。丁度同夜の九時頃、一行は雪窖内に隠れ入り、無事奇禍を脱したる幸福を神明に感謝した。其の時まで彼等は海濱に吹晒され、朔風錐の如く顔面を刺し、寒氣

酷烈骨に徹し、風勢愈暴威を選ふし風向に面して直立するさへ非常の困難を感じたるも、一同蘇生の思をなして喜び合ひ、只管過刻の冒險を追想して毛髪を逆立てた。

是より先き一行の雪窖に入らんとして、海上を望見せるに、氷塊は已に消滅して渺漫たる海水洶湧し、暴風之を捲き巨浪山の如く起り、海岸に撞觸する勢は迅雷飛瀑も雷ならず、又岩石に遮へざられて更に狂奔し、白泡を漲らし飛沫を空中に散する、嗚呼此の時まで氷海に在りしならば、彼等の身體は北極海の藻屑と化したのであらう。一同俄に愁眉を開きて晚餐を喫し、了てエスキモ一人の讚美歌を唱ひ、十時頃身を横臥して睡に就く、但し窖内狹隘なれば、彼等は互に身體を密著し、若し一人其の身體を動かすときは、之に隣れるもの皆目を醒ます程であつた。

エスキモ一人は就寢するや、直に鼾聲を放ち心地よく安眠したるが、リービスは少しも睡ること能はず、且つは海上の荒れる音と、風の哮る聲とに精神を惱まされ、寒冷の爲め咽喉部に烈しき疼痛を覺へて、徹霄睫を合はさない。二名の宣教師は其の不安の境遇に陥れるを恐れ、一行をして突嗟の死滅より免かれしめんと神明に默禱して夜半に及んだ。

翌朝二時頃、リービスは窖内の屋背より二三滴の潮水落下し、其の口唇に觸れしとき、水分に鹹味を含めるに喫驚して、尋常の積雪より起る理由なければ、不思議のこと、潛心静思しけるに、程經

て同様の點滴益々甚だしくなれるを見て、蹶起せる際、客屋外に於て俄かに大波浪の寄せ崩るゝ音響を聞き、同時に渦巻ける水柱の屋上に倒潰せるを知つた。而して此の如き巨浪を浴びること再三に及び、終に客舎の入口に戸扉の代用として積置ける、氷雪の厚層を波浪の爲めに奪ひ去られた。宣教師は矢庭に大聲を發して、エスキモ一人の夢を破り之を起して、急に他に避難處を移さんと懲慚した。彼等は直に奮躍の態度を以て之に従事した。一人のエスキモ人は大刀を揮て客屋の内側を切開して、外方に通路を開き、ターナー亦之を助けて、各自に行李を携へ之を海濱の小丘上に投出した。リービスと婦人及び小兒とは先づ同處に逃れ、小兒は大なる皮革に包容されしまゝ、エスキモ一人之を携へて脱し

客 雪



去つた。リービスは一大岩の蔭に身を匿して風雪を避け、他のものも又之に倣つた。而して一行の茲に避難する後、間もなく尨大なる波浪は一舉して雪客を摧破し去り、潮水の退くや、其の跡には一物も留めない。かくて彼等は再三危うき死地に投じ、幸に之を脱したりしが、エスキモ一人は雪客を新設する爲め、之に適する安全の場處を發見する迄、殘夜の數時間は實に彼等の心身共に絶大の苦痛を嘗め、一同悲哀の涙に掻き暮れた。拂曉の比、エスキモ一人雪の吹き寄せたる低地に窟穴を穿ち、二名の宣教師と婦人及び小兒とを先づ此中に收容した。然るにリービスは空氣流通の不良なるより、咽喉の疼痛甚だしきを訴へ、入口に座するの止むなきに至つたので、エスキモ一人は自ら毛衣を脱きて之をリービスに與へ、彼の身を溫暖に保たしめた。

糧食缺乏

天明となりて一行は更に他の雪客を作り、其の設備は常の如く粗造にして憫然たるものなりしも、各自は満悦して其の中に投じ以て神恩を感謝した。客内の濶さ約八尺四方にて、深さは六七尺許である。今や一同は互に救援の祝意を述べ欣然たりしが、間もなく更に一層不良の災難に遭遇する

に至りしは、誠に氣の毒の次第である。

昨日ナインを發するとき、宣教師二名の豫て携帶し來れる糧食は、其の貯量至つて輕少にして、單にオクカクに達するまで數日間を支ふるに過ぎなかつた。魔法師カツシギヤツクと其の妻ジョー及び小兒等との分は、全く何物の準備もなかつたので、之が爲め一行は少量の食物を日數に應じて、分配せねばならぬことゝなつた。今は今此の處を去つて或る村落に達する迄は、殆んど食品を得る望みがないからである。

彼等は此の目的に對して二方法を撰擇した。乃ち荒蕪未開にして人跡未だ到らざる、キグラベイト山を横斷して陸路を進むこと是其の一である。然らざれば緩やかに時日を茲に送り、海上に永原の新たに生ずるを待つこと、是れ其の二である。是に於て一行は毎日ビスケット一個半づつを食し、僅かに飢餓を忍ぶことゝ決した。

然るに此の少量を以てしては、如何にしても生來大食に馴れたる、エスキモー人の胃腑を宥むることが出来ない。宣教師は一行の爲め一頭の犬を屠殺せよと命じ、更に後日に至り再び飢餓に逼るときは、次回にはエスキモー人の犬を屠殺すべき旨を約せんとしたるに、彼等は之に對し、若し困難に陥りし場合には、喜んで之に應ずべきも、今は猶未だ然りと思ふ能はざれば、一同飢餓を忍ばざ

るべからず、我等は今日犬の生肉を食するを欲せずと答へた。

宣教師は今雪窖内に殘留し、毎日燈火を用ゐる雪を煮沸して、珈琲二杯分の熱湯を得ることを努め、一行の健康は幸にして良好であつた。而してリービスの病氣も日を逐ふて全快し、咽喉の疼痛も殆んど止んだ。エスキモー人は皆其の元氣少しも衰へず、彼の粗暴にして異教徒たるカツシギヤツクですら、述懐して

「我等の今日あるは實に神明の恩恵である。昨日猶少しく遅くまで氷海に在りしならば、我等の身體は悉く粉塵されしならん。」

と明言した。同人は其の足に凍傷を蒙り、劇烈なる苦痛を感せしが、堯爾として此の言を發せるのである。夕刻宣教師は一同と共に讚美歌を唱へ、之より毎日朝夕二回づつ、之を行ふことゝなし、神明は實に一行を幫助し給へりと、彼等は自信の念堅く、一同は安寧幸福を得て満足した。

十三日の正午頃に至り、天候快晴となり、海面は見渡す限り結氷を見るに及んだ。マークとジョーとは踏査の爲め小丘に登り、歸來りて不快の報告を齎らし。

「此の地より何れの方向へも一片の氷塊を見ず。ヌアソルナツクの海岸ですら氷は全く吹き拂はれしならん。」

と告げた、是に於て一行はキグラベイト山を横断して、歸途に就くより外、他に何等の手筈なしと決心した。

當日カツシギヤツクは宣教師に哀願さへすれば、或は定量以上の食物を得らるべしと思惟して、其の身は甚だ飢餓に迫れる旨を愁訴したるに、リービス等は最早貯量之れなければ、忍耐せられたしと説諭した。従來食物の分配ある毎に、同人は慍だしく食食して、先づ自己の定量を平らげ、尋て宣教師の残存したる食物を見れば、何等のものを問はず、必ず之に手を出すを例としたが、茲に嚴重なる叱責を受けて、爾後其の不躰の風儀を改むることができた。

當日エスキモー人は魚皮より製作されたる古革片を食した。开は實に乾燥無味の食品である。一行は此の如き粗末の食物を喫する間、低調の鼻歌を吟咏して

「汝は少時の前に唯一の卵囊なりしに、今我等の食物となつた。」

と唱へる。夕刻に至り海面に薄氷の張詰めたるを發見した。十四日の朝、海上は悉く堅氷を以て覆はれたるも、天候は再び暴風雪となつた。

エスキモー人の元氣は當日に至りて甚だ沈鬱となり、各自憂悶して雪窖を去ること能はざるに至つた。カツシギヤツクはリービスに提議して

「天候を善良ならしむるの方法は、予自ら之を試みて見やう。是は予が魔法家として天候を善良ならしむべく、自己の技能を實驗する好機會である。」

と述べた。リービスは之に對し

「汝の不信心の實驗は之を用ゆるに足らざるが、天候は神明に信頼すれば恢復すべからん。」

と答へた。

カ「基督は果して善良の天候を得べきや」

リ「天地間の威力は凡て基督の手中に歸するから、其の威力の上に關係せんと基督は祈願し給ふのである。」

カ「予は他日此の事をセグレクに在る我が國人に語らん」

リ「我が救世主たる基督は凡ての人類を愛し、彼等をして永遠の災禍より脱却せしめん爲め、自ら、其の血液を濺ぎ給ふた。今日我等は此の如く苦難續出の中に在りて、唯一の希望を以て基督に信頼して違ふ所ないのは全く此れが爲めだ。」

此の日エスキモー人は古き不潔なる耗損せる毛皮を食した。蓋し其の毛皮は彼等の昨日まで糧となせるものである。

十五日に天候益々兇暴となつたので、エスキモー人は絶へず失望し、沈思せる如く見へた。然れども彼等は一種の善良なる性質を有した。彼等は何れの時を問はず、欲する儘に睡眠するの癖がある、而して必要に際しては、晝夜を通じて熟睡し得る奇習がある。

當日の夕刻、天空晴れしかば一同大に愁眉を開いた。マークとジョールとは踏査の爲め出で去り、直に歸舎し莞爾として

「結氷は非常の厚さに張詰めたれば、最早橇を滑走するに充分である」と云つた。

此の長時日の逗留中、犬は繫縛されしまゝ既に四日間に及びしが、今其の快駄を要するを以て、態と之を解放せずして、宣教師は一頭毎に少量の食物を與へた。此の時氣温は意外に高くして、却て一行の苦痛を感ずること更に甚だしくなつた。开は室内人體の温氣は屋背の氷雪を融解し、之が爲め露滴の落下すること止むときなく、漸次にすべての物品を濡らしたからである。リービスは此のときに於ける状況を記して左の如く云つた。

「我等は最大の忍耐を遂げざるべからざるを思ひ、苦辛に堪へた。何となれば此の時一行は乾けるものとは一本の糸もなく、横臥するにも濡らざる處がないからである。

十六日の早朝天氣快晴となつたが、突は時々雨の如く降つた。ジョールとカツシギヤツクとは、之よりヌアンルナツクの道路を経て、オクカクに其の旅行を遂げんと、風雪を犯して突進せんとした。マークは之と意見を異にして、烈風の爲めチツケラスクの海岸は氷塊悉く吹き拂はれ、或は上陸すること能はざる如き場合なしとも測られざれば、北進することは暫らく之を見合せるに若くはない。然して之より南下することは至て安全にして、キグラベイト山を迂回して、容易に歸途に就くことが出来ること云つた。宣教師はオクカクまで北進を試むべしと極力勸説する所あつたが、マークは頑として之に應じない。但し宣教師は同地方の状況を熟知せざるを以て、更に自説を固執するの勇氣がなかつた。今一行の苦心は其の家郷に歸らんと欲して切なる意思あれども、又前日の如き冒險を試むべきを考へ、身體戰慄する程である。且つキグラベイト山麓の氷海は、昨今新に凍結せることなれば、萬一危険の虞なしとも斷言すべからず、兎やせん角やせんと兩人煩悶して、突嗟に決心の色も見へなかつた。依てターナーはマークと同行して氷海を滑走せば、氷厚は必ず堅牢ならんと述べたので、遂に一行は愈ナインに戻ることに決着した。

十七日風力益々劇烈となり、飛雪と霰雨とは時々襲來したるが、午後二時半に至りて止んだ。是に於て一行は旅程に上つた。マークは橇の前に座を占め、キグラベイト山を迂回して、良好なる通路

と見れば山野溪谷を論せず走り、一時頃一行は全く飢餓に迫りつゝ、海灣に到着した。茲に彼等は平滑なる氷上に休憩所を發見し、先づ貯藏せる殘餘の食品を各自に頒ち、温かき一杯の珈琲を飲んで一同元氣を快復し、之よりナインまで少しも休止せず、快駛を續けんと決心し、多大の困難を凌ぎて、同夜十二時を以て一行は恙なく同地に歸著した。

ナインの同僚は一行の出發後、土人等の風説を耳にし、一行の前途を氣遣ひ、嚮に海上にて一行と行逢ひたりといへる土人に就きて、事の詳細を質せるに、同人は曖昧なる語氣を以て、

「小奴はリービス氏等の一行と、キグラベイの高山を距る數海里の海上にて出逢ひ、大暴浪の襲來せんことを一行に告げ、歸途に就かんことを勸告せしも聽かれなかつた。」

と述べた、同僚等は此の言を聞き驚愕し、殊に遠征者の妻女は其の良人の或は危禍に罹れるにあらすやと憂慮し、哀泣其の極に達せるとき、一行は突如として歸來りたれば、彼等の喜悅は一方ならず、悲痛哀絶の舞臺は一變して、和氣藹々たる幸福の巷となつた。嘗てリービスの依頼を受け、毛衣の製造に従事せるエスキモー人の妻女があつた。其の時注文品が出来たるを以て、其の婿はリービス夫人の許に之を携へ來り、夫人に語つ

「予は我が妻の努力に依りて、若干の貨銀を貴女より給與せらるゝことを喜びます。」

と述べた。夫人之に答へて

「暫らく待たれよ、我が主人は如何なる契約をなせしや知らざれば、主人の歸宅次第直に通知せん。」

と告げたるに、エスキモー人猶豫なく、

「サミユール」(リービスの事を土人斯く呼ぶ氏とウイリヤム氏とは、最早當地に歸來せぬであらう。)

夫人「何にと、一歸らぬとな！何故に然か云ふのであるか？」

二三の問答を交換したる後、エスキモー人は低聲にて夫人に囁き。

土人「サミユール氏とウイリヤム氏とは最早此の世の人でない！一行の遺體は氷と風濤との爲め破壊され、鱧の腹を肥やせしならん。」

夫人は此の不慮の悲報に接し絶倒せん許りに驚嘆し、親族知人を會し、彼のエスキモー人に對して其の風説の出處を問糺したるが、其の答辨は更に要領を得ない。同人は宣教師の死亡せることを左も確知せる如く装ひ、其の歸來せざるを見て愈々之を證するなどと主張した。而して此の如く暴風雪に遭遇して、生命を全ふすべしとは思惟せず、斯く言ふ予も當地の海灣に近づくに及んで、猛烈

なる災害に出會し、僅に身を以て免かれたる程なりと述べた。
 されば彼等は一行の恙なく歸來せるを見て、大に之を優遇し、ナインの全家族は神明に感謝して其の幸福を喜んだ。蓋し暴風雪の際、同地は二三の島嶼灣外に竝列せる爲め、外洋に展開せるキグラ
 ペイト附近の海面の如く、風波強暴ならざりしと雖も、家族等は一行の運命如何なるやと苦慮し、
 日夜絶へず、非常に恐懼して居たのである。然るに此の機會に乗じ、エスキモー人は流言蜚語を放
 て彼等を喫驚せしめ、危惧の念を高めたる際なれば、其の喜悅の尋常ならざりしは、推察に難から
 ぬのである。此の故を以て一行中のエスキモー人まで、神力の絶大なるを讚嘆して止まず、遂に救
 命の恩を謝して基督教徒となれりと云ふ。

十一 ケプテーン・クークの遠航

幼時の航海及び英海軍に於ける閱歷

ケプテーン、クークは其の名をジエームスと云ふ。英國ヨークシャー州マールトン村の一農夫の
 子にて千七百二十八年の出生である。幼時雜貨商の家に丁稚奉公を營んだが、自ら悟る所あつて之
 を辭し、生來海上生活を望むより、商船に乗込みて其の水夫となり、熱心勉強して勞役に服し、
 北海或は波羅的海に巡航して、貿易業に従事せること數年であつた。其の間上陸の機會あれば、
 讀書を勉め航海術を學び、銳意精勵して後遂に運轉士に進み、其の成績拔群なりしかば、千七百五
 十五年英佛戰爭の際、特に擢用せられて英國海軍に投じ一等水兵となつた。時に年二十七歳にして
 間もなく、其の俊才を認められ、航海長從屬に任じ、主として北米セントローンズ海灣、並にニュ
 ーファウンドランド島沿海の測量に執掌すること前後八年に及んだ。

千七百六十八年クークは海軍大尉に進みインディーボア艦長に選ばれ、南太平洋中のタヒチ島に航
 し、金星の日面通過の觀測を行はんが爲め、王立學術協會の學者數名と共に派遣の命を蒙り、同年四

月十三日に同地に到着し、直に観測に従事して好果を得、更にタヒチより南西に航して陸地探検に努め先ブニージーランドに至り、沿岸を周航して之を實査し、尋て濠洲に達して東岸海面の測量を行ひ、北上してニューギニヤと濠洲とを分界せる、トレス海峡を發見し夫より蘭領東印度諸島の沿海を徘徊して、爪哇島バタビヤに到り、更に印度洋を横断して喜望峯に達し、亞弗利加を迂回して、千七百七十一年を以て英國に歸航し少佐に昇任した。而してクークは其の翌年レゾリユーシオン及びアドヴェンチュアアの二艦を率ひて、第二回遠征の途に上り、南大陸探検の目的を以て、千七百七十三年一月に南極圏内に入り、氷海を跋涉して具さに艱難を嘗め辛苦と戦ふこと一年餘であつた。其の翌年十月ニュージランに寄港して、炭水糧食を補充し、更に防寒準備

クークンテブケ



備を完全にして、乗艦レゾリユーシオンを指揮して再び南海の探検に従事し、氷海上に南進或は東征して風波氷雪と苦闘し、千七百七十四年一月西經百〇六度五十四分、南緯七十一度十分の高緯度の地點に達し、前人未知の境域に踏込んだ。かくてクークは長時日間、南海の寒風に身を曝らし、索寞陰氣なる南太平洋の中に、心思を凝らして各島嶼を探検し、諸方面の水路を開き、測量事業に於て得る所頗る多大であつたが、天候不良の季節となりたれば、一時之を中止し、次の春暖を待ちて、南米ホルン岬の南方に位する、高緯度の海面を巡邏して、南ジョルジャ島を發見し、更に南大陸の一部なるサンドウィッチランド、其の他大小幾多の島嶼を探検し、千七百七十五年七月を以て、本國に歸著して、而してアドヴェンチュア艦は嚮きに南極の海上に於て、クークの乗艦レゾリユーシオンと分れたる後、各處の測量を行ひ南米マゼラン海峡を通過して、クーク歸著の前年に歸國して居た。クークの第三回航海より歸國するや、會々病を得てグリーンニッチ病院に投じて治療を受け、一時重症に陥りしかば、政府は彼の功勞を認めて海軍大佐に任じた。然るにクークは其の後健康を恢復して、其の翌年又一艦隊を率ひ太平洋の巡航を命ぜられ、北米北岸に於ける水路の探尋に従事することゝなつて、自らレゾリユーシオンを指揮して、千七百七十六年七月プリマウス港を解纜し、他

の一艦デイスカバリーは艦長クーク大佐之を指揮して、數日を隔て、同地を發し其の後を追ひ、兩艦はケーブタウンに於て相合した。此の第三回航海に於てクークは太平洋を航して、先づ布哇諸島を發見し、更に北米西岸に到り、北緯四十五度以北の海面を精測して北極の方に達したるも、氷海に於て船は氷塊の爲めに封鎖せられ、進むことが出来ない、由て此の探検を中止して再び布哇に戻り、沿海の測量に従事中土人と確執を生じ、不幸にして蕃人の毒手に斃れた。

布哇の發見

クークの第三回航海に於けるや、ソシエテ諸島より北方に航すること六週間許にして、無人島なる珊瑚礁の外一陸地を見ない。由て無名の珊瑚列島中の一港灣に碇泊し、同地をサンドウィッチ諸島と呼んだ。

此のとき同島民は英艦の入港を見て、毫も驚き恐るゝの色なく、從容として多人數の土人相携へて艦内に來り、始めて珍奇なる構造、壯麗なる粧飾、其の他美器精具を見て大に驚愕し、事々物々に對し、奇異の感想に打たれざるはなかつた。彼等は英國水兵の面貌手足をも、一々精細に檢視し、食品の種類如何を質問し、其の乾麵包を喫食するを見て、彼等は果膏、野菜、馬鈴薯及び豚等を贈

與し來つた。

其の後數日の間此の地に留り、艦員に休養の時日を與へ、暫らく閑暇を得たる後、クークは船をヌートカ海灣に回航せしめたるに、同地に於て米國土人に酷似せる銅色人種の大群を見た。彼等野蠻人は額骨秀で、蓬々粗雜なる頭髮を長く垂らし、其の面上に黧青を施し、身體全部は赤裸々であつて衣類を用ひず、布哇人とは全く別人種なる如き、殺伐獯猛の相貌をなして居つた。

クークの人格

クークは英國海軍將校の特質を代表すと云はれたる程、嚴格方正の士人であつて、頗る毅然として犯すべからざる人であつた。夫故に他人の惡事非行をなすを見れば、之を叱責し之を懲戒するに少しも假借をなさぬ。犯罪者の如きに對しては、其の身分の上下を考慮し、情狀の輕重等を斟酌すると云ふ、寛容の徳量が更に之れ無かつた。

古來南洋に於ける食人蠻族は、外國人の物品を偷竊するを以て一種の功業と心得、却て之を以て善行美擧となすの習慣は、何れの諸島も同様であつた。然るにクークは是等無智頑迷の蕃民をも、凡て歐洲人に對する如く嚴酷に所罰して、匡正膺懲の實を示さんと試みたるは、非常なる誤解である。

クークは智慮周密なる賢人なりしも、彼の態度は傲慢不遜にして聊か穩當を缺くの嫌があつた。之が爲め布哇土人の感情を害すること甚だしく、遂に其の身を亡ぼしたる所以である。是より其の事件の詳細を語らん。

クークは曩日ソシエテ諸島に於て、同地土人の爲めに其の愛玩して飼養せる一羽の孔雀を盗み去られたるとき、酋人を捕へて艦内に抑留し、百方之を詰責して犯人を尋ね出すべきことを命じ、漸く孔雀を取戻すに及びて其の縛を解いた。艦員の心あるものは之を見て、密かに彼の短慮なるを惜んだ而して布哇島に於ては一隻の端舟を奪はれたるを怒り、其の懲戒の處置として、國王を自艦に引致せんと欲して上陸し、土人と鬭争し圖らずも之が爲めに自己の生命を棄つるに至つた。是れ一時の過失と言ふべきも、徳望の乏しきに依るのであらう。

事の起因は左の如くである。クークは連日從事せる水路の探尋を終り、布哇の南端に一良港を發見し、同所に碇泊した。同島には蕃民の數一萬五千餘を算し、舟艇二千隻を有して居た。時しも島俗海神祭に際したれば、多數の蕃民恰かも海豚の如く海上に出没游泳し、老若男女群集雜沓して舟艇を漕ぎ廻り、歡呼狂奔して相樂しむの折であつた。島民は英艦の入港を見て稍驚き騒ぎしが、應てクークは端舟に乗じて陸上に向ひぬ。酋長二名は之を見て白色の長桿を携へ、蕃民の群集せる海面

に在りて艦長を迎へ、乗艇の通路を開き導いた。而してクークは海岸に辿り著き多數の蕃民に接見したるに、彼等一同は砂上に平伏して敬禮の意を表した。此の時水陸のいづれを望むもすべて蕃民の集團である。或は屋上に或は丘陵に迄登攀せるものも少くない。暗黒色の裸體は蟻群の如く、蠢爾として各處に充滿して居る。而して之に近づくときは彼等は外國人に其の顔色を見らるゝを厭ひて、兩手を以て掩ひ隠し、粗朴の風が如何にも笑止であつた。

當時布哇の老王は他島に旅行し不在中であつたので、英艦の入港は其の臣僚中一人も之を顧慮するものなく、之を不問に附して居た。由て英國人は些の煩勞なくして、其の泊地に休養することが出来た。尋て國王が歸島するに及んで、相互の間に訪問の禮式を交換し、國王は英艦内に招待され、クークは幾多の將校と共に陸上の饗應に預り、豚の焼肉、馬鈴薯と車前葉とは常に國王の食卓を飾り、飲料として「コ、ア」乳汁等が供せられたるを見た。

嗚呼人情の冷熱ほど、其の反覆變化の甚だしきものはない。英人と布哇人とは此の如くして親密なる交際を結びしも、懇情漸く馴るゝに従ひて、互に輕侮の念を生じ、蕃民は嘗て英人を始めて見たるときは、恰かも天國の使者の如く思はれし程の好漢なりしに、今や濁世の小人にして姦邪諂詐を事とせる、穉惡人の如く其の眼中に映じた。艦員の必要缺くべからざる食品の如き、若くは人力

の加勢の如き、來航當時は至て親切に給與され補助されたるが、今は甚だ冷淡不快に取扱はれ、注々英人の要求が拒絶ざるゝことすらあつた。而して彼我感情の懸隔すること日に益々甚だしく、英人は銃に裝弾し或は小刀を携へて上陸すれば、土人は投石を敢てして敵意を表するに及んだ。或るときクーク艦の修理用に充つる爲め木材の必要に逼り、墓地の藩籬より一二株の樹木を伐採せんことを請ひしに、土人より素氣なく拒絶されしかば、更に他の場所より之を得んことを望みしに、是亦受理せられず、是に於てクークは大に怒り、突嗟に其の藩籬を破壊し、土人の尊崇する二三の偶像を掠奪し、僧侶の叱罵し島民の叫喚するをも、毫も預り知らざる爲して、艦内に引上げんと急遽歸艦の途に就きしに、折節暴風の妨ぐる處となり。再び陸岸に戻り來つた。されども艦員は糧食の補充と修理用の木材の必要に迫りて亦上陸したれば、葛藤更に紛糾を加へ、夜に入り端舟一隻を紛失した。

蕃民の襲撃並にクークの横死

クークは從來島民に對する處置が頗る緩慢なりと思惟し、猶一層の強壓手段を用ひて之を威嚇するに若かずと考へ、奪はれし端舟の還り來る迄、國王を艦内に抑留せんことを思ひ立ち、翌日港内の

各處に歩哨を配置し、自ら一隊の海兵を引率して王宮に闖入し、王に迫て共に來り且つ海濱に到らしめた。既にして蕃民は國王捕へらると聞き、大聲叱呼して急を報せしかば、多勢の蕃民忽ち麤集して石を投げ、クークの歸路を擁した。クークは益々激昂して之に抗し、海兵も發銃して之を防禦した。一石飛來つてクークの身體に中つた。クークは直に其の下手人を見出し之を射殺し、矢庭に海岸に到り將に乗艇せんとする一列那、憐むべし剛勇謹嚴なるクークは、蕃民の爲め背後より突き刺され、顔面を下にして海中に倒れ、忽ち絶息して不歸の客となつた。

クーク終年の齡正に五十二歳にして、即ち之より先き千五百二十一年四月菲律賓のマツタン島に於て、同じく蕃民の手に殞れたる彼の世界周航の率先者たる、マゼランと全く同一である。嗚呼同じく功勞赫々たる大航海家であつて、同じく東洋に於て望郷の鬼と化し、其の壽を同じくするは實に奇異である。

クークの死後、デイスカバリ艦長クラーク大佐艦隊を指揮して遠征を繼續し、カムチャツク及びピーリング海峡を巡邏した。後クラークも亦病死したれば、之をベトロバウロスキの附近に埋葬した。是に於てゴリア大佐其の後を襲ひ、亞細亞海岸を南下した廣東に寄港し、印度洋を横斷して遂に歐洲に歸航した。

クークの試みたる太平洋航海は前後三回に亘り、「マゼラン」に匹敵すべき偉業なること史上に顯著である。而して南洋諸島の發見多く此の俊傑に負ふのである。蓋しクークは堅忍不撓の氣力鐵石よりも剛強にして千辛萬苦を凌ぎ、能く至難なる遠航を成就し、太平洋の形勢を研究し、後世の爲め非常の功業を遺したのである。吾人今日海上に活躍せんと欲せば、宜しく彼の忍耐と努力とに對して學ばざるべからずである。

十二 ロード子ルソンの偉勳

英海軍に於ける閱歴及び英佛戰爭に於ける武功

ロード、ネルソンは其の名をホラシヨと云ふ。千七百五十八年英國ノルフォーク州のバーナムに生る。年十二にして身を英國海軍に投じ、千七百八十年南米アルジェンチン國サンジュアン及びニカラカ湖上に於ける、西班牙砲臺の占領に従事して功績を露はし、越て千七百九十三年英佛兩國は兵火の間に相見へ英軍ツーロン占領の後、ネルソンは陸兵をネーブルスに護送するの任に當り、始めてサー、ウイリヤム、ハミルトン公使並に同夫人の知遇を得、其の歸航の途上佛國軍艦四隻と戦ひて奇捷を博し、提督ロードに迫てコルシカ島バスチャの封鎖を強行し、勇を鼓して力戦し、之を陥落するに至りしが、不幸にして頭部を傷つけ、遂に右眼の視力を失つた。

爾後ネルソンはツーロン附近の海面に於て佛國艦隊と砲火を交へ、千七百九十六年サージョン、ジャビス提督の麾下に屬して、益々其の武勇を發揮したるが、時にジャビスは佛西二國の聯合艦隊に壓迫せられ、從來英軍の固守せるコルシカ島を放棄するの止むなきに陥り、次てエルバ島をも